

3120~

昭和 58 年度

# 都 倫 研 紀 要

第 22 集

東京都高等学校倫理・社会研究会



## 困難を開拓する

会長 寺島 甲 祐

「現代社会」も二年目を迎え、移行期の困難を見事に乗り越え、その授業実践も一段と深まりを持つことができるようになったが、今年からは選択の「倫理」も新たに登場してきて、われわれの研究会も両科目にわたって、研究を開始しなければならなくなってきた。

「現代社会」も「倫理」もその指導目標は殆んど同じであって、「社会と人間に関する基本問題」や「人間の存在や価値について」理解や思索を深めることを目的としている。敢えて区別して考えてみると前者はより具体的に事実科学に立脚して問題を追究し、後者は哲学的に価値科学に基づき人間存在を探究していくものであると言えるかと思われる。しかし、人間存在や価値の問題を高校生の精神的発達段階にマッチさせて指導することは至難の業である。例へば、存在論一つを例にとっても、論理的存在論から物理的、社会、人格的存在論まで、さまざまな角度からの存在論が学問的に存在し、また、価値論にしても、経済的価値論から始って、情動的、知的、倫理的、宗教的価値論まであり、しかも、これらの価値が、シエラーが指摘するように客観的に序列化しているものと把握すれば、これを統一的に、たまたま体系的に生徒に解り易く指導することは、極めて困難である。生徒の理解を無視して、幾ら高論、高説、名講義をしても総て零である。ここにわれわれの教科の難しさがある。況して、広領域科目の「現代社会」に於いておやである。

「これを考えること長ければ長いほど、益々新たにして且つ増大し来る困難の念を以って心を充たすものが……」(カント)といった感をもつものが、われわれの教科・科目である。幸い、都倫研の有志が常に先達となり、この困難を開拓し、乗り越えて下さるのに深く感謝し敬意を払っている一人である。その研究集録が本紀要である。ご助言、ご教示をお願いする。



「社会」という言葉をめぐって	荒川工業高校	富塚 昇…	62
ポーログって知ってますか	竹台高校	斉藤 規…	64
文化学習にあたっての留意点	竹台高校	青山純子…	67
〔第2分科会……授業展開の研究〕			
研究経過報告	田無工業高校	辻勇一郎…	69
グループ研究を生かした現代社会の授業	江北高校	宮崎宏一…	72
「自由」について	駒場高校	細谷 斉…	77
「日本の生活文化と伝統」学習	田無工業高校	辻勇一郎…	82
現代社会のグループ研究	玉川聖学院	幸田雅夫…	86
〔第3分科会……文献・資料による指導内容の研究〕			
研究経過報告	秋川高校	水谷禎憲…	91
其角の仏陀観について	葛飾商業高校	浅香育弘…	95
性別役割分業について考える	京橋高校	飯岡祐保…	101
「現代社会」 — 夏休みの課題から —	北野高校	志村忠彦…	105
現代社会「世界の諸地域の文化と文化交流」の類型化の方法について	水元高校	大野稻一…	109

…………… 特集 「私にとっての「現代社会」」 ……………			
「現代社会」の授業をどう改善していくか	育梅東高校	伊藤駿二郎…	117
「現代社会」を考える	小岩高校	小川一郎…	120
いまだ試行中なり・現代社会	共立女子高校	館入慧子…	123
<現代社会>から「現代社会」へつなぐもの	東村山高校	新井 明…	126
「現代社会」的私的体験	秋川高校	水谷禎憲…	129
「現代社会」授業覚え書き	豊島高校	草名次夫…	134

V 東京都高等学校倫理・社会研究会規約	138
事務局だより	140
あとがき	141

# I 研究主題と研究体制および 紀要の編集方針

研究部長 工藤文三(三陽)  
研究副部長 小嶋 孝(東) 和田倫明(四谷商)  
三宅幸夫(砧工業)

## 〔本年度の研究主題〕

「現代社会」「倫理」指導の具体的展開

## 〔研究主題設定の趣旨〕

本研究会は昭和37年の創立以来、「倫理・社会」教育の深化と発展のために実践的立場から一貫した研究活動を続けてきた。この間会員の「倫社」教育へかける熱意と精力的な取りくみは「倫社」の高校教育への定着を促し、また学習者である多数の生徒に「よく生きる」ことの意味を考えさせてきたといつてよいであろう。また今回の学習指導要領の改訂に際しては、いち早くこれに対する研究体制を組み、研究成果の継承をはかるべく、新科目のねらいや、指導のあり方について論議を深めてきた。

本年は新指導要領が実施されて2年目にあたる。日々の教育実践をふり返ってみると、新科目のねらいをどう授業として具体化すればよいのか、生徒を原点においた指導はいかにあるべきか等々、授業のあり方について様々な試みがなされているのが現状であろう。そこで我々の当面する課題は科目のねらいに即した指導の内容と方法を確立し、「現代社会」と「倫理」を生徒にとって魅力ある意義深い科目として高校教育の中に定着させることにある。そのために必要なことは、一時間一時間の授業を自己吟味しながら積み重ね、教材化や授業の展開に独自の方法を創り出していくことであろう。このような趣旨をふまえて、本年度は「現代社会」「倫理」指導の具体的展開」という主題を設定し、以下の三つの点に重点をおいて研究を進めることにした。

- (1) 「現代社会」「倫理」のねらいを明確にし、これを生かした指導内容の構成、教材化はどうかあるべきかを、実践的観点から研究する。
- (2) 高校生の意識や発想、関心、学校の実状を考慮した授業はどうか構成されればよいか。指導内容の精選や教材化の工夫について考える。また生徒が「自己の

生きる社会の諸問題を自らとらえ、考える能力を養うとともに、自らの課題として取り組んでいこうとする態度を養う」（『高等学校学習指導要領解説』）ための指導はどうあるべきかを考察する。

- (3) 「現代社会」の指導を前提にした「倫理」の指導はどう展開されればよいのか。「現代社会」第Ⅱ分野や従来の「倫理・社会」との関連を明確にしなが  
「倫理」指導の具体化を進める。

### 〔研究体制〕

以上の研究主題・研究の方向をふまえた上で、本年度は次の三つの研究分科会を設けることにした。

#### 第一分科会 指導内容と教材化の研究

「現代社会」「倫理」の指導内容を科目の理念の具体化という観点から明らかにし、これを授業として展開するための資料や教材の開発を推進する。また指導内容や構成や配列、各分野における指導の力点、教科書の比較検討、教材化の方法などについても研究を深める。

#### 第二分科会 授業展開の研究

「現代社会」「倫理」の具体的な授業展開を内容、形式、方法、評価等の観点から考察し、新しい授業のあり方を探る。また教科のねらいと、生徒の多様な現状に対応した様々な授業形態を研究する。

#### 第三分科会 文献、資料による指導内容の研究

「現代社会」「倫理」において指導の内容や視点を明らかにするために、新しく取りくみが必要とされている領域や単元（例えば「環境」「資源」「人口」「文化」「伝統」等）を中心に、参考図書や文献を通じて基礎的研究を進める。

### 〔紀要の執筆要項〕

本年度の紀要は、下記のⅠ・Ⅱを基本として編集いたしたいと思っております、Ⅰ・Ⅱいずれかを選んで、御執筆下さい。

#### Ⅰ 個人研究レポート

- (1) 本年度の研究主題は「現代社会」「倫理」指導の具体的展開です。この主題にそって、授業展開例、年間指導計画、教材の選択、生徒の意識との

関連などについて、レポートをまとめて下さるようお願いいたします。また、授業を展開する上での工夫・方法などについても結構です。

- (2) 御執筆の際は、見出し、項目などを立てて、できるだけわかり易くしていただければ幸いです。
- (3) 枚数 同封の原稿用紙(33字×27行の枠内)で3~6枚をめどに御執筆下さい。

(44字×36行の枠は全倫研用ですので御注意下さい)

## Ⅱ 特集 「私にとっての「現代社会」」

— 視点・内容構成等 —

- (1) 「広い視野に立って、現代社会に対する判断力の基礎と人間の生き方について自ら考える力を養う」(学習指導要領)ことを目標にかかげた「現代社会」ですが、この科目には今なお、様々な論議があります。しかし、私達には上記の目標に向って日々の授業をどう具体的につくり上げていくかが課題となっています。そこで、先生方が「現代社会」という科目をどうとらえ、どう具体化しているかを、年間計画、授業展開、教材(資料)の選択とその扱い方、その他授業展開上の方法・工夫などについて考えておられること、または、既に実践された事例などについて、御執筆下さるようお願い申し上げます。
- (2) 枚数 同封の原稿用紙(33字×27行)で2~3枚をめどにお願いいたします。
- (3) 締切 昭和59年1月15日

## 研究分科会参加者名簿

◎印 分科会世話人 順不同

### 〔第1分科会〕

勝田泰次（本所）	新井徹夫（玉川学園）	◎増淵達夫（片倉）
館入慧子（共立女子）	◎亀田文保（福生）	杉原 安（保谷）
斉藤 規（竹台）	渡辺 潔（宍山）	吉野 聰（北多摩）
工藤文三（三鷹）	和田倫明（四谷商）	吉澤正晶（大森）
井上 勝（八王子東）	渋谷紀雄（墨田川）	菊地 堯（小平西）
富塚 昇（荒川工）	市野武男（宍山）	木村正雄（木森東）

### 〔第2分科会〕

内田君夫（攻玉社）	市川仏乗（駒大高）	小川輝之（清瀬）
◎辻勇一郎（田無工）	幸田雅夫（玉川聖学院）	小島恒巳（小川）
奥原千年（本所工）	◎古山良平（小金井北）	杉本 仁（日野）
吉川素身（王子工）	小嶋 孝（東）	蕪木 潔（九段）
及川良一（江北）	小笠原悦郎（日大二高）	木村正雄（大森東）
細田盛夫（練馬工）	細谷 齊（駒場）	

### 〔第3分科会〕

秋元正明（学芸大附属）	佐藤 勲（城南）	河野速男（明正）
杉本 仁（日野）	尾崎充昭（深川）	新井 明（東村山）
葦名次夫（豊島）	吉川素身（王子工）	井上勝（八王子東）
渋谷紀雄（墨田川）	富塚 昇（荒川工）	◎管野広由（京橋）
三宅幸夫（砧工）	小林豊実（大崎）	鈴木一郎（北野）
飯岡祐保（京橋）	◎水谷禎憲（秋川）	志村忠彦（北野）
溝口洋仁（東村山）	蛭田政弘（白鷺）	

## Ⅱ 昭和58年度研究会活動の概要

〔第1回〕 5月24日(火) 総会・研究発表大会 於東京都教育会館

### 1) 総 会

会長挨拶	会 長	寺島甲祐氏
昭和57年度会務報告	都立三田高校	海野省治氏
昭和57年度決算報告並びに監査報告		同
昭和58年度役員改選並びに事務局人事		同
昭和58年度事業計画審議並びに研究計画案審議	都立三鷹高校	工藤文三氏
昭和58年度予算案審議	都立三田高校	海野省治氏

### 2) 研究発表並びに研究協議

昭和57年度研究活動の総括	都立豊島高校	葦名次夫氏
「現代社会の基底」	駒沢大学高校	市川仏乘氏

### 3) 講 演

「映画で世界をどう理解するか」	映 画 評 論 家	佐藤忠男氏
-----------------	-----------	-------

〔第2回〕 6月24日(金) 第1回研究例会 於都立白鷗高校

### 1) 公開授業

「日本の文化と伝統」(「現代社会」)	都立白鷗高校	蛭田政弘氏
--------------------	--------	-------

### 2) 研究発表

「『現代社会』と教材づくりの技術」	都立竹台高校	斉藤 規氏
-------------------	--------	-------

### 3) 講 演 「近代哲学の今日的課題 ——比較哲学の視点から——」

東大名誉教授	山崎正一氏
--------	-------

〔第3回〕 10月31日(月) 第2回研究例会 於都立大崎高校

### 1) 公開授業

「実存主義」(「倫理・社会」)	都立大崎高校	小林豊夷氏
-----------------	--------	-------

### 2) 研究発表

「フッサールにおける基礎概念」 都立白鷗高校 橋本克己氏

3) 講演 「社会学における人間像の変遷」

お茶の水女子大助教授 宮島 喬氏

〔第4回〕 第3回研究例会 全倫研秋季大会と共催

11月25日(金)・26日(土)

於東京学芸大学附属高校

1) 全体協議

テーマ 「『現代社会』のねらいをどう生かしていくか

——現状と展望——」

問題提起 宮城県立仙台第三高校 鈴木昭逸氏

東京都立江北高校 宮崎宏一氏

東京都・駒沢大学高校 市川仏乗氏

司会・総括 東京都立教育研究所 中村新吉氏

2) 分科会協議

第一分科会 「『現代社会』の視点と指導内容の構成」

問題提起 栃木県立足利女子高校 大木健司氏

神奈川県立生田東高校 高山久徳氏

第二分科会 「生徒の実態に応じた『現代社会』授業展開の工夫」

問題提起 静岡県・浜松海の星高校 吉村章司氏

東京都立江戸川高校 泉谷まさ氏

第三分科会 「生き方を考えさせる『現代社会』の指導」

福島県立安積第二高校 庄司一幸氏

千葉県・日大習志野高校 小西史朗氏

3) 公開授業

「景気変動と安定化政策」 (1年「現代社会」)

東京学芸大学附属高校 秋元正明氏

「大正デモクラシー」 (1年「日本史」)

同 広瀬隆久氏

「国際社会と国際法」 (3年「政治・経済」)

- |             |            |           |
|-------------|------------|-----------|
|             | 東京学芸大学附属高校 | 笠見正保氏     |
| 「日本近代の成立過程」 |            | (3年「日本史」) |
|             | 同          | 磯貝富士男氏    |
| 「東アジアの地誌」   |            | (3年「地理」)  |
|             | 同          | 長坂政信氏     |
- 4) 研究協議 公開授業に関する研究協議
- 5) 記念講演  
「創造的に生きる——禅とキリスト教に学ぶ」  
上智大学文学部教授 門脇佳吉氏
- 6) 臨地見学  
「異国の文化と貿易港をめぐる——横浜」  
横浜税関——新港埠頭赤レンガ倉庫群——県立博物館——シルク博物館——横浜港——外人墓地

〔第5回〕 2月10日(金) 第4回研究例会 於都立小川高校

- 1) 公開授業  
「平和を願って」(「現代社会」) 都立小川高校 小島恒巳氏
- 2) 研究発表  
「高校生の生活」 都立成瀬高校 成瀬 功氏
- 3) 講演  
「ささやかな遍歴」 都立墨田川高校長 増田 信氏

(第3回研究例会の記録は全倫研紀要に記載)

### Ⅲ 研究例会報告

〔総会・研究発表〕

#### 「現代社会」の目標と構成

駒沢大学高校 市川 仏 乗

目標にはじまって目標におわる

1. 目標の確立が他のすべてへの配慮に先立ってなされること。

a 人間は本質的に目的志向的であることは、マルクスや、ロジャースをはじめ多くの人々が、それぞれの間人論の核心においていることは周知のことであろう。わたしたちの日々の営みは、何らかの価値を実現すべく目的をめざした行動である。目的を持つことによって、わたしたちの生活は、その目的との関連において意味づけられてくる。

b ものごとは、必要（欲求）のあり方によって多様なあらわれ方をする。木で作られているあるものは、書くための台を必要としている人には机としてうけとられ、寒さにこごえている人には、燃料としてうけとられるであろう。英単語を2000語身につけているばあい、日常会話のためならば、それで十分間に合いと評価されるだろうし、大学入試のためならばそれだけでは、とうてい間に合わないとい評価されるであろう。

c 視点によって、対象ははじめて自らを開示する。空気という物質は物理学という視点からは、流れとか、圧力とかいった運動の法則として自らを開示するし、化学という視点からは、 $O \cdot H \cdot N$ といった組成において自らを開示するのである。

視点は、人間の営みの中では、実現すべき目標となる。わたしたちは、目標実現という角度（視点）から、われわれのおかれた状況をとらえようとする。状況のなかにある目標実現に不利な条件を克服し、利用できる条件を活用しようとする。状況は目標との関連においてはじめて自らをあらわにする。目標の確立がなければ、状況は依然としてカオスに止まらざるをえない。目標はまた、その人に

とって必要であるから目標なのであって、彼にとっては価値である。

かくして、目標は現実認識のための視点であり、価値尺度である。ところで、人間ないし社会において何が価値であるかという価値検討のための価値の理論は、別にあらためてとりあげられるとして、ここでは、社会認識のためには、何を措いてもまず目標の定立がなされなければならないということが承認されることになった。

2. 「現代社会」の統一目標を、「人間の権利」の学習におく。

ひとりの人のいのちは、その人にとってはまさに絶対の価値である。そして人生の目的が考えられるとすれば、自己実現がそれであろうか。ひとりひとりが、ひとびととの人間的な交流を通じて自分が必要なものとして意味づけられること。自分の創意工夫によって、創造性が高められ自分の可能性を無限に展開していくこと。そういう生きがいのある生活の中で自己実現が達成されていくのであろう。

そのような人間的な生活が、社会的要因によって制約されるときに「人間の権利」として意識化され、問題化されてくるのであろう。

ここで起りうるであろう疑問なり反論にふれる必要があろう。「権利だけを強調して、権利に伴う義務・責任について触れないのは、片手落ちではなからうか」という疑念である。このばあいの権利や義務は、社会生活上の契約関係における権利・義務をとりあげていると思われる。

本稿での「目標としての権利」は、もっと本源的なものを意味している。社会契約説における自然権に近いものである。この観点からいえば、わたしたちは、むしろ人間として生きる義務を負っているのだともいえよう。

さらに人間と自然の生態系との調和的共生という問題も、わたしたちの善意や努力だけではどうにもならない。資本・経営・政策に対して権利として要求をかけたければならないような事柄がほとんどであるといわざるをえない。こうして「人間の権利」という価値・問題意識・目標において「現代社会」をとりあげることになる。

3. この目標を「現代社会」に関連する全領域にわたって徹底させる。

a 内容構成の基準 指導要領の目標のところに「人間と社会についての基本的な問題」をとりあげると述べている。これを更に限定して「人間の権利」を実現するために必要となる基本的な、人間と社会についての諸問題をとりあげて

構成する。こうして基準にそって、首尾一貫した構成が可能となる。「現代社会」の内容は、社会科の全領域にわたっているので、焦点がぼけてしまう傾向をもつが、基準をきちんと設定することによって、それを未然におさえることができる。

b 学習の視点 「人権」という視点・問題意識で、それぞれのテーマがとりあげられる。明確な問題意識で意識的にかつ主体的に学習にとりくむことができる。

c 「現代社会」の統一テーマである。 このことは、目標がまた学習の対象ともなる。

「人権」という価値が、硬化したドラマとしてでなく、学習内容のひとつひとつを消化していくなかで、吟味され、深められ、再確認されて、人間と社会の全領域において、純化され、豊富化されて、ほんとうの人間のあり方、理想社会のイメージとして結晶する。そのイメージが、あらたな価値視点となって、その実現へと向う目標ともなり、現代社会に生きる人間としての主体的な態度形成へとつながる。

d 「現代社会」の科目としての独自性、主体性のかくとかく。

教材化については、学問の最高の達成から学ばなければならないことは当然のこと指摘するまでもないことである。その際、たとえば、文化人類学から学ぶとしても、文化人類学そのものを教えるのではない。「人権」という角度から学問の成果を利用するのである。「人権」という視点において、この科目の有機的統一性が確保され、また、この科目の独自性や主体性が確立されるのだと言えよう。

e 平和で民主的な社会を建設する主体的態度の育成は、社会についての単なる知的理解だけでは望めないだろう。「人権」という実践的な問題意識があって知的理解がなりたち、問題解決への主体的態度の形成へとつながる。

f 「人権」は、社会科の原点である。人間の社会がどのように変わっていくにしても、「人権」は変ることのない原理であり、理念であろう。したがって、また、社会科教師の主体性もこの一点にかかっている。今後も指導要領の改訂はおこなわれるであろうが、この根本理念に変更があろうはずはない。これをおさえておくことによって、改訂のたびに、そのうけとめ方とか、考え方とかいうことに足をとられて右往左往することから免れることができる。

#### 4. 「現代社会」の構造（目標に関連して）

一般にわたしたちの日々の営みは、三つの要因から成りたっていると考えられる。1. 目的。 2. 状況認識。 3. 行動である。

山頂を極めようとする。そのために必要な情報をあつめて、十分な検討をし、必要な装備などを含めて、綿密な計画をたてる。

その計画に沿って、登山に出発する。

わたしたちは、自分を含めた状況の中で、あれこれの目標を実現すべく struggle をしているわけである。

この行動の構造は、日常の営みにみられるだけでなく、思想にもおなじ構造が見られる。この思想は何を価値とし、その価値視座から、状況

がどのように見えたか。そして価値実現にむけて、どのような行動をわれわれに要請しているか。この三要因をおさえることによって、思想の全体がおさえられると思われる。

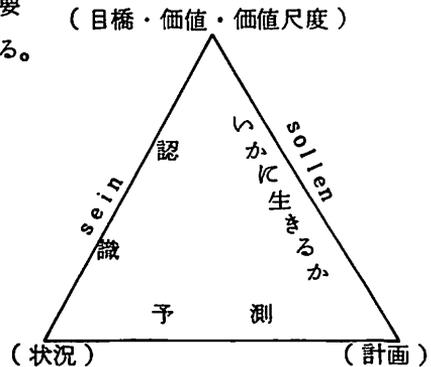
また、この三要因のうちのどれか一つをおさえることによって、他の二要因をほぼ正確に推定することができる。社会分析の文章を読むことによって、その背後にある価値観を推測し、どのような行動を選ぼうとしているかが予想できるのである。

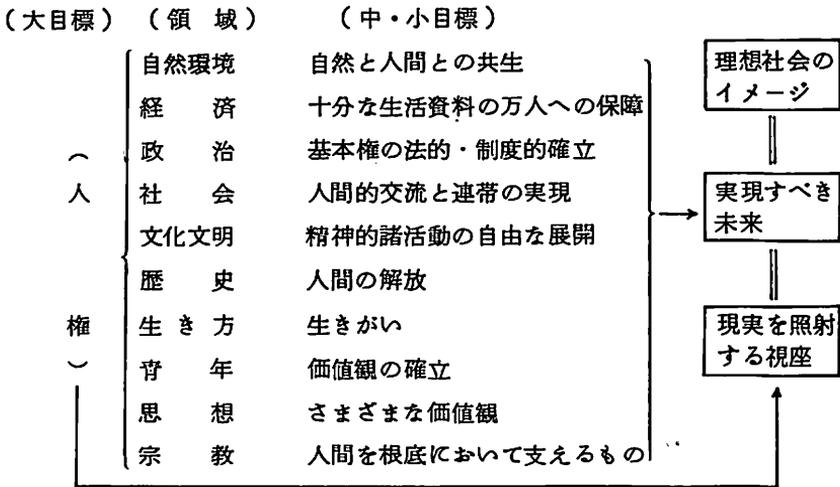
人間を評価するばあいも、この構造がいかされると思われる。彼は人生において、どこに価値を設定し、その価値視座から、「世界」をどのようにうけとめ、価値実現にむけてどのように生きているか。

「現代社会」も、このような構造としてとらえることができる。社会科の各科目内容で構成されていると同時に、価値について扱う部分、状況分析・状況認識部分、生き方をとりあげる部分として、構造化してとらえることができる。

#### 5. 目標による内容構成の試み

目標にはじまって目標におわるという本稿の命題を大雑把に図にした。





(それぞれの教材をくぐることによって豊富化・純化していく)

### 〔総会 講演(要旨)〕

## 映画で世界をどう理解するか

映画評論家 佐藤忠男先生

映画は青年を毒すものとの社会通念があるが、私は映画から多くのことを学び映画に接して良かったと思っている。話を映画にのめりこむことになったきっかけから始めたい。

戦争中私は予科練に行っていて、軍国少年だった。戦争が終っても社会の変化にすぐには頭の切換えができなかった。そのような時、私にとって戦後最大のカルチャーショックともいべき「事件」が私に起ったのである。それは、戦後初めて上映されたアメリカ映画「春の序曲」を観ていた時であった。主演女優であったダイアナ・ダーウィンを街を歩いているシーンで男達が彼女を振り返るのだが、その顔が皆爽やかなのである。当時、日本では男女が街を歩いていると猥

愛な目で人々から見られたものだ。この時、女の子を振り返えるのに猥褻な目よりも爽やかな目で振り返える方がより人間的だと思ったのである。戦時中私は英米人を「鬼畜」と教えられていたが、彼らはむしろ我々より人間的かもしれないと思った。異文化にいかにも無知であったかを思い知らされたのである。この「事件」以後私は映画から学ぶという姿勢を持ちつづけ、映画からカルチャーショックを受けつづけてきたのである。

当時の我々にとって映画に出てくる欧米の市民生活は憧れの対象であった。一方、日本映画は惨めな生活を描きつづけており、両者を見るうちに私はいつしか両者を比較考察する習慣を身につけていった。社会科学を勉強しても、本では得られないものを映画から学んだ。たとえば、一般的に西欧社会を個人主義、日本社会は家族主義を原理とするといわれているが、イタリア映画を観ていると、父親が無実の罪で刑に服している、その子供が、警察を頼らず真犯人を追求するという物語（「小さな刑事」）がある。日本なら警察に任せる所を自分で犯人を探していく。又、別の例をいうと、軍隊からの脱走兵士の物語なら、日本では「日本の日触」にあるように家族にさえ受け入れられず故郷に帰りつきながら空しく村の中で凍死してしまうだろう。しかしイタリア映画なら、その兵士を家族は必死に匿うだろうし、もし近所の人々が密告でもしよものなら必ず家族の誰かに復讐されるという筋書となる。日本よりむしろ強い家族主義が西欧（特に南欧）にあるのだ。すると、一概に「西欧は個人主義」とはいえない。このように映画からは実に様々な事を発見することができる。

次にヤクザを主人公にした物語について考えてみたい。日本の歌舞伎、講談などではヤクザが恋愛する場面は見られない。ところが、昭和2年映画化された「沓掛時次郎」以来ヤクザ映画には恋人が登場する。ヤクザが女に惚れることで堅気になるという筋が現れる。時次郎はたまたま宿をとった親分の喧嘩に加勢し、男を殺す。その男の頼みで女房子供を預かり共に旅をする。そのうち彼は女房に惚れてしまうが殺した男への義理づくから表には出せない。しかしその愛によって人間的に高められるのである。このような話の筋は日本の伝統的な物語には見られず、アメリカの西部劇に影響されたものと私は思う。

西部劇は又、西欧の騎士道物語を受けついでいる。貴婦人崇拜、一騎討ち、ヒーローたる悪人が女への愛によって浄化される等々において。騎士道物語は巡礼

の途次美しい貴婦人と出会いその恋のため決闘するという筋が多いが、ここにはキリスト教的テーマと有夫の貴婦人への恋という対立する要素が含まれている。このことを更に深く考えてみると、もともと農業地帯であり母なる大地への信仰をもっていた西欧が、砂漠の宗教であるキリスト教（父なる神）に征服されたのだが、母なる者への信仰はマリヤ崇拜、さらに騎士道物語につらなったのではない、そのようにも考えられる。

日本では、ヒーローが女によって浄化されるというテーマは「不如帰」の武男と浪子に見られるが、武男は弱しくて西欧的ヒーローである強い男が恋をするというイメージに合わない。そもそも日本の主人公のタイプは歌舞伎に見られるように、「和事」の主人公は心中物にあるように美男子ではあるが男として頼りない。「荒事」の主人公は、強く逞しくて忠義のためには死ぬが女との恋愛場がない。この二つのタイプに分類されて「沓掛時次郎」のようなタイプは異色であるということができる。この二つのタイプは現代にも見られるので、三浦友和タイプは一見頼りなくしかし一抹の純情さがあり、イザとなれば女と一諸に死んでくれるが、三船敏郎タイプは男らしいけれども女のためには死なない。欧米的な思考では理解できないだろう。

ところが、アジアに目を向けてみると、日本的な弱々しい二枚目タイプがうけている。大体において先の日本の主人公の二つのタイプも中国の英雄豪傑と才子佳人の二つのタイプに源流があるように思う。「二枚目」を理解する共通の土壌があって、インド映画などにも「弱々しい男」が主人公になったりする。

ともあれ文化とは通俗なもの、下らないものの堆積の上に屹立するものである。映画は一見卑俗にみえながらもこちらに学ぶ姿勢さえあれば実に多くの豊かなものを与えてくれるものである。映画をそのようなものとして御理解載きたいというのが私の願いである。

（文責 東高 小嶋 孝）

## 〔第1回研究例会 公開授業〕

# 日本の文化と伝統

都立白鷺高校 蛭田政弘先生

研究例会は毎回この公開授業から開始される。今回は会場校の白鷺高校蛭田政弘先生によって、1年6組の49名を対象とした「現代社会」の授業がおこなわれた。

この時の授業における指導領域は、「日本の生活文化と伝統」という小単元を、①文化と伝統 ②島国根性をめぐって ③日本文化の土台と稲作 ④座敷と日本文化の伝統 の4つの部分に細分化した中の4番目を「住まいと日本人」と読みかえて作成されたものであった。住まいにみる日本人の空間感覚を主題として、住まいにおける日本人の意識を歴史的に過去から現代へとたどりながら、空間感覚の現代的な課題にまで発展させていくねらいが感じられた。

導入として、身近な空間感覚の例をあげさせた後で、住まいにみる空間感覚の概念を話され、間仕切りの思想のところでは、日本と西欧との感覚的な違いをわかりやすく説明されていた。そして、最後に日本人の空間感覚の特色として「意味空間」「伸縮自在性」をあげられ、また現代的な課題として「住宅問題」などを取り上げられ、「竜安寺の庭園」を見せてしめくりとされた。

蛭田先生の授業を参観して感じたことは、第1に生徒と一体化した中で授業を進めていること、第2に辞書を毎時間用意させてわからない用語をすぐ各自で調べさせていること、第3に「OHP」を有効に活用して生徒の注意をひきつけていること、第4に先生のお人柄がよく出た暗くならない授業展開をして、「落ちこぼれ」を作らない努力をなさっていることなどである。梅雨空の下、5校時目の授業でありながら白鷺の生徒の目はキラキラと輝いていたのが印象的であった。

(文責 砧工業 三宅幸夫)

〔第1回研究例会 研究発表〕

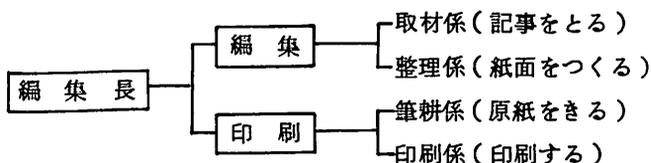
「現社」新聞をつくる

都立竹台高校 斉藤 規

はじめて受けもつ現社授業で「新聞づくり」を生徒とともに行った。この新聞は授業進行に関連する記事を一般新聞から読みとり、取材し、更紙一枚大の「新聞」に編集する作業である。主たる目的は、社会科の授業を現実社会との交流を通して肉付けし、いきたものにしたいことだが、生徒に毎日の新聞になじませ、かつ年鑑、事辞典、白書などの参考図書を利用する便利さを感じてもらいたためであった。

年度はじめの注意は次のとおり。①新聞発行の目的をはなす。②「新聞のできるまで」(VTR・読売新聞社製作)を見せ、③読みやすい新聞の作り方、これは主としてレイアウトの大切さを話し、作業においても、区画組み、T字型・Y字型・X字型組みをとり入れることを指示、④図書館授業。「高等学校図書館参考図書集成」(高図研修、SLA発行)に助けをもらい、参考図書の紹介をする。⑤図1のように班編成。この際、全員が取材係であることを確認しておく。⑥日程モデルを示し、発行日を厳守するよう指示。以上を準備として講義式に授業した。

図1 <発行までの分担>



<隔週刊新聞の日程表>

1	2	3	4	5	6	⑦	8	9	10	11	12	13	⑭	15	
月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	
企 画 会 議	取 材 期 間						編 集 大 体 の ウ レ 議	筆 耕	筆 耕	印 刷	発 行 反 省 会 評				

作業は班毎に着席するよう特別教室を使用した。生徒には全員購読新聞持参を約束。図2に見られるように紙面づくりは年間授業進行にあわせているものの、社会の出来事に連動した特集もある。新聞づくりの評価は、クラス6、7編の中

図 2.

号数	特集記事
1.	(レイアウトを考える)
2.	(レイアウトの完成)
3.	参院選挙について
4.	自衛隊
5.	広島・長崎原爆 終戦特集
6.	ロッキード事件判決
7.	日本経済(貿易収支) グレンダ問題
8.	「白書」の紹介
9.	衆院選挙について
10	国際記事から

から1作品を選び定期テストに加点した。その際、班全員の協力度も評価の対象とした。また、年度末には同じく現社の青山先生の努力で学年新聞作品展示会を開き他クラス作品の出来ばえをみる機会を与えた。

こうした作業の中で、思いのほか生徒が動き、10号まで(図3)発行することができ、また図書館で生徒が調べ物をする光景をみることでできたのは嬉しいことであった。だが、安直なとりくみをする生徒の中にはいる。それを防ぐには、今の授業すなわち新聞を読み、作業をする意味の定着化がたえずとめられるし、正しい作品評価の基準を指導する側がもっていなければならない。大きな課題である。

今年2月の全国教研で、TV・マンガの影響を憂える発言があったとき、こうした討議の瞬間にも出版社の中では、子供をひきつけるマンガ本を必死で考えている大人がいることを忘れるな、という発言があったとき(朝日新聞、2月9日)。今日の教室は、子供を奪いあう大人(教師)と大人(マスコミ)の戦いの場という気がしてならない。「新聞づくり」が生徒の中に少しでも入りこめる授業の道具となればと思っている。御叱正をおおぎたい。尚、新聞づくりに参考にした本は以下のとおりである。

・都高図研「学び方の技術」日本書院      ・上 昭二「編集レイアウト」ダヴッド社  
 ・デザイン編集室編「編集ハンドブック」ダヴッド社      ・浜谷 靖夫「新聞づくりが楽しくなる本」オーエス出版  
 ・大木薫・大内文一「学校新聞のつくり方」明治書院





〔第1回研究例会 講演(要旨)〕

近代哲学の今日的課題——比較哲学の視点から

東大名誉教授 山崎正一先生

私は昭和10年に東大の哲学科を卒業した。明治の後半から、日本の哲学界はドイツ哲学が主流で東大でもそうであったので、私もカントから近代哲学の勉強を始めた。カント以前の勉強も必要と思われたので、ロック、ヒューム等のイギリス経験論(当時は軽視されていた)を勉強してみると哲学史の教科書に触れていない重要な内容に気附かされた。ヴァレリーが新聞記事についていっているように、哲学史も又、著者のもっているプリズムを通して書かれているのである。多くの哲学史は、古代、中世、近代の三つの時期に区分されている。19世紀のヘーゲルの哲学史が思想の系列を辿った最初のものであるが、彼の哲学史は思想の弁証法的発展を強調する余り無理な叙述に陥っている所がある。たとえば、古代ギリシャ哲学の所で、ヘラクレイトスの思想を弁証法的なものとして高く評価し、一元論を唱えたパルメニデスの後においている。ところが文献にあたってみると、パルメニデスの方がヘラクレイトスより後の人物であるらしいのである。

19世紀の初頭ナポレオンに征服されたプロシヤでは、解放戦争を通じて民主化、近代化を進めた。前近代的な国家を民主化せねば仏、英に對抗しえないという気運が盛り上がったのである。この気運にのってヘーゲルの哲学はドイツの国民哲学となったといわれている。彼の哲学には一方で民主的な要素があり、一方で当時のプロシヤの身分制的専制国家の思想を含んでいる。後者の点が彼に批判されることになるのだが、又、彼の哲学は当時新旧の宗教的対立に悩んでいたドイツにとって両者と折合いのつく思想であった。さらに近代国家の中枢となるべき官僚育成のためにも都合のよい哲学であったのである。

ヘーゲルが1831年に死ぬと弟子達は保守派と青年ヘーゲル派に分裂した。さらに中央派が生じ、この派がヘーゲルの学問を発達させた。ヘーゲルの哲学史の修正を図ったのもこの学派である。又、19世紀の後半ドイツでも労働者階級が発生し、その指導理論としてマルクス主義が生れた。さらに資本主義の発展につれて大量のインテリゲンツィアが技術者、管理職として必要とされた。新カント

派の哲学はこの風潮に沿った形で生じてきた。日本における新カント派の流行も同様な社会事情を背景としている。

第一次世界大戦後、哲学界には大きな変化が生じた。シュペングラーの「西洋の没落」がベストセラーになり、実存哲学が登場してきた。これらは戦後の市民生活の混乱からくる不安、絶望感を基盤としており、生命哲学の一種であるといえよう。

近代哲学は要素によって全体が決定されるというメカニズムの哲学であるが、これに対するのは全体によって要素が決定されるというオーガニズムの哲学である。戦後日本の教育の背景にあるのはプラグマティズムであると思うが、この思想はメカニズムの思想が強すぎるように思う。私は「倫理・社会」の教科書を書くに当って18世紀のモラルフィロゾフィを基盤においた。この思想にはなかばオーガニズムの思想がある。たとえば、スミスは経済学者としては人間を「利己心」を持つ存在としたが同時に倫理学者としては「寛容」な存在とした。彼の経済学は当時、Political・Economyと呼ばれた。彼の大学での講義録である「グラスゴー講義」を見ると、国家の果たすべき役割として、公的な保健衛生、治安警察、そして物の豊富さ（経済学）をあげている。スミスは物を豊かにすることが国家の安定につながると考え、そのために経済学を研究したのである。

17世紀に自然科学が発展し、18世紀には人文学に影響を与え、19世紀なかばには市民社会の哲学が全部科学になってきた。日本は19世紀以後西欧で分化した学問をそのまま輸入したのである。17世紀から18世紀頃が最も創造的な世紀であり、19世紀に入るといわば知的財産の整理の段階になってくる。ヘーゲルや日本で流行したスペンサーの哲学、又コントの哲学も知識の総合化、体系化をめざしたものであった。

19世紀には近代哲学は一応完成し、諸科学は現実世界に應用されていく。スミスの理論は当時のイギリス政府の政策にとり入れられたし、自然科学の発展は産業革命以来の科学技術に應用されている。今日の我々の時代はこの傾向がますます顕著になっていると思います。

（文責 東高 小嶋 孝）

## 〔第2回研究例会 公開授業〕

### キルケゴールと生きがいについて

都立大崎高校 小林豊実先生

10月31日(月)第5時限目、約20名の先生の参加の下、公開授業がはじめられた。大崎高校では「倫理社会」を第3学年にしているため、小林先生にとって倫社の授業は最後の年であるとのことであった。授業は「実存主義」のキルケゴールの思想の2時間目で、「キルケゴールと生きがい」をテーマにした内容であった。生徒にはキルケゴールの「日記」や「死に至る病」の一節、当時のさし絵、資料文ごとに付された設問などを印刷したプリントが配付されている。先生がよく通る声で教室にひびき、授業がはじまる。前時の学習内容(「キルケゴールの愛について」)を復習したあと、「日記」のキルケゴールの真理観を示した部分「……わたしがそのために生きそして死ぬことをねがうようなイデーを発見すること……」の部分、生徒によって読まれる。そしてこの部分についての設問について、生徒を指名して答えが求められる。キルケゴールが求めた生き方は何か、キルケゴールの求めた真理と正反対の真理はどういうものか等々。近代合理主義の客観的真理観と、キルケゴールの主体的真理を対比させて、後者の特徴をはっきりさせるのがねらいだと思われる。次にコルサール事件の説明、「死に至る病」の「絶望」に関する説明文を読ませ、これも設問にもとずいて生徒に質問がなされる。以上のように、資料とそれに対応する設問がよく工夫されていて、学習の流れが自然にできるように構成されている。「絶望」の意味についての設問でも、様々な具体例が準備されていて、意見が出やすいように工夫されていた。このようにキルケゴールの主体的真理についての学習をふまえて、最後に、大崎高校生に対する「生きがい」についてのアンケート結果を用いて、全体の授業をしめくくられた。このアンケート結果は、模造紙に結果が書かれ、前に掲示された。

「充実した瞬間を感じたことがあるか」という問いには、「ときどきある」の答えも含めると、90%が「ある」の答えである。しかし「生きがいはあるか」の問いには、ある—53%、ない—45%で、前者の「充実した瞬間」と「生き

きがい」との間には距離があることがわかる。また、「生きがいを持ちたいと思うか」の問いに対しては、「思う」「ときどき思う」を合わせると、80%になり、生きがいを求めながらも、生きがいに対する明確な答えを見出すことの難しさが、アンケートの結果に表われていた。まとめとして、小林先生ご自身の受験期や大学時代の生々しい体験を話され、「生きる」ことの実存的意味について、生徒の気持ちに直接許えかけるよう話された。キルケゴールの思想と「生きがい」という主体的な課題を結合することによって、たんに思想の学習にとどまらず、「実存」の意味を自覚化する工夫をされた授業展開であった。

(文責 三鷹高 工藤文三)

## フッサールにおける人格と倫理 吉沢論文から

都立白鷗高等学校 橋本克己

### 1. はじめに

本文は、吉沢伝三郎著『生活世界の現象学』（サイエンス社、1981年）に収められている論文「人格と倫理」にもとづいたものであることを断っておく。また、この論文は、フッサールが晩年において到達した人格概念の解明に関する方法論的意義を、彼の現象学の流れの中で説明づけようとするものであるが、ここでは、人格の倫理性を扱った部分に焦点をあてることにする。

### 2. 現象学的エポケーの実践的意義

フッサールによる「人格の倫理性」とは、狭義にはいかなる概念によって特徴づけられるものであるか。この問いは、すでに人格の概念を把握するための方法的手続きの中に秘められており、そのためには、現象学的態度に特有のエポケーの実践的解明しなくてはならない。

フッサールは、現象学的エポケーを、生活世界における或る特殊な習慣の営為

であるとし、イデーでは、これを「私たちが私たちのうちに、まさに或る特殊な習慣的関心方向を樹立し、それに伴って、或る特殊な『職業時間』を必要とする或る職業的な態度をとる」こととしている。

ここにおいて、エポケーは単なる「方法」ではなく、「態度変更」として性格づけられるべき「態度」としての性格を有するものであることが明らかにされる。そして、さらに、「このエポケーとは、(中略)人類としての人類に課せられている最大の実存的变化という意義を内包している」という結論によって、職業、ないしは人格の自己規定という概念が、「人格の倫理性」を特徴づける最も核心的概念であることが明らかにされる。

### 3. 職業という概念の或る深い意味

フッサールは、「職業」という概念に、ある深い意味を認めている。現象的エポケーは「或る完全な人格の変化を成就すべく召命されている」とされ、そこには深い職業概念が前提とされる。だが、彼の職業概念は専門的技術のみを意味するものではない。

現象的エポケーという職業的営為には、いかなる「特殊的職業」も含むべき「普遍的職業」としての意義を率先して顕示するという人類の使命が託されており、そのかぎりにおいて職業的営為は、人間の生存にとって実践的に独特な普遍的意義をもつとされる。したがって、この職業的営為によって成就されるべき「完全な人格の変化」は、「人類としての人類に課せられている最大の実存的变化という意義を内含している」と結論されるのである。

### 4. 人格の自己規定と普遍的職業

我々は、あらゆる職業において、真の諸目標統一という意味での目標設定の普遍性を認め、その際の規範意志は当該の主体の職業生活の全体を普遍的に規制する。このことけ、生活全体の規制としての「自己規制」という事実を示す。

我々が、生活規制の一切の可能的な特殊形態をこえて、それを規範との「真に普遍的な」合致へと拡張するなら、「我々は特殊的職業という概念に基づいて、普遍的職業という概念を得ることになり、そしてこの職業は人間であること、最も完全な、本物の、真なる人間であること以外の何ものでもない」ことになる。

職業においては、規範意志は単に真理や善への意志ではなく、絶対的な意味での「最善のものへの意志」であり、我々は、そこではじめて、本来の意味で道徳的なものに到達し、一般的な定命法、すなわち「達成されるもののうちで最善のものをなせ」の前に立つこととなるのである。

## 〔第2回研究例会 講演（要旨）〕

### 社会学における人間像の変遷

お茶の水女子大学助教授 官 島 喬 先生

ルネサンス以来の人文主義者、またカントやルソーらは、近代の人間像として、目的であって手段ではないという人格の尊厳をうたってきた。ところが、現代では人間が手段と化してしまっているように思われる。このような人間像の変化を社会学者たちはどのように考察してきたか。

近代市民社会について、アダム＝スミスは、近代で自由な個人が、合理的に欲求の充足を求める行動が、結果的に調和のある市民社会をつくと楽観的に描いた。しかし、ヘーゲルは市民社会が欲求の体系であることから、各個人は自分にとっての目的であり、他人は自分の欲求を満たすための手段となると述べ、のちのマルクスに影響を与えたのみならず、19世紀の社会理論の先駆ともなった。また、功利主義のように、欲求の実現に成功することを賞讃する思想もあらわれた。自由と合理性が、人間を手段として利用する面をつくり出したのは、近代的自由の逆説といえよう。

デュルケムは、個人に対する社会の優位性を強調した、伝統主義者とみられがちであるが、近代社会における人間のこのような両義性を、危機感をもってみつめた人である。分業の進展によって伝統的社会は近代的社会へと移り変わり、人間は個性化し自立していく。そのような状況の中で人間は有機的連帯をつくり出すであろうというアダム＝スミスの見方をしつつも、現実の19世紀末から20

世紀にかけての社会は、分業が敵対的な、分裂した分業になっていること、またその中で個人は、自立した個人ではなく、経済外的拘束から自由にはなつたものの他者と疎遠な、競争的關係の中にあつて、孤立した功利主義的個人になっていることを指摘している。このような個人は、発達した産業社会の中でもつばら欲望を充足しようとし、他律的に欲望をあおられ、過大な欲望のために絶えず欲求不満にさいなまれるアノミー的人間である。

また、ウェーバーは、官僚制論を展開する中で、人々が官僚制になじみ、生活をルーチン化し、自ら歯車になってしまうことに危機感を抱いている。この精神なき専門人という指摘は、今日もお問題提起としての意味をもつ。合理的なはずの近代的官僚制が、人間を合理的機構の下僕にせしめようという非合理性をもつところに、ウェーバーも両義性を見出している。

デュルケムによれば人間は自制できない欲求の下僕に、ウェーバーによれば合理的組織の下僕になっている。伝統から解放されて自由になつたはずの人間が、主体から客体へ、目的から手段へとおとしめられてきたのはなぜか。原理的には資本主義経済がもつ矛盾ということになるかもしれないが、そう言い切るのは問題を単純化しすぎるおそれがある。社会主義社会でも官僚制の病理は解決されていないし、発展途上国にも深刻なアノミー状態が生じている。原理からいきなり説明するのではなく、現代社会の中に経験的・実証的にそういう現象を認識していくべきである。たとえば高度消費社会の中で、内発的欲求ではなく外からの刺激によって消費社会を支える手段と化した人間の姿は、欲しいものを買ってもらえないので自殺する子供をつくっている。生産現場の自動化・ロボット化は、失業という具体的な疎外を生んでいる。さまざまな形で手段化されている人間の問題状況を認識するとき、また過去の先駆者たちの考察をふり返ることも値打があるだろう。

もう一つたいせつなことは、それでも近代的個人は、伝統的社会の人間とは違い、無自覚に手段的存在に埋没しているのではなく、ものごとを批判的に考えられ、選択できる存在であるということである。賢明な消費者になろうとし、組織を改革し活性化し、また住民参加の政治のしくみをつくろうともしている。近代市民社会即無計画性という認識からの脱却もはかられている。このような、部分的ながら着実な努力があるということである。　（文責 四谷商 和田倫明）

〔第4回研究例会 公開授業〕

わが国の平和主義について

都立小川高校 小島恒巳先生

新設高らしい明るく清潔な奮闘気の小川高校で、小島先生の授業を参観させて頂きました。まず、「平和を願って、私達は今」と題した分厚いプリント集が配布されました。先生は、「平和主義」の学習を、①わが国の平和主義 ②平和主義と自衛隊 ③わが国の安全と世界平和、という構成で展開されていて、本授業は「わが国の平和主義」を取扱われました。目標として、「平和主義の確立に至った歴史的背景と平和主義のもつ意図の総合的理解」をあげられ、戦争を知らない生徒達に戦争という事実を追体験させ、しっかりと認識させ、平和憲法の意義を理解させるような展開を授業の主眼としてあげられました。

授業に入りますと、まず導入として「平和主義」学習の意図とその意義を説明されました。次に本論に入り、まずわが国の平和主義の歴史的背景をとりあげられました。明治憲法……天皇大権（統帥権・編成権・宣戦講和権）について説明され、ついで第二次世界大戦を中心に戦争の悲惨さについて説明されました。原爆被爆後の写真、原民喜の詩、学徒出陣の記事を資料として使用されました。ついで、財戦後の日本の民主化をとりあげ日本国憲法の成立に至る過程を説明されました。次に日本国憲法の平和主義の内容を、憲法前文と第九条の条文に即して詳しく説明されました。前文……平和のうちに生存する権利、第9条……①戦争の永久放棄、②戦力の不保持、交戦権の否認、について「新しい憲法のはなし」等の資料を使いながら説明されましたが、その際生徒の持っている平和意識を振起させようと努力されていました。特に第9条の徹底した平和主義の理念を様々な資料を使いながら生徒に理解させようとされたことが印象深く思われました。最後に現実に存在する自衛隊の問題を提起され、次の授業へのつなぎとして授業は終わりました。全体的にファイトあふれる迫力ある授業であったと思います。

（文責 東商 小嶋 孝）

[第4回研究例会 研究発表]

高校生の生活と意識

都立成瀬高校 成瀬 功

最近の高校生に見られる特徴をのべるとすれば、次のような点が考えられる。

- ① 大人になりたがらない
- ② 現状には不満足
- ③ 自己中心的である
- ④ 物質に恵まれ、物質主義的である。

生徒の作文や意識調査を通して考察してみたい。

①大人になりたくない

Qあなたは自分のことをどのように思っていますか。

(1)一人前の大人である '83 男子46.1% 女子20.3%

(2)まだ子どもでいたい '83 男子41.8% 女子69.8%

「経済的自立」が「精神的自立」を促すと思うが、高校生の自立心の欠除は、生徒達がおとなになることに非常に消極的であるか、あるいは拒否的であるという意味で大変重要なことであろう。

Q今の日本の社会は青少年にとって努力のしがいのある社会ですか。

(1) ある 男子20.6% 女子14.8%

(2) ない 男子75.1% 女子82.1%

自立心の欠除とも関係してくるが、未来への展望、想像力が非常に貧しいことは、大人の大きな責任ではないか。彼等に豊かな未来、努力のしがいのある社会を展望させえない原因は何か。

第1には、政治、経済に見られる私利私欲、社会的不正義が、子供の前で、展開され、大人の社会が子供の目に大変なものだとうつつていること。

第2には、子供達が高校に来るまでに非常に疲れている。小学校の内から塾に通い、子供達同士の横のつながりはたたれ、遊びの時間は極度に少なく、大人以上のスケジュールをこなしている子供は決してめずらしいことではない。

Qあなたは中学時代に塾あるいは、家庭教師について勉強したことがあります

か。(1) ある 男子74.5% 女子75.9%

中学から高校へ、高校から大学へのはげしい競争勉強からの逃避という意味で、幼児期への回帰願望、退行準備状態が一方にある。日本型の親子関係では、幼児期がもっとも幸せな構造をもっている。

精神的に自立しなければならない青年期に逆に「幼児期への回帰願望」がそのうら側にある。「大人になる」ことへの消極的、否定的要因が、そこにあるのではないか。

今日の日本で一番精神的不安定、しわ寄せがきやすいのは、アメリカなどのように中年期ではなく、中高校生の年代である。この時期の子どもは一般に最も悩みが深く、心理的に強い危機を迎えている。何故かと言えばこの時期には、進学の問題が本人の生涯を決定する重要な事柄として、抜きさしならぬ形で立ちはだかって来るからである。

日本の社会では、やり直しがほとんどできない。現代の教育制度の下では、「つまずき」をプラスに転換する要因が失われている。NHKの番組でアメリカのハーバード大学の入試制度について興味深い紹介があった。

その中に、志望者の人間の素質と能力を判定する多くの基準の一つに「挫折からの回復力」という一項目があった。テストのみで追い立てるように針路を決定させている日本の差異はあまりに大きい。

こうした抜きさしならぬ、重圧が中高生に大きくのしかかって来る。

Qあなたは自殺したいと思ったことがありますか。

(1) ある 男子20.6% 女子25.1%

日本の社会のしつけの特徴は、一つは幼い時は、親は大変子供を甘やかし、過保護に育てる。7才までは神のうちと申して、幼いとき困難に耐えられるだけの耐忍性をきちんとしておかないで、思春期頃になって急に子供に強制する。親だけでなく、学校も社会も「進学」への圧力を有形無形のかたちでかける。子供たちは逃げ場のない状況、ストレスとなって、心理的動揺をひき起す。思春期という動揺の激しい時期、深刻な事態を引き起す。仲間からは励ましや援助を受けられないため孤立した状況は、登校拒否、家庭内暴力へと時に発展する。

## ② 現状に不満足

漠然としたかたまりとしての不満足。諸外国の青年のそれと比較しての最大の

特徴を、不満足の高さという点に求めることができる。「家庭生活に対する満足度」の諸外国との比較の表を参照して下さい。

Q あなたは自分の家庭での生活についてどう思いますか。

(イ) 満足している	男子 20.6%	女子 31.5%
(ロ) ほぼ満足している	男子 44.0%	女子 40.1%
計	男子 64.6%	女子 71.6%

アメリカ、イギリスの青年達が90%近い満足度と比較するならば、20%近くも劣っているのは何故か。

高校時代は、本来何か理想を抱いて、純粋な理想に向かって努力する時代である。しかし、現在の家庭でそんな理想、生き方などは与えられてはいない。

母親が与えるのは、進学への方向づけである。偏差値をあげるとか、塾の選択といったことになってしまう。父親の方は母親任せの責任ある態度を子どもに対してとらない。

2年男子の作文「……今現在の人生、つまりこの成瀬高校での生活をすごしているだけで精一杯、家へ帰れば、親から勉強しろといわれて、考えることといえは、1年先の大学受験のことだけです。このような人が大部分だと思えます。やっぱり『おれの30年後はどうなるであろう。』とか『将来の人生設計』など考えている人は、ぼくの考えではないと思えます。ただ単に一年後とか目先のことだけ考えてしまっている。……」

父母へのアンケートを見ると「あなたは息子又は娘にどのようなことを日頃注意されますか」

1.言葉づかい 40%      2.公的な場で人に迷わくをかけぬよう 38%

3.将来の進路 37%……6.もっと勉強せよ 34%ということです。しかし、一方生徒の方が親から受ける諸注意で圧倒的に多いのが「もっと勉強せよ」男子53.2%、女子48.8%である。白帯の方も男子57.6%、女子45.0%である。大人は表面的には、「勉強しろ」とは言っていないつもりである。だが、それはそのまま強制しなかった。注意しなかったにはつながらない。ちらっとした目線の動き、一見にげない言葉……無言の圧力になっているわけである。

「試験地獄」という言葉は戦前にもあった。久米正雄「受験生の手記」にも見られる。が戦前の末期昭和15年でも高等教育の就学率は該当年令人口のわずか

3.7%にすぎない。同年の中等教育機関への進学率25.0%である。今日高等学校進学率94.2%である。大学進学率37.4%である。およそ比較にならない。

今では誰れも受験競争からおりることはできない。従ってすべての子供生徒達の関心事は、学歴というより学校歴、進学になる。進学のための勉強になるわけである。

2年男子の作文「私はたいして成績が良い方ではなく、親からよく注意される。私の親は成績だけで、あるいはテストの点数だけで、人間を評価するので、私のことをしかってばかりいるのは無理もなからう。そこで、私は私なりの意見を言ったことがある。

『人間にとって最も大切なことは何か?』私の親は前にのべたように成績だけで評価する人なので当然『勉強に決っている』と言った。そこで私は次のように言った。『勉強のできない人って人間として鈍いのか』私の親は『あたり前だ』と言った。……中略……

『勉強だけが人生だ。』と思っている親、勉強さえすればえらいと思っている親。そんな親にどうすればわかってもらえるのか。……中略……

今の親は世間体を気にしすぎる。世間によく思われれば満足する親。一流大学へ行って一流会社に勤めれば満足する親。私はそんな心の狭い人間になりたくない]

今日の家庭のしつけの第一は、勉強の習慣をつけさせることである。昭和55年実施「家庭教育に関する世論調査」によると7割以上が、受験勉強を、母親は肯定している。受験勉強が害になると思っている母親は2%にすぎない。

2年男子「今の世の中は学業成績＝頭のよさ（人間の価値）と頭から決めつけられる御時世です。」

こうした中から、当然家庭に対する不満足も出てくる。また学校でも、そうした家庭における価値観の延長が見られる。社会もまた、似たような特徴を今日持っている。だから、家庭にも、社会にも、学校にも子供達は漠然としたかたまりとしての不満、裏返された形では人間不信という特徴を示すのではないか。

### ③ 『自己中心的である』

勉強がすべて、家庭、社会での生活実感を喪失したあり方は、彼等自身の存在の実在感を失っているのではないか。

Q あなたがうちでいつでも自分の役目としてやったりやらされていることがありましたらいくつでもあげて下さい。

特になし 男子37.8% 女子27.2% (アメリカの高校生1.4%)

家庭での話題も「学校のこと」「進路のこと」「勉強のこと」に集中するが、「異性のこと」「政治のこと」「社会面にのったニュース」等は、極度に低いパーセンテージである。

核家族化が進む中で、かつての家の重圧は薄らぎ、家族の幸福の中にとじこもり、同時に家は社会から孤立化する。しかし、孤立化した家族は、昔と違った形で、社会の競争原理がストレートに持ち込まれる。子供は親の世渡りの知恵から出た競争原理を小さいときからたたきこまれる。

こういう状況の中で「社会化」の訓練がなされず、子供は親にとり込まれ、自己中心的にならざるをえない。

Q あなたは学校生活にどんな不満がありますか。

①生徒にまとまりがない 男子43.3% 女子53.7%

Q あなたは学校教育に何を期待しますか。

①人生の生き方など人格形成についての指導 男子61.0% 女子66.0%

生徒たちは「人格教育」に期待しながら、相互にまとまりがないと不満をもらしている。この矛盾はそのまま今日の教育の基本問題である。そして解決は、教師と生徒とが一緒になって、現実の学校の中での集団関係を「青少年にとって努力のしがいのある社会」にかえることにあるのではないかと思う。

Q 親は自分の将来について過大な期待をもつ 男子51.1% 女子34.6%

Q あなたは毎日の生活の中で悩んでいることはどのようなことですか。

③毎日の生活にハリがない 男子45.5% 女子54.9%

親の期待を現実達成するためには、自己中心的にならざるをえず、すべて他のものを切り捨てて「勉強」……狭い視野の受験勉強になってしまい。その結果逆に自己の存在をも見失ってゆかざるをえない。他者、仲間を切り捨てる時、同時に自己をも切り捨てているわけである。

Q あなたは話せる友人を持っていますか。

(イ) ある 男子68.8% 女子81.5%

(ロ) ない 男子28.3% 女子17.9%

ある生徒2年男子「暖い心を要求するのが無理だ。たよれるものは自分ひとり。……中略……進学競争の中で本当の友だちができることにこしたことはないがやはりムリ。大学に入ってから大切にしたい」

受験勉強のみが生活のすべてになり、社会的視野を失って、自己の存在自体が無重力状態になってゆく。その結果、孤独、極端に自己防禦的、人間不信、耐性の乏しいあり方も生じて来るのではないか。

ある2年女子「今の私の生活は、朝起きて食事をして、バスに乗って、8時に学校に行く。そしてポケーッとノートを写して6時間目を終えて、またバスで帰っていく。クラブ活動をやるわけでもない。ただ、その日無事に終りさえすればよい。こんな状態では『自立』どころか今自分が何をしてよいかわからない」

こうした無気力な、ハリのない生活を悩んでいる生徒は少なくない。母親が前面に出て、母性過剰になると、どうしても近視眼的で技法的なものばかりが先行してしまふ。要領のよさとか、世渡りとか、瑣末的な、技法的なものになりがちで、理想とか、理念とかそういうものが次落してしまふ。

家庭のほか学校も社会も同様な傾向が見られる。家庭のこうした問題点をせめて学校が修正する機能を持てばよいのだが、学校は今日家庭の延長あるいは家庭より輪をかけて各論一辺倒である。

教育の根本に立ち返って、たとえば、子供をどんな人間に育てていくか。どんなヴィジョンや価値観を提示するかなど、きわめてあいまいにされがちところを、考えてみたい。ただ進学させて、いい大学へと押し込めればよいという考え方、その結果、子供は真の理想や生き甲斐を見失って、便宜的な進学中心思考、物中心主義になるのではないか。

例えば、歴史が「暗記もの」とされるのは理由ないことではない。現実にはさまざまな知識の断片を詰め込んでおくことを要求するような試験が圧倒的に多いのである。

しかし、本来生徒に要求すべきことは、歴史や文学や哲学その他諸象にたいする広くまた深い関心であり、その関心にもとづく旺盛な読書や観察である。受験参考書で事たれりではなく、もっと広く古典を読み、すぐれた書物を読むことが大切である。そうした背景をもつ知的能力と知的蓄積とが評定されるような入試の方法を真剣に考えなくてはいけない。

倫理の授業で「論語」を岩波文庫でじっくり読んでみた時の生徒の感想文では次のようにのべている。

「論語は以前、中学の時国語で学び、現在も古典で学んでいる。しかしその学習法は、ただ読むだけで、詳しい内容の理解とまではいかない。そのようなわけで、今回倫理の授業での「論語」が本当の意味での学習読みであると思った。まだ「論語」のほんの一部に触れたにすぎないのだが心に響きわたってくるものがあった。

この論語のように哲学的宗教的なものには、日頃学んでいる勉強とはかなり違う点がある。我々が俗にいう勉強は、大学受験を目標にしたもので人間性、個性などという点を考慮すれば、かなり堅苦しく、視野も狭くなってしま<sup>う</sup>。ところが「論語」には人間がより立派な人間になるための要素といったものが書かれており、自分の一生を長い目で見ることができれば、この類のものを学習することが、とても大切な事となってくる。我々はどうしても目前のことに目がいきがちで、そのことだけ考え、先のことをあまり考えない。長い人生において本当の意味での勉強とは、人間性を害しがちな受験勉強よりも、「論語」にあるようなことを学ぶことだと思いが、現実はいまよくない。

具体的な内容にも、大げさと思えることもあったりするが、理解しきれないもの（昔の中国人と現在の日本人とでは考えも違う）があったりするが、多くはなるほどと、うなずけるものである。だが書かれている内容は可成り高度なものでそれを実際に実行するのは可成り難しいと思える。おそらく哲学的、宗教的なものには、このようなものが多いと思う。書かれていることをそのまま行動にうつせないまでも、よく読んで深く考え、自分自身に何を適用できるかというぐらひは考えてみたいものだ。

今後論語だけでなく、哲学的宗教的な書物を読む機会が多くあろう。その時はさらに『人間らしい人間』とか『人間のあり方』などについて考えてみたい。」  
（2年男子）

先ほどの調査でも生徒が学校教育に一番求めているものは「人格形成」であるわけで、この原点から出発してゆけば、今日の教育の混乱、矛盾の解決の糸口はあるのではないかと思う。真に学問を大切にすることである。

#### ④ 物質主義的ということ

戦後の出発点が貧しさからの解放であった。しかし、消費社会は、物を買うことが豊かだと毎日テレビは教え、学歴社会は受験に成功する子供がすぐれた子どもだとささやき、産業社会は、出世しもうける人間が勝者だという。

家族が「人間教育の場」を奪われ、ストレートに競争の原理を家の中にまで持ち込み、兄弟の関係すら時に引き裂れ、抵抗する力を失ってしまった。学校もそれに抵抗する力を失ってしまった結果起きている不幸のしわ寄せが、今高校生を蝕んでいるその痛みを一教師として感じないわけにはゆかない。

神谷美恵子氏が「生きがいについて」の本にのべておられる。

1. 自分の生存は何かのため、まただれのため必要であるか
2. 自分固有の生きて行く目標は何か。あるとすれば、それに忠実に生きているか。
3. 以上あるいはその他から判断して自分は生きている資格があるか。
4. 一般に人生というものは生きるに値するものであるか。

こうした問いをくり返しつつ、授業に生徒とともに取り組んでゆきたいものである。

#### 参考文献

稲村 博「親たちの誤算」朝日出版社

神谷美恵子「生きがいについて」みすず

松原治郎「日本の青少年」東書選書29

雑誌「世界」1983年9月号

都立成瀬高校2年生「意識調査」及び作文

1. あなたは自分のことをどのように思っていますか

イ 一人前の大人である      ロ まだ子どもでいたい

	イ		ロ		N. A	
	男	女	男	女	男	女
'83	46.1	20.3	41.8	69.8	12.1	9.9
'81	32.5	10.8	40.7	66.9	26.8	22.3
白 書	25.8	16.1	57.3	36.7		
'81 父母	36		62		4	

2. 今の日本の社会は青少年にとって努力のしがいのある社会ですか。

イ そう思う      ロ そう思わない

	イ		ロ		N	
	男	女	男	女	男	女
'83	20.6	14.8	75.1	82.1	42	51
'81	28.5	15.8	61.0	71.2	10.6	12.9
S55白書	35.0		65.0			
'81父母	45		51		N 4	

※成瀬高校父母へのアンケート

3. あなたは中学時代に塾あるいは家庭教師について勉強したことがありますか

イ ある      ロ ない

男子	イ	74.5	ロ	25.5
女子	イ	75.9	ロ	24.1

4. あなたは「自殺」したいと思ったことがありますか。

イ ある      ロ ない

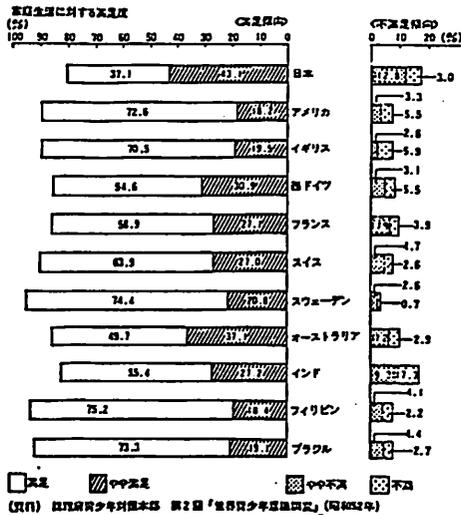
	イ		ロ		N	
	男	女	男	女	男	女
'83	20.6	25.1	79.4	74.2		1.9
'80	32.1	52.9	66.0	46.5	0.6	0.6

5. あなたは自分の家庭での生活についてどう思いますか。

イ 満足している      ロ ほぼ満足している

ハ やや不満      ニ 不満

	イ		ロ		ハ		ニ		N	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
'83	20.6	31.5	44.0	40.1	22.0	17.3	13.5	11.1		
'81	19.5	20.1	48.0	51.1	18.7	22.3	12.2	6.5		
'55白書	40.2	43.0	49.2	46.9	7.1	8.3	2.5	1.4	1.0	0.4



6. 親から日頃よく注意されることはどのようなことですか。

	'83		'81		'81父母 母親
	男	女	男	女	
1. もっと勉強せよ	53.2	48.8	63.4	43.9	34
2. 将来の進路	39.7	36.4	38.2	27.3	37
3. テレビの見すぎ	29.8	24.7	39.8	22.8	29
4. その他	22.0	18.5	16.3	10.1	3
5. 約束の時間を守れ	17.7	18.5	17.1	19.4	35
6. 借りたものは忘れず返せ	16.3	16.7	13.0	10.8	21
7. 公的な場で人に迷わくをかけぬよう	15.6	15.4	18.7	19.4	38
8. 言葉づかい	14.2	35.8	22.0	53.9	40
9. 門限を守れ	12.8	27.2	12.2	23.0	30
10. 小遣いの使い方	10.6	10.5	18.7	12.9	10
11. 友達はやい人を選べ	7.1	11.7	13.8	14.4	29
12. 人によくあいさつをする	5.7	10.5	20.3	15.1	34
13. 電話が長い	5.7	42.6	8.1	43.2	19
14. 男らしく 女らしく	5.0	20.4	3.3	14.4	11
15. 老人や体の不自由な人をいたわれ	3.5	3.7	4.1	7.9	22
16. 異性との交際	3.5	4.9	1.6	7.2	16
17. 道路をよごすな(公園)	0.7	0.6	0.8	0.7	12
18. 列の割り込みをしないように	0.7	0	0.8	0	3
19. N・A	1.4	0.6	0.8	2.2	1

7. 家で自分の役目としてやったり、やらされたりしているもの。

A : アメリカの中高生 S51 } 白書より  
 B : 日本の中高生 S51 }

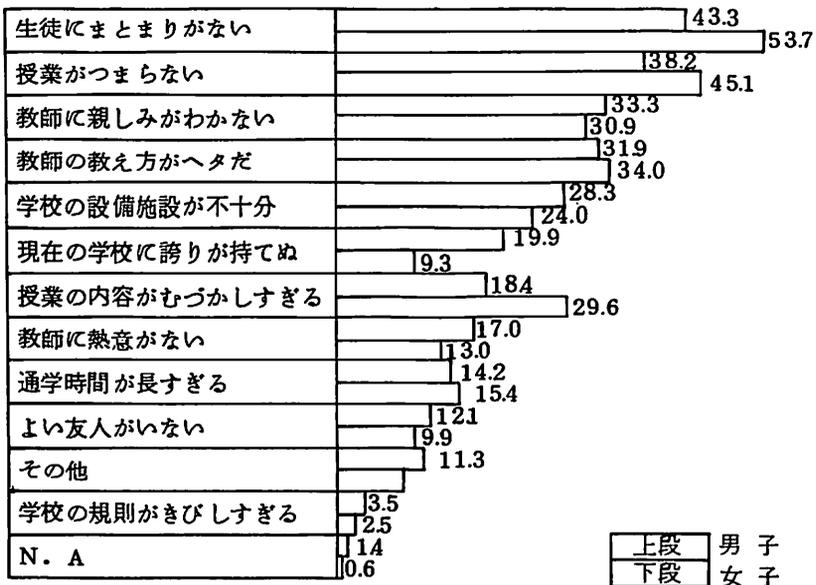
	'83		'81		A		B	
	男	女	男	女	男	女	男	女
1. 家事の手伝いをする	29.0	66.0	26.0	67.6	88.5	96.5	30.2	68.7
2. 弟や妹の世話をしたり勉強をみてやる	14.1	24.1	4.7	12.2	41.5	48.4	9.6	15.1
3. 簡単な大工仕事や機械器具の修理	34.8	3.1	31.7	0.7	51.8	13.8	16.9	1.5
4. 親の代理で近所の集まりに行ったり親せきに行く	6.3	0.6	3.3	2.9	13.0	17.8	5.0	3.4
5. その他	17.0	11.1	24.4	19.4	1.9	1.9	2.0	0.9
6. 特になし	37.8	27.2	36.6	24.5	1.4	1.4	47.3	25.9
7. N.A	0	0.6	0.8	0	0	0	0.5	0.7

資料出所 総理府青少年対策本部「家庭と青少年調査」(昭和51年)

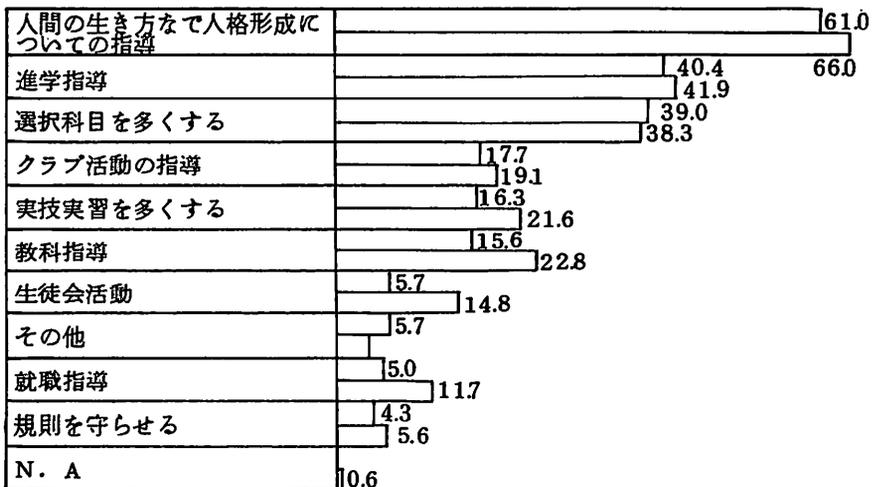
あなたがおうちでいつも自分の役目としてやったりやらされていることがありますらいくつでもあげて下さい (家庭と青少年調査)

質問	日本	アメリカ
1. 家事(お勝手の仕事、買物、掃除など)の手伝いをする。	49.2%	92.6%
2. 弟や妹の世話をしたり勉強をみてやる	12.3	45.0
3. 簡単な大工仕事や機械器具の修理をする	9.3	32.5
4. 家業(商売や農業)の手伝いをする	11.3	14.8
5. 親の代理で近所の集まりに行ったり親せきに使いに行く	4.2	15.3
6. その他	1.5	1.9
7. 特になし	36.7	1.4
無回答	0.6	-

8. あなたは学校生活にどんな不満がありますか。



9. あなたは学校教育に何を期待しますか。



10. あなたの家庭は次のようなことについてどう思いますか。

(イ) ハイ (ロ) イイエ (ハ)はいのみを示した。

	'83		'81		'55白書	
	男	女	男	女	男	女
家族は互いにうちとけ合っている	71.6	77.8	69.1	82.7	92.3	91.8
父の愛情が十分である	72.3	74.1	61.0	83.5	87.4	85.9
母の愛情が十分である	80.1	87.0	69.9	92.1	95.6	94.8
親は自分の将来について過大な期待をもつ	51.1	34.6	39.0	21.6	53.3	37.0
自分と親との間で考え方生き方にくい違いがある	56.7	60.5	60.2	53.9	51.5	50.1
家庭の収入は十分である	70.2	74.1	46.3	71.2	70.9	72.1

11. あなたは毎日の生活の中で悩んでいることはどのようなことですか。

	'83		'81		'80	
	男	女	男	女	男	女
1 学業成績が悪い	50.4	61.1	47.2	33.4	51.5	44.7
2 進学や就職のこと	45.4	56.7	39.8	56.8	74.9	81.1
3 毎日の生活にハリがない	45.4	54.9	39.0	39.6	46.5	53.5
4 理想と現実とに矛盾を感じる	36.2	26.5	29.3	23.7	39.8	46.7
5 クラブ活動と勉強との両立	31.2	30.2				
6 お金のこと	26.2	20.4	20.3	13.7		
7 意志が弱いこと	22.7	24.7	20.3	20.9	29.2	29.4
8 恋人がいない失恋した	22.7	11.7	13.8	5.8	28.1	23.5
9 社会や政治が腐敗している	17.7	4.3	18.7	6.5	19.3	8.8
10 いそがしすぎる	14.2	21.6				
11 勉強の仕方がわからない	11.3	27.2	16.3	12.9	23.4	19.4
12 よい相談相手がない	9.9	4.3	5.7	7.9	11.2	8.2
13 容姿が気になる	9.2	22.2	5.7	14.4	12.9	31.8
14 家族のこと	8.5	8.6	1.6	7.2		
15 その他	8.5	9.3	12.2	13.7		
16 嫌な学科が多い	7.8	11.1	17.1	14.4	36.3	24.1
17 健康に恵まれない	2.8	6.2	7.3	4.3	4.7	3.5
18 N. A	0	0.6		7.9	4.1	3.5

調査対象 '81年9月 父母100名

注：'55白書は昭和55年度版  
青年白書です。

83年6月第2学年男子141 女子162

81年9月 " 123 " 139

80年6月 " 171 " 170

葛飾野'78年6月 第2学年男子126

## 〔第4回研究例会 講演(要旨)〕

### さ さ や か な 遍 歴

都立墨田川高校長 増田 信 先生

#### (1)

都倫研のよき行事となったこのような催しに私の番がまわってきましたが、「ささやかな遍歴」というささやかな話でその責めを果たしたい。

私は、今回この会にお見えになっている初代会長の矢谷先生が上野高校長の時に事務局長の仕事を承ることになった。都倫研は発足以来、研究授業、研究発表、講演という三本の柱で日常的な例会活動を買ってきた希有な研究会であり、それを私たちは誇りにしている。私の事務局長時代の良き思い出の一つはこの講演にお二人の碩学——田中美知太郎先生と諸橋徹次先生をお招きできたことである。

田中先生をお招きできたのは、ひとえに矢谷先生の御尽力による。先生は、かつて田中先生が御自宅でギリシャ語を教えられた時の数少ない弟子のお一人であった。そのため事務局から講師として田中先生のお名前があがった時「田中先生なら私が知っている」と仰有るが早いか、まだ新幹線のない時代のその日に京都に行かれ直接お願いして下さった。田中先生はめったに講演されない方の方であったが「矢谷君が直接来てのたのみなら」ということで七月末の暑い日、全倫研全国大会の講師を引き受けて下さり、お話を伺うことができた次第である。

そのときの講演の内容を当時の大型テープレコーダーで何度も止めては回しながら苦勞して記録し文章に起こしたことも思い出される。その私の手と息吹のかかった文章が、はからずも筑摩書房刊田中美知太郎全集第14巻に「ギリシャの思想」として全倫研紀要よりという形で掲載されている。

諸橋先生には「東洋の思想」という題で理路整然とした御講演をいただいた。しかし、当時先生は、大変な御高齢でもあり、国宝的存在としての鴻儒にもし万一のことがあってはと、会場校の校医のご在宅を確かめておくなどお心配りしたことも忘れられない。また、控え室で先生の色紙を矢谷会長などが書いていただいた折、垂涎の想いでそれをながめていたことも今は思い出の一つである。

#### (2)

さて、私もこの3月に退職することになり、早過ぎる自叙伝ではあるが、若干

の回想を試みてみたい。

私は、関東大震災のあった1923年の生まれであるが、幼少からの精神形成期に、大きな動乱の時代を生きてきたという思いを禁じえない。例えば、小学校6年の時には2・26事件にあり、同郷福井県の岡田啓介首相がはじめは暗殺されたと伝えられた。旧制藤島中学の時代には、南京陥落のちょうちん行列の波のうねりを下宿から見た。そして高等師範に入った年に太平洋戦争が勃発し、文理科時代には松戸の工兵学校に入った。教育関係の大学ということで徴兵延期があり、わずかのずれで生命ながら生き残った。

このような時代に生きた私は、それなりの愛国少年であったと思う。この時代を省みると、右翼の棟梁頭山満が神格化され、大川周明がヨーロッパ勢力東漸の中でアジア諸国の独立を説き、智謀の士であり直観的の予言者であった石原莞爾が世界最終戦論を主張し、また、徳富蘇峰が日比谷公会堂で戦意高揚の演説をするという時代であった。そしてまた、西田幾多郎門下の人々——例えば高山岩男、高坂正頭、鈴木成高といった人々が中央公論により時局に対し積極的に発言をしていた。私は大学時代には務台理作先生の講義を受けていた。務台先生はこの西田哲学門下の人々の論説に共感を示しておられた。また、高等師範時代には、由良哲次先生から歴史哲学を学んだ。由良先生は「統を伝える」という伝統の「統」を歴史の実体としてとらえ、個性的・実践的・創造的であるとして、民族国家を論じられた。先生は国を憂える話になるとみるみる顔が真赤になり涙こぼれるという熱血の方であった。私は、この統という形で民族の連続性を重んじる由良先生の立場と、民族を世界史的な普遍的な立場における特殊の実現とみる務台先生の考え方、双方の影響を受けていると思う。

### ( 3 )

文理科大学では、ヘーゲルの『法の哲学』を卒業論文に選んだ。西田哲学も戦後を風靡したマルクス主義も弁証法的世界であり、その弁証法の祖であるヘーゲルの意味を自分なりに考えたいと思ったからである。そして私は、日本がヘーゲルやマルクスの弁証法を受け入れたのは、日本に仏教的な下地があったからのことではないかと考えている。私はこのヘーゲルの弁証法と歴史哲学に興味を持ち、概念詩とよばれるヘーゲルの文章と取り組んだ。ヘーゲルの文章には、整然と構築されたカントのそれとは異なり、こちらの精神を高揚させるものがあり魅せら

れた。

しかし、下村寅太郎先生がいわれたという言葉には考えさせられた。「大学の卒業論文にヨーロッパ思想の完成形態であるヘーゲルを学ぶことはよくない。思考の過程を学ばず、思考の完成形態だけを得るようでは自分の思考の芽がつぶされる。悩んで迷って、問題があるものに自分を飛びこませることによって自分が出てくるのだから」と。私は「なるほど、ヘーゲルをやってまずかったかな」と考えたが「それはそれ」と思い直した。だがひそかに、デカルトも繙いた。妙な話だが、デカルトの『省察』や『方法叙説』にみられる疑わしいものを捨て、二つに分ち、明晰、判明にとらえていく思考法は、教頭以降の学校運営の工夫に役立っている。さらにその後、あまりにもすつきりしているヘーゲルとは対照的なトインビーの歴史哲学に興味をもった。世界史を一元的な枠組にはめこむ考え方になじめなかったので、いくつかの文明圏を親子の継承関係を把握し、文明を挑戦と応戦という視点から多元的にとらえるトインビーの発想に心をひかれたのである。

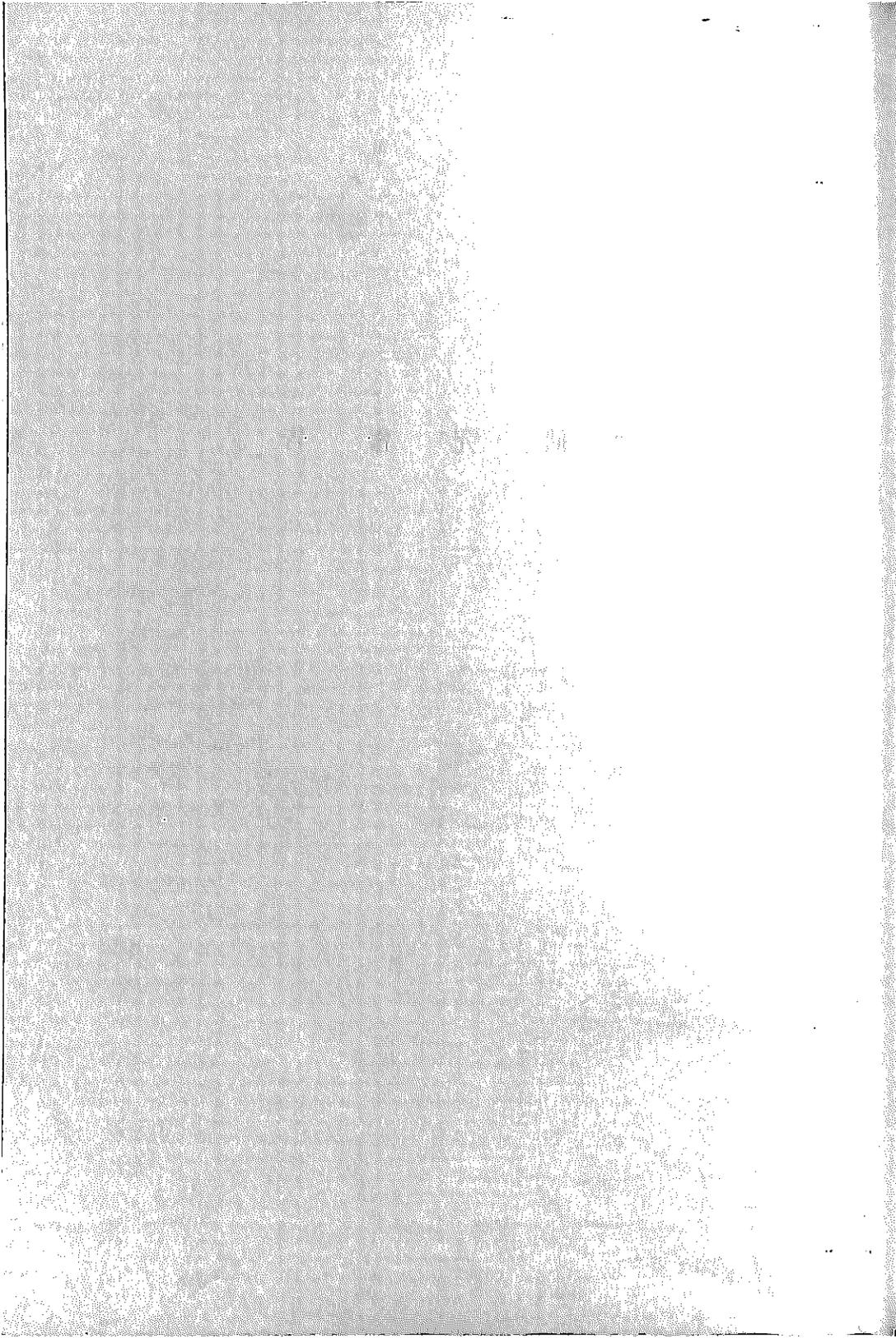
トインビーの考え方には易の影響がある。易は東洋における弁証法的世界である。変化に応ずる一つの洞察であり、一種の歴史哲学を含む、うなずくことの多いおもしろい思想だ。例えば、何かの現象には必ず陰微なる姿のきざしがあるはずであり、それを把握し未然に手を打って対応するという実践的な叡智が凝縮している。弁証法の根底には、二元的なものを統一し、動くものの法則を知り、先はどうなるか未来をみてみたいという衝動があると思うが、易にはそれに応えるものがある。

いまは、自分の人生において役立つことがあればよいということで、古典を繙き少しづつ読むということを心がけています。以上、まことにささやかな遍歴をお話し致しました。

(文責 豊島高 華名次夫)

# Ⅳ 研 究 報 告

④



## Ⅳ 研 究 報 告

〔第Ⅰ分科会……指導内容と教材化の研究〕

### 研 究 経 過 報 告

都立片倉高校 増淵達夫

5月24日(火)、都教育会館にて顔合わせ。「指導内容の教材化の研究」というテーマで第Ⅰ分科会発足。最終的に18人の先生方がお集まりになった。

第一回分科会は、6月24日・都立白鷗高校で行う予定であったが、研究例会での講師の山崎正一先生を囲んで催された懇親会と重なったため、止むをえず延期となった。

第二回分科会は、9月10日(土)、都教育会館にて共立女子高校の館入懸子先生に報告していただいた。夏休みに生徒に求めたレポートの指導とその結果についてであった。テーマは、①神社の由来や地域社会との関連、②港で拾った話③日本の伝統芸能、で、この三つのうちいずれかを選ばせたものである。生徒が自ら動くことによって先生の「現代社会」の授業が作られていく様子がわかり、大変参考になった。

第三回分科会は、11月11日(金)、都教育会館で「宗教」をテーマとして「宗教のとらえ方」「宗教の意義の指導」などについて話し合われた。まず、荒川工業高校の富塚昇先生の、『うその社会心理』(仲村祥一他編・有斐閣)を材料に宗教の意義についての発表をいただいた。また、四谷商業高校の和田倫明先生が、現代の宗教の役割について報告された。そして、片倉高校の増淵が、生徒に書かせた聖書の感想文を基に、高校生の宗教意識について発表した。

第四回分科会は、12月8日(木)、四谷商業高校で行う予定であったが参加予定の先生方の御都合で成立せず、第Ⅱ、第Ⅲ分科会と合同で、深川高校の尾崎充昭先生の『葉隠』の報告をうかがった。会終了後は、大(?)忘年会が催された。

第五回分科会は、第Ⅱ分科会と合同で1月20日(金)、都教育会館にて「日本の伝統文化」をテーマに行われた。四谷商業高校の和田先生による食生活から考える日本人の感覚、田無工業高校の辻勇一郎先生の「型」の文化、東高校の小嶋孝

先生による丸山真男『日本の思想』、中江兆民『一年有半』等、豊富な資料に基づいての日本思想の傾向、及び渡辺正雄『日本人の近代科学』を用いて日本と西洋の自然観についての報告をいただいた。また、日野高校の杉本仁先生からは、生命の尊厳に関して民俗学を用いた教材化という貴重なお話をうかがった。

## 反 省

何よりも世話人である私の力量不足があげられる。分科会の運営の方向や目的が、ハッキリしなかった。何とかそれを打開するために、第三回目からテーマを決めて行ったが、今一つパツとしなかった。魅力ある分科会を作るには、どうすれば良いだろうか、都倫研における分科会の意義をもう一度考え直してみたい。

最後になりましたが、研究部の先生方をはじめ、都倫研の先生方には大変お世話になりました。有難うございました。

# 鎌倉時代の仏教の考え方

都立大森東高校 木村正雄

## I はじめに

鎌倉時代に、日本人は仏教を日本人なりに成立させ、普及していった独自の方法であった。それが現代の私たちにも、なお大きな影響力をもっている。そこで、郷土にある仏寺等を中心に調査させ過去及び現在の問題にふれさせ、仏教の考え方を深めさせる契機にしたい。

すなわち、郷土の学習を体験を通して学ばせるとともに、仏教の考え方を深めさせ、学習のしかたを身につけさせたいと考える。

本校は、三浦半島を第二の学習の場としているので、社会科としては、「鎌倉」を中心に継続的な体験学習を実施している。

## II 指導の展開

### 1. 本時のねらい

(1) 鎌倉の地理的、歴史的、政治・経済的側面を考えさせながら、鎌倉時代の仏教思想について理解を深めさせる。

(2) 鎌倉地区への研究意欲を高めることによって、「現代社会」の学習への興味と関心を喚起させる。

## 2. 導 入

(1) 本時の学習目標を明確化する。即ち、ア．学習体験の発表の方法及び聞く態度を身につける。イ．鎌倉地区の社会的な見方（地理的、歴史的、政治・経済的、社会的）を身につける。ウ．道元、親鸞、日蓮などの思想について理解を深める。エ．鎌倉地区でさらに研究したいものを明確にする。オ．グループの人の考えや感情を大切にすることをできるように努める。

(2) 本時の学習内容を簡潔に提示する。即ち、ア．「鎌倉」の見学で考えたこと。イ．「鎌倉」の地理的考察 ウ．同じく歴史的考察、エ．同じく政治・経済的考察、オ．道元、親鸞、日蓮などの思想内容、カ．鎌倉でさらに研究したい理由とその内容

(3) 生徒3名による研究レポートの発表 校外学習「鎌倉」を見学して。発表内容の感想を中心としてあげると、次のようになる。印象に残った所は建長寺、東慶寺、円覚寺だった。鶴岡八幡宮は何となく派手だと思った。頼朝の墓は幕府を開いた人なのに石を五つほど積み重ねた簡素なもので、さびしい感じがした。実朝がこの大イチョウの下で公暁に、頼家も北条氏の謀反の騒いで源氏が絶えたのもひどい感じがした。円覚寺で感じたことは、自然林のすばらしさ、総門などの見事な配置は禅宗建築の特質がみられ、一番見ごたいがあった。東慶寺は、縁切寺らしく、非常にやわらかく女性的な感じがし、親しみも感じた。この時代は、宗教、文化、芸術などが大きく変化したり、権力争いによる栄枯盛衰の激しさ、天災地変を受けた人々は苦から脱しようと深く仏教を信じ、このような寺が多くできたのだろうと思った。鎌倉にもまだまだ自然があり、これを守っていくのがぼくらの責任だと思った。お坊さんに会った時、話しかけてみたい気持ちでいっぱいだった。次の機会には半僧坊に行きたいし、11月3日の宝物風入れの時に文化財をみたい。昔の人の苦勞して建てた寺を大切にしなければとつくづく感じた。

留意点と準備 発表させる前に、事前に生徒の発表内容と方法を指導しておく。見学した時の写真や資料などを展示して、学習への興味や関心がもてるような雰囲気をつくる。

### 3. 展 開

(1) 鎌倉の地理的考察 ア。図1から、その位置を確認し、自分たちの住んでいる地域とどのくらい、どう違うのか、に気づかせる。イ。図2から人口ピラミッドのタイプをみて、日本全体のタイプと同じなのか、異なっているのかを考えさせる。ウ。図3から、昭和22年から増加してきた人口と世帯が昭和53年以降、変化していない理由を考えさせる。

(2) 歴史的考察 ア。図4から、国宝及び重要文化財がどの寺に、どのようなものがあるか気づかせる。イ。図5から、指定文化財としてどのようなものがどのくらいあるか気づかせる。ウ。図6から、鎌倉の名数がどんな理由でできたか考えさせる。エ。図7から、祭事がどのような形で残っているか気づかせる。

(3) 政治経済的考察 ア。図8から、産業別就業数の割合は日本全体と同じかそれとも違うか、その理由から考えられることは何か。イ。図9から、地目別土地面積の推移がなぜ変ってきたか考えさせる。ウ。図10から、観光地のどこに来訪者が多いか、それはなぜか、エ。図11から、観光客数の推移がなぜこのように変化したのか。テレビの放映との関係から考えさせる。オ。資料1から鎌倉市の現在の問題点は何か、古都法との関連についても考えさせる。

留意点と準備 図表や資料など、生徒各自にプリントして配布する。事前に鎌倉市役所に行き、資料等の収集にあたる。解説的になったり、深入りしないようにする。

(4) 鎌倉の仏教思想——親鸞、道元、日蓮を中心にして、ア。時代的背景の説明、イ。資料2から親鸞の悪人正機の考えを、次に、道元の身心脱落の考えを、日蓮の立正安国の考えを理解させる。その場合教科書(学研 P272~274)にある説明を生かすこと。生徒が研究し、作成した親鸞、道元、日蓮の考えを模造紙に書いたものを掲示させ、発表させる。これら三人の似顔絵などもおもしろいし、思想内容のまとめも図で書かせる。

留意点と準備 思想内容はポイントをおさえること。3年での「倫理」にもつなげるようにする。発表する生徒への指導を事前に細かく行う。

(5) これからも鎌倉で研究したいこと——グループ毎に、鎌倉で研究したいことを話し合いをする。その場合、一人一人の学習内容や意欲が異なるので、そ

の感情を大切に、グループ毎に模造紙にまとめる。(教育相談的学習方法で進める) 模造紙に書いたものを教室内に展示し、他のグループと比較し、自分のグループのあり方を検討させる。

留意点と準備 ここでは相談的方法をとり入れたものであるから、結論を急いだり、無理にまとめたりしないで、一人一人が異なることに気づかせればよい。模造紙8枚 マジック8本 画鋏1箱

#### 4. 結 び

地域にある鎌倉の現状と問題点を理解し、鎌倉時代における仏教思想への関心と学習意欲を高める。

#### おわりに

鎌倉の現状と問題点を素材にしなが、学び方を学ばせる目的であったが、果してどの程度身についたか、不安である。学習への興味や関心も体験学習という観点からすれば高まったといえよう。今後は教材の精選と学習内容の体系化に努めたい。和辻哲郎、西田幾太郎らの墓を熱心に模写して、これらの人々の思想を研究したいという生徒もでてきていることで教材への研究に意欲を湧かせるのも事実である。

図1. 位 置

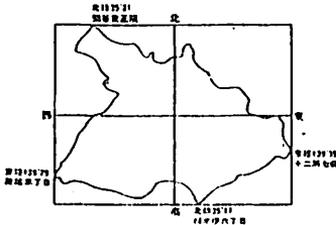


図2. 年齢別・男女別人口ピラミッド (昭和56年10月1日現在)

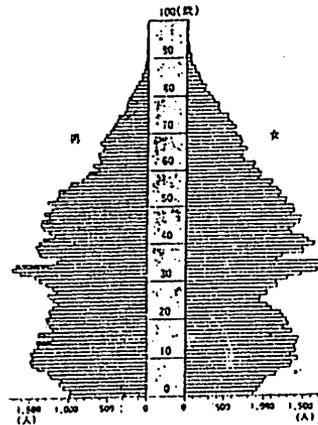


図3. 人口と世帯の推移（各年10月1日現在）

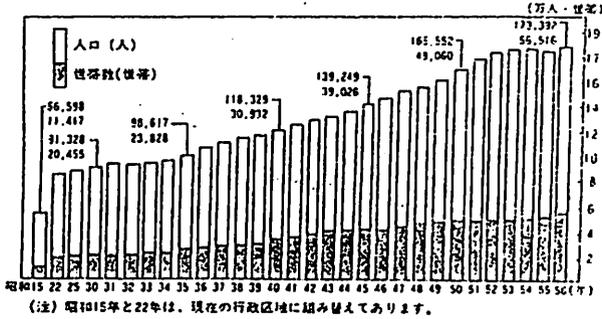


図4. 国宝及びおもな重要文化財

- 円 覚 寺 舍利殿、梵鐘
- 建 長 寺 梵鐘、大覚禪師墨蹟、  
蘭溪道隆像一幅
- 円 応 寺 閻魔王坐像、初江王  
坐像、俱生神坐像
- 鶴岡八幡宮 籬菊螺鈿蒔絵硯箱、  
古神宝類、太刀銘正恒
- 光 触 寺 阿弥陀三尊像
- 寿 福 寺 地藏菩薩立像
- 浄 光 明 寺 阿弥陀三尊像
- 光 明 寺 当麻曼荼羅縁起絵巻
- 高 徳 院 阿弥陀如来坐像（大  
仏）

図5. 指定文化財種別一覧表（昭和57年10月11日現在）

種別	有形文化財							無形文化財	民俗資料	記念物			計
	建造物	絵画	彫刻	工芸品	書跡	典籍	考古資料			有形	史跡	名勝	
国宝	1	5	1	6	3								16
国指定	15	37	37	23	49		5			24	3		193
県指定	13	8	19	17	4			1	2	2		1	67
市指定	22	20	46	18	12	4	3		21	6		31	183
計	51	70	103	64	68	4	8	1	23	32	3	32	459

図 6. 鎌倉の名数

- 鎌倉五山  
建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺、  
浄妙寺
- 五名水  
金亀水、甘露水、銭洗水、日蓮水、  
梶原太刀洗水
- 鎌倉七口  
名越切通し、朝比奈切通し、巨福呂  
坂切通し、亀が谷坂切通し、化粧坂  
切通し、極楽寺坂切通し、大仏坂切  
通し
- 鎌倉十橋  
琵琶橋、筋替橋、歌の橋、勝の橋、  
菰許橋、針磨橋、夷堂橋、逆川橋、  
乱橋、十王堂橋
- 鎌倉十井  
六角の井、棟立の井、瓶の井、甘  
露の井、鉄の井、泉の井、扇の井、  
底脱の井、星の井、銚子の井

図 7. 祭事一覧表

祭 事 名	日 時	社 寺 名
手斧始め(ちゅうなはじめ)	1月 4日	鶴岡八幡宮
除魔神事	1月 5日	鶴岡八幡宮
大注連祭(おおしめさい)	1月 8日	白山神社(今泉)
護摩焚き供養	1月13日	虚空蔵堂(坂ノ下)
左義長(さぎちょう)	1月15日	鶴岡八幡宮
閻魔縁日	1月16日・8月16日	円応寺
筆供養	1月25日	荏柄天神社
文珠祭(もんじゅまつり)	1月25日	常楽寺
護摩焚き供養	1月28日・9月28日	五大堂明王院
初午祭(はつうま)	2月初めの午の日	佐助稻荷、丸山稻荷社 等
節分祭	2月(立春の前日)	鶴岡八幡宮、鎌倉宮等

図 8. 産業別就業者数

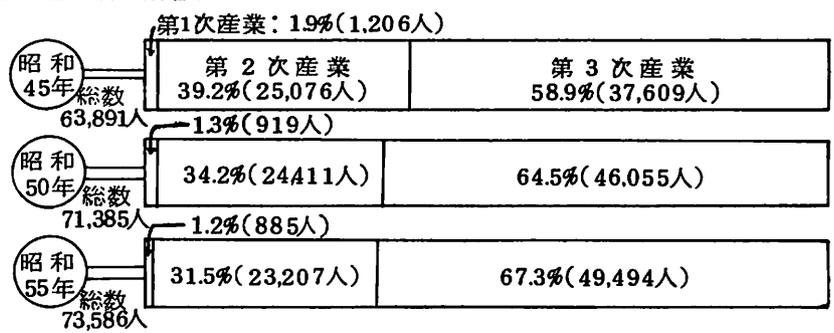


図 9. 地目別土地面積の推移（有税地のみ）

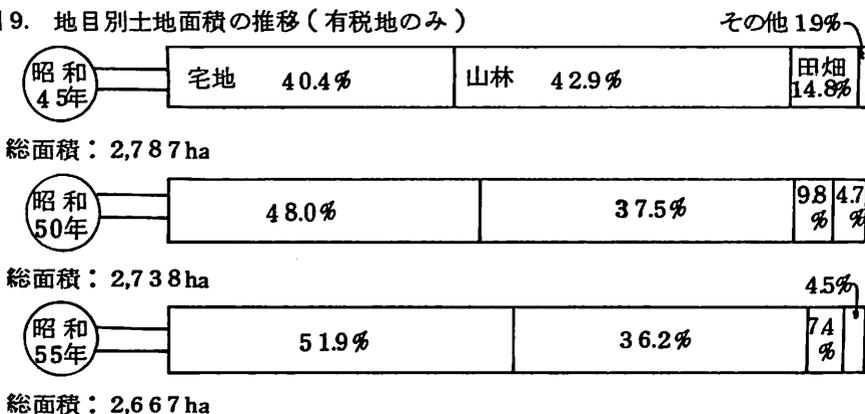


図 10. 主要観光地別来訪状況（昭和56年中）

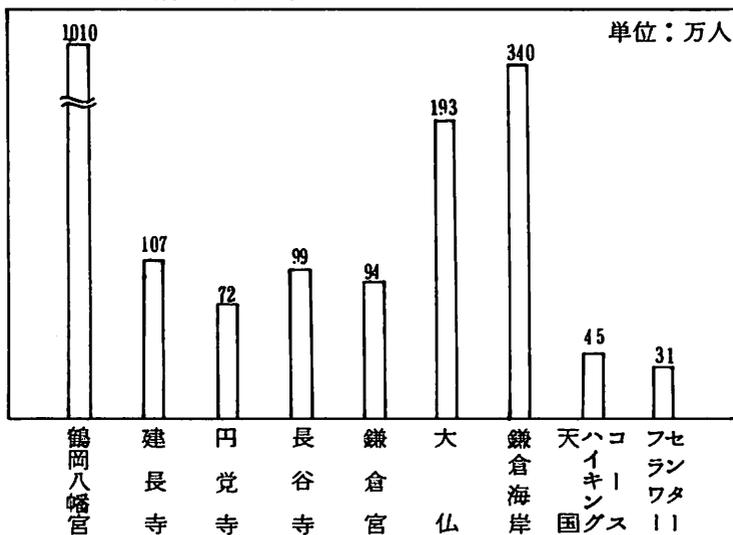
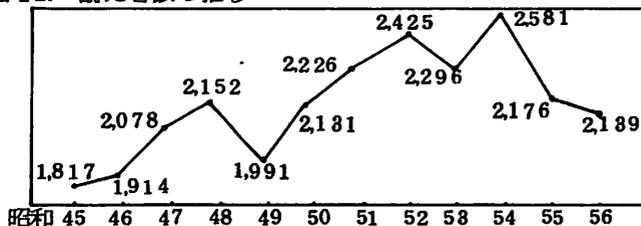


図 11. 観光客数の推移



## 資料1 鎌倉市基本構想

昭和51年9月22日 議決

## 前文

鎌倉市は、源頼朝がこの地に幕府を開いて以来、七百有余年の歴史をもち、いまなお、美しいたたずまいに恵まれています。

「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」（「古都法」）などの規制により、宅地開発は一部防止できたとはいえ、かえって規制地域外に各種の影響が及んだといえます。

さらに、鎌倉を訪れる人々の急増・交通の過密化などにより市域全域にわたって居住環境の悪化を引きおこしている現状です。

市は、日本国憲法の精神、すなわち、民主主義と平和の擁護、基本的人権の尊重を基調とし、さらに、平和都市宣言と市民自らの手でつくりあげた町づくりの理念としての鎌倉市民憲章をもとに、市民自治の精神を基本とする町づくりを旨として、この基本構想を定めます。

## 資料2 — 悪人こそ —

善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいはいはく、「悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや」と。この条、一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意

## — 立正と安国 —

客すなはちやわらいて日く、「……所詮、天下泰平・国土安穩は君臣のねがふ所、土民の思ふ所なり。それ国は法によって昌え、法によって貴し。国亡び人滅せば、仏をだれか崇むべく、法をだれか信すべきや。まづ国家を祈って、すべからく仏法を立つべし。

1) 『立正安国論』は「客」と「主人」（日蓮）との対話の形式をとっている。

仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるる（証明される）なり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己（自己に対する他者）の身心をして脱落せしむる（我見・執執をはらいのける）なり。 道元『正法眼蔵』

## 読むことと書くことを目指した授業の試み

都立八王子東高校 井上 勝

### 1. はじめに

「この1年間いったい何をしてきたのだろうという気がする。結局何を学べよかったのか、今だにわからない。歴史と思想の様なことをやってきたが、それでは世界史と同じことだ……」。倫理社会・倫理を担当して10年になる。毎年学年末考査で1年間の授業の感想・批評を生徒に書いてもらっている。上記の文章はその典型であり、内容的に10年間あまり変らなかった様に思う。又、10年間授業を担当してきて感じることは上記の生徒の感想と同様であり、問題は2点に要約される様に思う。第1点は「倫理とは何か」と言うことである。確かに教科書はあるが、その内容は倫理ではなく思想史に近い（この点は、例えば、フランスの教科書『公民の倫理』——フルキエ編、筑摩書房——と比較すれば明瞭であろう）。第2点は、教科書の内容が思想史なのだが、その思想史は相互の関連性が乏しい知識の羅列の餽があり、世界史なり日本史の一部分の様なものだというのである。この為、実際の授業は「天降りに『命題』を教えこんで、さまざまなケースを『例証』としてあげてゆく」（丸山真男）というものを大きく脱することが出来ないものとなってしまう（この点は単に社会科だけでなく日本の教育全体が大なり小なりこの傾向を有すると思う）。この様な単なる暗記科目から脱して生徒にとって主体的で考える科目に変える為には単に教授方法を工夫するだけではなく、上記2点の問題を十分検討し克服する様な努力が必要であると考えられる。

さて、上記の2点であるが、これらは単に教科書や教育だけの問題ではなく、日本の精神風土の問題であろう。すなわち、「倫理とは何か」という問いに答え難いのは柳田国男が「常識とは何か」という問いに悩まされたのと同様の事であろうし、又、思想史と言いながら断片的な知識の羅列に終わっているという問題は丸山真男が「思想的座標軸の欠如」という言葉で述べている問題と同様であると思う。それ故に、倫理社会・倫理を暗記科目ではなく、生徒が主体的に考える科目に変えるということは以上の様な精神風土への反省を含めて検討してゆかなければならないと思われる。すなわち、これらの点への反省を抜きにして新しい授業内容・方法を導入しても十分な成果をあげることは難しいと思う。以下は授業の枠内で生徒が自分というものの歴史的社会的拡がりを探ることを目指そうとした試みの覚え書きである。

## 2. レポートの試みと限界

教科書の内容を理解し考え、その過程を整理して結論を出し自分のものとする。これが本来の学ぶ過程である。暗記とは理解し考える過程を省略し、結論だけを記憶するというものである。それ故、暗記を排する為には省略された理解し考えることに重点を置くことである。しかし、理解することも考えることもそれ自体は見えないのであり、結論だけが見える。暗記の必然性はここから生ずる訳である。だが、見えない理解し考える過程は書かれる時見えてくる。すなわち、森有正が言う様に、思想とは表現されて始めて意味を有するのである。以上の様な問いの中で私が出した結論は「読むことと書くこと」であり、これを授業の目標とした。すなわち、教科書・資料集も含め思想家の書いた文章を読み、理解し、そして、その内容について自分で考える。そして、考えた内容を書く（表現する）、というものである。具体的には、平常の授業を補うものとして各学期に1度レポート等を書いて提出させた。1学期には青年期についての授業を素材として自分の青年期の生き方について省察したレポート（例えば「私の自画像」など）を課した。夏休みには読書感想文を書かせた。この課題は多くの学校で実施され、又『ソクラテスの弁明』が岩波文庫のベストセラーとなる様であるが、この様な方向は避けた。哲学書を理解することは高校2年生の段階では無理であると判断したからである。哲学書に代えて、様々な思想家や歴史的人物の自伝・伝記の類を課題図書とした。この読書によって社会科の教科書や授業に登場する人々の歴史

的・社会的背景を理解して欲しいと考えたからである。冬休みから3学期にかけての時期には社会科一般から倫理（倫理社会）に限定した課題を課した。すなわち、教科書に登場する思想家のうちの1人を選び、その思想家に関する研究論文を2つ以上読み、その思想についてあるテーマを決め、そのテーマについてレポートを書かせた。

この様なレポート等の課題と共にもうひとつ重点を置いたのはノートを手にとる訓練である。ノートを手にとることによって平常の授業においても「読むことと書くこと」を充実させ、このことによってレポート等を作成する力を養おうという意図である。ノートは小学校入学以来ずっととっているものであるが、ノートのとり方の工夫ということは学校では殆んど教えられていない。それ故、大半の生徒は教員が板書したこと、話したことをただひたすらノートに書きつけるだけである（あとはそれを暗記する）。しかし、ノートはまとめる為のものだけでなく、理解する為のノート、そして、書く為のノートも存在するはずでありむしろ、これらのノートの方が倫理社会（倫理）の授業では重要であると考えられる。そこで、板書事柄をノートに写すという作業の無駄を省く為にプリントを作成しノート代りとした。そのプリントには板書事柄・まとめ、そして、教科書に書かれていない補足説明を印刷しておき、授業ではまとめに到る過程と結論についての自分の考えを記す様に工夫した。この様にして、「読むことと書くこと」を充実させようとしたわけである。

では、結果はどうであったろうか。ひとつの典型的な生徒の感想は次の様なものである。すなわち、「普通の授業と違ってプリントに要点を書きこんでいく授業だったので最初のうちはややとまどった感があったが、慣れると後で見て要点はわかりやすいし、授業内容は思い出せるし、やたら字を書かずに落ち着いて先生の話聞くこともできるので、なかなかよかった。計3回にわたる倫社の宿題はかなり大変だった。特に最後のレポートは負担が大きかった。直前になってあわてない様にと2学期の試験休みから本を読みはじめたが、それでも1月末からはせっぱつまった状態で他の勉強がほとんどできなかった。でも調べた内容はおもしろかったし、改めて『思想』、『哲学』といったものに興味をもてた」。この様に、プリントを使つてのノートのとり方の練習を目的とした授業は好評であった。その理由は、余裕をもって授業を聴くことが出来ることであり、この余裕

が理解し考えることにつながっていく様に思う。

これに対し、レポート等の課題については十分目的が達成されていない様に思う。この理由は第1に上記感想にも書かれている様に「負担が大きい」ことである。これは授業で要求される理解力と本の要求する理解力にかなり格差があることを意味する。第2に、思想・哲学に興味をもつ様になることは大変結構なことであるが、しかし、レポート等の課題の目標とする所は興味をもつことではなく興味をもっているものについて読み、理解し、考えることであるから、理解の段階へ到達出来なければ不十分ということになろう（これは無理な要求であろうか）第3に、この様に多くの場合レポート等を作成することによって興味は生まれるが理解し考える段階へ十分到達することが出来ないとする、レポート等を作成する以前から興味をもっている生徒は大きな矛盾、すなわち「書きたくない」という問題に直面することになる。その様な生徒に事情を聴くと、唯読んだ本の内容を理解も出来ないのに要約するだけであり、自分のものにならない、というのである。

この様に、レポート等の課題にはその前段階での適切な準備・訓練が不可欠であり、これが欠けると十分な成果があがらないことになる。では、この前段階の訓練はどの様にして行いべきなのであろうか。

### 3. 自分の問題を考えて書く

生徒が教科書・授業内容を理解し考えて自分のものにするとすることは生徒が一步一步教科書なり授業内容に近づいてゆくことを意味する。そして、その近づく過程にいくつかの段階を設定するとより容易に近づくことが出来るわけである。前章の3回の課題が作文 → 感想文 → レポートという形式、段階になっているのは以上の理由による。

では、問題はどこにあるのだろうか。段階を追って核心に近づくという考え方には基本的な誤りはないと思う。問題はその段階の設定の仕方であり、特に感想文 → レポートという所にある様に思う。すなわち、両者の間には飛躍があり、この点が生徒の側から言えば飛び越えきれないのである。すなわち、感想文とレポートの間に何かもうひとつの段階を設けることが必要なのだが、残念ながらこの段階に核当するものが見当たらないのである。

そこで、発想を逆転し、生徒の側から思想に近づくのではなく、逆に思想の側

から生徒の方へ近づくことである。具体的に言えば、授業で学習した内容を使って生徒の身近な問題について考え、解答を導き出すことである。しかし、その際注意しなければならないことは、単に感想を考えて書くのではいけないということである。(これでは感想文である)すなわち、森有正の言い様に「一定の課題と方式と制約の下に自己の思想を表現する」ことである(森有正によれば、このことは「日本では全く行われていない」)。一体に、学校教育では感想文は大はやりであるが、この感想という主観の披瀝は前述の様な断片的知識の暗記と表裏の関係にある様に思う。すなわち、丸山真男が言い様に、様々な思想の断片が次々に摂取され、古い知識は「傍におしやられ、あるいは下に沈降して意識から消え『忘却』されるので、それは時あって突如として『思い出』として噴出することになる」、この「思い出」し方が感想という様式であると思う。それ故に、感想という様式にはストイックな態度をとった。又、主観的な枠を脱する方法としては生徒相互の対話が是非必要であると思う。そこで、試験という形式で解答を求めた。

具体例を示そう。ソクラテスとソフィストの思想の相違を使って次の問題についての解答を求めた。

問題 よい教え方とはどの様なものか、次の順序で考え、解答せよ。

- a アテナイ的・常識的答え
- b ソフィスト的答え
- c ソクラテス的答え

又、キリスト教の隣人愛をふまえて次の様な問題を課した。

問題 次の文章を読んで1～3の問いに答えよ

「ぼくは茅ヶ崎から電車で逗子の学校まで通っています。大船で乗り換えるのですが、大船駅前の本屋さんに、時には寄り道するようになりました。駅の階段をおりたところに、目の不自由なおじいさんが箱を首にかけ、つえをついて立っているのにあいます。ぼくは、おじいさんの箱にお金を入れてあげることが、初めははずかしくてできませんでした。次のとき、幼いころ、電車で席をゆずってもらって、ありがたかったことを思い出し、50円入れてあげました。おじいさんは「ありがとございます」と何度も何度も、ぼくにおじぎしました。ぼくはとても悲しかった。おかあさん

は、良いことをしたとっていたけれど、ぼくは50円ぼちで良いことをしたと思うことは、とっても悪いことのように思いました。ぼくは、大船に寄り道するのをやめました。でも、どうして体の不自由なおじいさんが、あんなつらい立ちんぼをしななければならないんですか。しないですむようにしてあげられないのでしょうか。」

問い1. おかあさんはなぜ「良いことをした」と言ったのか、その理由を記せ。

問い2. ぼくはなぜ「悪いことをした」と思ったのか、その理由を記せ。

問い3. 1・2をふまえ、困っている人を愛するとはどの様にしなければいけないか。その精神・態度について記せ。

結果は意図したことがほぼ実現した。暗記中心の試験勉強は次の様になった。すなわち、「あの2学期の期末テストの1週間くらい前、我々のクラスはソフィスト、そしてソクラテスの思想に対する議論が休み時間ごとにおこなわれていた。当初自分は倫社なんてとっていて興味がなかったが、やはり1人だけボンとマンガを読んでいるのも寂しかったので、段段とその議論に首をつっこむようになった。みんなの言っていることが初めは全々わからなかった。だから、みんなに追いつこうと思ってひそかに勉強した。そして、テスト前2日ぐらひはみんなの中で自分の考えたソフィスト観・ソクラテス観などをのべられる様になった。もうそのころはみんなひどくて、次の休み時間がくるまでの授業中に必死に考えているのである。そして、休み時間がくると『やっぱり俺はこう思うぜ』とすぐにまた議論が始まる。みんなまじめに人の意見をきいている。もちろん、自分もマジメだった。そして、試験勉強も倫社を中心にしてやった」。

又、テーマについて客観性に向って考える力を養うという目標もある程度達成出来た様に思う。ある生徒はこの点について次の様に述べている。すなわち、「今回いろいろ勉強になりました。まず、第1に考えていく時のすすめ方。第2番目は、これは大変大きいのですが、今まで私は現国など『こんな問題人によって考え方がちがう』と言ってあまり考えたことがありませんでした。ここで、考えれば1つ、又はそれに近い答えが出るということがわかりました。私は今まであまり深く考えたことがなかつただけにたいへんむずかしかった。でも、考える楽しさも少しわかった様だ」。

#### 4. おわりに

現代社会が始まり、教科書からではなく生徒から出発することが強調される。だが、両者は背反するものではなく、車の両輪であり、それ故に両方から出発し両者が交差する地点を求めべきであると思う。そして、両者が交差した時、多くの問題は解決出来ると思う。

では、交差するとは何なのだろうか。否、何故、両者は交差しないのであろうか。生徒は常識から出発する。しかし、教科書は常識を越えた、それとは逆の世界を形成している。そして、常識はソクラテス的なイロニーによって越えられ、否定される。それ故に、両者が交差するとは両者が各各異なる地点から出発し、イロニーの段階に到るということである。前章の問題例が三段階の設問になっており、第2段階がイロニーの段階を示しているわけである。

イロニーの理解は難しい。しかし、理想主義的で常識の矛盾に敏感な高校生にとっては必ずしも困難ではないということはこの試みを通して感じた。 (了)

## 「社会」という言葉をめぐって

都立荒川工業高校 富塚 昇

「社会」とは何か? という一見単純な問題は、決して単純なものではない。その単純ではないことの意味を、第3分科会で『翻訳語成立事情』(柳父 章著 岩波新書 1982年)についてレポートさせていただいたことをベースに、少しまとめてみたいと思う。

C.W.ミルズは「社会科学は個人生活史と歴史、および社会構造内におけるそれらの相互浸透を考察の対象とする」としているが、人間が社会をつくり、社会が人間をつくる、という関係を認める限り、この社会科学についての定式化を社会科教育にあてはめることができるように思える。しかしこの観点に立つ場合、日本語(この場合、翻訳語)とその背景にある日本の文化の特質は一つの問題を含んでいることに留意しなければならない。

「現代社会」の教科書は、個人、参加、人間疎外、弁証法、など多くの翻訳語が(で)説明されているが、柳父章が翻訳語に注目するのは、「社会」「個人」「近代」などの学問・思想の基本用語、すなわち社会科がとりあげる用語、あるいは対象そのものは、日常語とは切り離された言わばもう一つの世界のことばであるからである。柳田国男は、昭和22年に「社会科というものは『世の中』とっていることと同じであることを力説しなければならぬ」(『柳田国男教育論集』より)としているが、意識調査において「いまの社会をどう思いますか」と「いまの世の中をどう思いますか」という質問では答がかなり違うという指摘(栗原彬『政治の詩学』)を見るかぎり「おかみさんの使うことば」(柳田国男)と学問上のことばの距離は、現在でも短くなっているとは言えない。その理由としては、翻訳語である「社会」がsocietyの意味内容を正確に表わしているとは言えず、それはsocietyに相当することばが日本になかったからであり、その背景には、societyに対応するような現実が日本になかったからである、という柳父の指摘に注目しておきたい。そして彼は、societyは窮極的には、個人individualを単位とする人間関係であり、そのような人間関係は日本には存在しなかったというのである。しかしそれにもかかわらず、societyの翻訳語としての「社会」は学術語として定着しているのであり、ここにわれわれの学問とそれをとりまく文化の特質、さらに文化が人間をつくるという側面がある以上、われわれ一人一人の認識の方法ともかかわってくる問題があるのである。

学問について岸田秀が次のように述べている。「およそ学問というのは、ある問いかけがあって、それに対する答えとして出発したものである。

……最初の問いかけは……日常的な素朴なレベルのものであり、そのレベルの問いかけと、専門的レベルの問いかけとは、抽象化あるいは特殊化の程度が異なっているだけであって、質的には同じ延長線上にあるものである」。(ものぐさ精神分析)そして質的に同じ延長線上にないものの代表として彼の専攻する心理学をあげているのである。ひるがえって「現代社会」を見た場合、翻訳語を抜きにして考えられない以上、同じような傾向を否定することはむずかしいかもしれない。しかしながら「社会」ということばが、仮に、われわれの日常から質的な意味で離れたものであるにしても、人間がつくりだす、暫定的な言い方ではあるが、社会的なるものは常にわれわれ自身を含み、われわれのまわりに重層的に

存在することも事実である。その意味で「現代社会」は人間（個人であるのか、あるいは間人であるのか）と人間がつくり、人間をとりまく、社会的なるもの（娑界、沙界 — 栗原彬、あるいは社怪 — 筒井康隆 といった方がより現実を表わす場合もあるかもしれない）の、翻訳語で言うと、弁証法的な関係（つくり— つくられる関係）を、同じ延長線上にときほぐすことに一つの目標があるように思える。そして『翻訳語成立事情』において、翻訳語は日本語の中で独特の受け入れられ方と意味づけがなされることが示されているが、まさにそのことに社会的なるものをさぐる一つの糸口を発見することができるのである。

## ボ - ログって知ってますか

都立竹台高校 斉 藤 規

N. E. ポーログは1970年のノーベル平和賞受賞者ですが、平和賞というとヒューマニストや宗教家が一般的なのに、なぜかかれは農学者なのです。なぜ農学者が平和賞を受賞したのか、このことを一つの導入として「現社」授業を構成してみたいと思っています。ところで、ノーベル賞については評価が余りに高いためか、かえってかえりみられないのではないのでしょうか。平和賞についてばかりでなく、科学賞についても、数学・気象学・天文学がないという不満や、授賞のルールにさえ疑問が出されています（英の科学雑誌“ネイチャー”1980年10月23日号）。こうした不満や疑問をもふくめ、授業でノーベル賞について話してみようと思うわけです。

ノーベル賞が制定されたのは1900年ですから、80数年の歴史があるわけです。この長い歴史の中から科学賞一覧をみてみますと、はじめの10年間はレントゲンをはじめとするドイツの科学者が群をぬいて多く受賞していることに気がつきます。ところが徐々にアメリカが抬頭しはじめ、1930年以降はドイツをおさえ、1946年には科学賞全部と平和賞を独占してしまうという躍進ぶりを見せています。このこと一つをとってみても、20世紀前半の世界の流れを知

ることができるのではないのでしょうか。

平和賞に話をもどすと、ノーベルが1896年に亡くなった時に、遺産を基金にして前年中に業績のあった人に賞を与えるよう遺言したことがノーベル賞制定の根拠となっています。その遺言の中でかれは「国と国との間の兄弟愛と常備軍の撤廃又は縮小・平和会議の促進と主催に顕著な行動をした個人に、その一部を与える」とのべ、これが平和賞につながったわけです。ですから毎年平和賞はノルウェー国会が選出し、10月10日に発表、その授賞は、ノーベルの命日、すなわち12月10日に行われています。

このようにして制定された平和賞ですが、第二次大戦後の受賞者のみをみても疑問となるところがないとはいえません。まず気付くことは、受賞者に地域的な偏りがみられることで、戦前にくらべ緩和されていますが、受賞者は欧米に多く、アジア・アフリカにはまれだということです（欧・南北アメリカ 27人、アフリカ 3人、アジア（含、辞退）3人）。第二は、ノーベルは個人に賞を与えると遺言したが、特定の組織（フレンド教会、国連難民高等弁務官事務所、赤十字、ユニセフ、ILO）に与えていることで、これは故人の意志に反していることばかりではなく、賞の性格にも大きな影響を与えかねません。第三は政治家ことに職業軍人に与えていることです。1953年の米のジョージ・マーシャル元帥受賞がそれで、いわゆるマーシャル・プランによる戦争の早期終結に寄与したというのが主な評価でしたが、やはり反論が多くてました。職業軍人に平和賞は訓じまないということです。その他にもNOTO議長のアソン國務長官（カナダ）、佐藤栄作、サダト（エジプト）、ベギン（イスラエル）両大統領が平和賞受賞者となると考えこまざるをえないでしょう。しかし、これこそ現代の世界状況を知る一つの手がかりであると考えれば良いでしょう。国際自由労連（ICFTU）の指導者で、フランス労働運動右派の長老のジュオーヤ、独立・自治労組「連帯」議長ワレサ（ポーランド）の受賞などから国際社会の問題点や複雑さを理解させればよいかけて、あえて納得させずともよいだろうと思うわけです。

さて、第二次大戦後のノーベル平和賞受賞者から、現代の世界が負っている魚眉の課題を示してみたいと思います。そこでこころみに数多くの受賞者の受賞理由から3テーマに分類してみますと、分類は以下のようです。第一が食糧問題、第二が人権（含む、人種、植民地）問題、第三が反核運動。こうするといずれも

現社授業の柱ともなる事柄ではないでしょうか。

南ア黒人の流行歌詞（1913年ころ）

われらアフリカの黒人は  
どこまで行けばいいのだ  
われらはさすらい、さすらい  
そして、ああ、どこまで

人々よ見よ、われら黒人の肩の重荷を  
われらはさすらい、さすらい

そばで見ている白人は  
オランダ、イギリス、ドイツ系  
われらはさすらい、さすらい  
そして、ああ、どこまで

人々よ見よ、われら黒人の肩の重荷を  
われらはさすらい、さすらい、

表題にもだしたボーログは多収品種のメキシコ小麦を育成、開発途上国の食糧問題に寄与し、「緑の革命」に貢献したということで受賞しました。GNPが一千ドルに満たない国の人々、飢餓に苦しむ人々をなくすことが平和につながると思うのは当然ではないでしょうか。このメキシコ小麦は地元メキシコの収量を2倍にした後、アジア、ラテンアメリカ、アメリカの各地に輸出され、インドでも収量を1.7倍以上に引きあげたのです。食糧問題は21世紀の世界を考える上で重要な問題ですし、日本の将来にも深刻な課題になる

でしょう。この分野では1949年に国連農業食糧機関（FAO）事務局長ボイドオア（英）がやはり受賞しています。

第二のテーマの人権は、南ア連邦共和国における人権差別に抗したリトウーリヤ、世界人権宣言の起草に貢献したヨーロッパ人権裁判所長カザン（仏）などがあげられますが、とりわけ、1964年に受賞したM. L. キング、Jr が有名ですから、かれの紹介をしながらアメリカ黒人問題の授業に入れたいと思います。また、1979年のマザー・テレサをとおしてインドの人権・貧困の問題に入ってもよいでしょう。他にもランバレネのシュヴァイツァー（仏）、パレスチナ問題のパンチ（米）などをとりあげることも可能です。A. ベレスは軍事独裁が多い南米の中で人権擁護の評価で受賞したアルゼンチンのキリスト教平和運動指導者です。世界の諸地域でこうした人権を守る営みがあることをもっと知るべきではないでしょうか。

人権を守る最大のものは核戦争に反対することです。この第三のテーマではノ

エルベーカー（英）が1959年に、ノーベル賞化学者のポーリングが1962年に各々受賞していますし、ミュルダール（スウェーデン）やガルシア・ロブレス（メキシコ）が国連の軍縮会議に中心的役割を果たしたということで1982年に受賞しました。ノエルベーカーについてはよく知られていますが、ポーリングについては残念ながら知られていません。しかし、ノーベル賞を2度授与されたのは他にはキューリー夫人（仏）だけですからもっと評価されてしかるべきだと思います。このことは、ラッセル・アインシュタイン宣言からバグウォッシュにつながる科学者ヒューマニズム運動の大きな流れの中で位置づけられるべきでしょう。

以上、きわめて簡単にノーベル平和賞についてのべたわけですが、これからはより豊富に資料を集め、授業の中にとり入れたいと考えています。以下の本を参考にしました。

岩波西洋人名辞典 増補版、吉田武彦 食糧問題ときみたち（岩波ジ新書）、高橋功 ノーベル賞の人びと（広論社）、ノーベル賞の光と陰（朝日新聞社）。

## 文化学習にあたっての留意点

都立竹台高校講師 青山純子

「現代社会」は、高校生になりたての1学年で学ぶ科目である。担当の教師は、新鮮な気持ちでとり組もうとしている生徒の期待にこたえ、さらに、学習意欲を喚起させるような授業展開、教材研究に努めなければならないであろう。

文化を教えるにあたっての重点は次のような点においた。まず一つは、1年生が文化的事象に対する興味関心をもてる具体性のある教材を使うこと。二つめは文化の学習においては、知識の記憶だけではなく、文化を学ぶことで、自己のあり方や、社会との結びつきを生徒自ら考えさせるという過程を大切にすることである。

文化学習を大まかな項目に構成し、それぞれについて指導上のねらいや留意してきた点等について述べてみたいと思う。

#### (1) 人間にとって文化とは

人類の歴史から始め、人間は文化を、何百万年という歴史の中で受けつき発展させてきたことに気づかせる。また、野生児の具体的事例をもとに、人間として生まれても、人間社会の分化を学習することなしに人間たり得ないことを示し、人間と文化との関わりを大づかみにとらえさせた。生徒が驚きや新しい発見として文化をとらえられるように、なるべく意外性のある教材を提示した。

#### (2) 文化の多様性と普遍性

農耕系民族と狩猟系民族の食生活の感覚の対比やラテン系民族とアングロサクソン系民族の「礼儀」の違いなどの事例をとおして、世界の多様な風俗、風習の違いに目を向けさせることが学習の基本であるが、異文化に対して、未開、野蛮ととらえたりする自民族文化中心の見方でなく、共通性を見つけ、理解しようとする視点を重視した。

#### (3) 世界諸地域の文化

ここでは、文化圏としてのまとまりごとに文化を大まかにとらえさせ、思いきって地域、事象を精選し、特に、インドとアングロ・アメリカの文化についてじっくり学習することにした。アメリカの文化は、現代の日本に大きく影響しており、生徒が一番親しみを持っている文化であること、反面、インドの文化は、日本人にとって理解しがたい要素も多く、異質に見える文化に取り組むことで、のちに学ぶ日本の文化をより鮮明にすることができるのではないかと考えたからである。

#### (4) 世界と日本の文化交流

日本の文化が、様々な世界の文化との交流の中で形成されてきたことを歴史の展開に沿って理解させる。「雑種文化」と呼ばれるほど、中国や西洋の文化を旺盛に摂取してきていることを、「仏教」「漢字」「外来語」などの身近な具体例をとおして理解させる。

#### (5) 日本の生活文化と伝統

外来の文化を多く受け入れつつも、日本の文化は、日本の気候や風土に合った個性豊かな文化である。稲作農耕文化がその基調をなしており、農耕儀礼にもと

づいた伝統行事がどのように根づいているのかとらえさせる。また、日本人特有の伝統的な人間関係である「集団への帰属意識の強さ」や「和」を尊ぶ考え方も農耕文化を基礎とした村落共同体によって形成されてきたものであるというところをえ方をした。

#### (6) 現代の文化

現代の文化の特色である大衆文化、マスコミ文化を学ぶ中で、現代の文化には、非常に発達した面と、克服しなければならない面があるということを明確にしていた。特に、マス・コミ文化の中で生まれ育った高校生がただ、受動的にマスコミ文化を受け入れるのではなく、批判的に考えることができるようにしたいと考える。また、マスメディアの一つである新聞に着目し、その成立の背景や、日本の新聞の特徴、社会に果たす役割等を学習させる機会をもうけたりしたが、現代の文化を学習する上で、身近なものから教材をどのように選び、活用するかが重要であると思われる。

### 〔第2分科会……授業展開の研究〕

## 研究経過報告

都立田無工業高校 辻 勇一郎

ひとつの教材であっても、授業展開を工夫することによって、さまざまな授業実践が可能となろう。「現社」は若いだけに、多くの展開・工夫が考えられよう。しかし、若いゆえに、スタイル、方向、見透しはそんなに定かでない。いまは、諸々の可能性を追究していく段階といえるし、それだけに、いろいろなところみがおおいに期待されよう。

本分科会では、本年度、実質5回の会合もたれた。若い「現社」のよりよい授業展開をめざして、諸先生方より実践例が報告され、着実な成果をえることが

できた。おいそがしいなか、出席に御足労いただいた先生方、また分科会のために熱意あふれる御支援をされた多くの先生方に、この場をかりて心より感謝の意を表させていただきます。

以下、各回の会合での活動内容を記しておく。

① 第1回 6月9日(木) 都教育会館

小嶋(東)、工藤(三鷹)、幸田(玉川聖学院)、古山(小金井北)の各先生と辻の6名が出席。まず幸田先生より、昨年度のグループ研究学習について報告していただく。立派な冊子として実をむすんだレポート集を持参され、指導方法や評価などを具体的に語っていただいた。古山先生はアイデンティティ論にもとづく青年期の指導案、授業をされての反省、苦心談を話題とされた。また小嶋先生は、「政経」授業での生徒の3分間スピーチについて報告された。ファイルされたスピーチ記録集を持参され、スピーチの指導のしかた、とくに聞く側の指導にも工夫をこらした実践例を話された。

② 第2回 7月7日(木) 都教育会館

出席者は、市川(駒大高)、小嶋、工藤の諸先生方と辻の4名。市川先生より、「現社」の目標と内容構成、さらに「現社」と「倫理」との関連性についての詳細な報告をいただいた。都倫研総会時での御発表をより深くすすめた内容であった、「現社」の性格づけ価値づけという点で、啓発にとむお話であった。以下、大略を記しておく。「現社」の性格を考える場合、目標をたてることが出発点となる。その目標を「人間の権利」としてみる。この観点から「現社」の各領域を構成し、位置づける。「倫理」との関係をいえば、「現社」が人間の行動のいわば全体像をあつかうのに対して、「倫理」は価値実現という実践面にかかわる。それゆえ、「倫理」の目標は「人格の完成」にある。

③ 第3回 9月9日(金) 九段高校

市川、蕪木(九段)、小嶋、小島恒己(小川)の各先生と辻の5名が出席。小島恒己先生に報告していただく。「現代社会と私たちの生き方を考えるにあたって」と題した授業実践内容を説明された。発問形式を通じ、授業の全体像を生徒に確認させながら具体的なテーマへすすむ実践例を紹介。とくに、生き方を生徒が主体的な問題としてとらえていくために、「私たちの生き方」というふうに具体的に設定する重要性を指摘された。

この席で小嶋先生より今後の分科会活動にかんして、各自に共通課題を設け共通学習という方向もとり入れたらいかがか、との提案があり、出席者の同意をえた。そこで次回のテーマを「公害」ときめた。

④ 第4回 11月11日(金) 都教育会館

出席者は、細田(練馬工)、小嶋、幸田の各先生と辻の4名。「公害」についての諸先生方の報告をいただく。まず幸田先生から。先生は、今年のグループ研究発表の概要を、とりわけ公害を課題としたグループの活動内容を話された。生徒自身によるプリント・スライド・レポート集を持参され、具体的に説明していただいた。いつもながら幸田先生の、生徒の意欲、実践をひき出す手腕・エネルギーには感心させられる。つぎに小嶋先生より、水俣病をとらえる観点<sup>W</sup>について、参考文献を紹介されての、お話があった。先生は水俣公害にひそむ高度成長のウラの部分を問題とされ、またそのことに関して、日本人の精神構造の問題を指摘された。さいごに辻が、食品公害を通して公害問題の本質をとらえていく観点と、その授業展開例を報告。終了後、次回のテーマを「日本文化」ときめ、第1分科会と合同でおこなうこととし散会した。

⑤ 第5回 12月8日(木) 四谷商業高

工藤、小嶋、増淵(片倉)の各先生が出席されたが、流会。そのまま第3分科会に合流した。

⑥ 第6回 1月20日(金) 都教育会館

第1分科会との合同例会。和田(四谷商)、工藤、蕪木、小嶋、増淵、井上(八王子東)、杉本(日野)の各先生と辻の8名が出席。「日本文化」についての諸先生方の報告をいただく。和田先生は、食生活と日本文化をめぐる授業実践例を話題とされた。辻は、日本文化を「型と形」からとらえていく観点、その授業展開例を報告。小嶋先生からは、近代日本人の生き方の問題点をあつかった「倫社」での授業実践を、発表していただいた。杉本先生は、性教育と青年教育の問題にふれて、とくに出席のもつ意味、重大性にかんして、民俗学的見地からの報告をされた。参加された先生方の活発な発言がつづき、すでに9時の閉館時をすぎていたので、場所を近くの食堂に移して続行。その席で蕪木先生は、文化と自然観にふれた実践例を報告され、日本人の自然観にみられる特質を、西洋と対比して考えさせてみるべき旨の指摘をされた。いつしかアルコールも入り、歓談も

熱をおび、夜半近くに散会となった。

## グループ研究を生かした現代社会の授業

都立江北高校 宮崎 宏一

### <はじめに>

“世界を知り、日本を知り、そして自己を知る”というスローガンを自ら立て今年度から初めて「現代社会」という新しい科目を教えている。いや、教えているというよりは、久しぶりに勉強させられているといった方が正確であろう。およそ20年間、倫・社の教師として、私なりに築き上げてきた「倫理・社会」のねらいと目標が、それなりにあった。その学習体験や授業展開を、現代社会ができたからといってそう簡単に変えることができるはずがない。そこで、私はこう考えた。倫・社風、あるいは倫理的現代社会の授業をやってみよう……。それは、グループ研究発表を倫・社と同様、現代社会のなかにも生かしてみよう決心したことに、はじまる。生徒が今後の人生を生きていくうえで、自ら考え、判断し、自分自身の人生と社会生活を充実したものにしていくことのできる力を育てるにはどうすればよいか。……そこにポイントを置くことにした。

### <自らとらえ、考える能力を/>

生徒が生き生きと目を輝かせて食いついてくる授業を目指し、「現代社会」のねらいに即して、社会の諸問題に自ら興味と関心をもってとらえ、そして自ら進んで考える能力を養うために、グループ研究発表学習を実施することにした。1学期は1班6名～7名のグループづくりから始まり、各グループの研究テーマ・サブタイトル・研究の主旨・共通読書名・個人読書名等を決定する。グループ内でのディスカッションを工夫し、一人一人の生徒がグループワークを経験していく過程で、相互の親密感を深め合い学ぶための積極性を尊重し合い、そして自ら考え、まとめ上げ発表という段階に到達する。研究発表は2学期からで、週4時間の授業のうち1時間を研究発表にあてる。場合によっては、熱が入り、2時間も3時間もかけた発表もある。次頁の現社グループ研究カードにも記入する欄が

あるように、最も生徒たちが、悩み、苦しみ、大変なことは班でのテーマにそくした共通読書と個人読書を選んで決定することであろう。図書館へ行ったり、資料集をじっくり読んだり、神田の書店に出かけていったり、先登に（現3年生は倫・社でグループ研究発表を体験している。）教えてもったり、彼らは1学期の後半から動きはじめ、なんとなく目が輝いてくる。

そして夏休みをつかって、共通読書と個人読書の最低2冊を読破しようと懸命に努力する。

2学期に入るとまもなく、グループ研究報告書の提出である。この報告書には、先の共通読書と個人読書の感想や研究記録を記入すると同時に、生徒とのコミュニケーションを深めていくための一つの手段として、各班員の集合写真と班員一人一人の顔写真を貼るようになっていた報告書なので、親しみのあるものである。ここ2年間は、私がカメラを持って、各班ごとに教室の中や廊下などで写真を撮っているが、一つのマス・メディアを使いだけで、生徒との間が非常にスムーズになっていくのには驚かされている。

現・社グループ研究カード

テ　　マ		
サブタイトル		
研究の主旨		
共通読書		
班　　長		個人読書名
記　　録		＂
班　　員		＂
＂		＂
＂		＂
＂		＂
＂		＂
1年　組　　班		提出〆切日 6月30日

話が前後してしまったが、グループ研究のテーマの設定のしかたは、原則として、教科書、及び副読本の中から選び、自主的・主体的に取り組んでみたいものを、各班でよく話し合い、決定することになっている。そこでいくつか、テーマ

とサブタイトル等を次にあげてみると、

—(例)—

テ — マ……………私たちの未来

サブタイトル ……現代社会における公害、食料問題と未来への希望

研究の主旨……………現代社会の情勢やその他の諸問題を通して未来を展望する。  
具体的内容として、1) 公害問題、 2) 国際情勢、 3) 食料  
問題、 4) 資源問題、 5) 自然破壊問題、その他宇宙開発・  
人間のあり方など。

テ — マ……………情報化社会の実態

サブタイトル ……現代日本におけるマスメディアの実態

研究の主旨……………社会におけるマス・メディアの実態は何か。情報化社会で  
マスメディアはどのように成立しているか。  
映像メディアの原作となった書物を見て、どのように感じ  
そして映像とどのようにちがうか。

### <グループ研究の評価について>

よく聞かれることであるが、グループ研究をすると、発表者だけ一生懸命であ  
って、他の生徒は、さわがしく、遊びの時間になってはいないか？ 評価はどう  
するのか？ 進捗はどうなのか？ ……たしかに、やり方によっては授業がメ  
チャメチャになってしまう恐れがあると思っていることは確かである。つまり、  
緊張感がなくなると生徒は、自由、気ままに、遊んでしまうので、できるだけ、  
ビリッとしたムードをこちらである程度つくってやるようにしている。グループ  
研究発表の内容もすべて定期考査の範囲に入れたり、生徒同志の評価をやらせて  
グループ毎の競争心をかもし出したり、私の最高の評価でもあるVery goodを  
与えたりしながら発表学習を展開していく。下記の評価カードは、今年度から考  
えはじめたものであり、まだ不十分であるが、一つの参考にしてみたい。

現代社会グループ研究発表評価カード

[    ] 班・テーマ \_\_\_\_\_

	(大変良かった)	(良かった)	(普通)	(もう少し努力がほしかった)	(努力不足であった)
I 研究の主旨について	5	4	3	2	1
II 発表の方法・資料づくりなどについて	5	4	3	2	1
III 研究発表の内容について	5	4	3	2	1

IV 特に印象に残った事項・内容について具体的に書いて下さい。

V 発表した班員のなかでどの点が良かったか具体的に書いて下さい。

[    ] 組 [    ] 番 (    ) 班・氏名 \_\_\_\_\_

## <おわりに>

昨年の暮、自宅学習期間をつかって、現代社会の授業の一環として希望者のみを対象にした工場見学を初めて計画し実行した。新狭山にある本田技研工業KKの、オートバイと自家用（乗用車）車の組立てとオートメーション化の工場内部をくまなく案内してもらい、解説をしてもらった。

見学のあとで、質問の時間をとってくれたが、熱心な生徒たちの質疑応答で、なんと1時間半も延長してしまった。係の方もむずかしい質問が沢山だったので驚いていたが、私も生徒たちの生き生きとした真剣な態度に、むしろ感動してしまった。教科書だけでなく、板書だけでなく、このような立体的な学習形態こそ現代社会がめざしている姿ではないだろうか。

あえて、グループ研究を取り入れて、現代社会の授業をいくらかでも立体的に興味や関心がわいてくるようなものにしていくことができるように、これからも努力していきたい。「現代社会は、生徒をもとに、生徒の身についた学習を生き生きと展開することのできる科目として構成されているのである。」と言った金井肇先生の言葉が思い出されてくる。

# 「自由」について

都立駒場高校 細谷 齊

## 1. 問題の所在

「自然の歴史は善からはじまる。神の業なるが故に。自由の歴史は悪からはじまる。人の業なるが故に」カント

「自由」について、という大袈裟なテーマを掲げたが、ここで「自由」の意味や内容について哲学的な検討を加えようというのではない。私達が日常わかりきったものの如く用いている「自由」という言葉について、授業する際の私なりのメモをまとめるにすぎない。正直に言えば、私自身、人間の自由とは何か、本当に理解しているとはいえない。観念的な意味は多少わかったつもりでも、自己自身の精神の自由となると全く自信はない。ただ、自由は得手勝手や放縱のことでないことは承知しているつもりである。所で、私達の日常生活をふり返ってみると、あまりにもエゴイステイックな自由論や自由とは名ばかりの勝手な言動が横行しているのに気づく。さまざまな問題や課題があるが、私自身日頃生徒指導（生活指導）とのかかわりで考えていることの一端を述べたいと思う。

高校の伝統は「自由」ということか。戦後日本人は様々な言葉が好きになったといわれる。例えば「文化」とか「平和」とか「民主主義」とか「愛」とか「平等」という言葉が多用されている。これらの中でも「自由」はとりわけ頻繁に手軽に用いられているといえる。戦前の軍国主義の日本と戦後の民主主義の日本の最大の違いが、自由の保障の徹底化にあることは間違いないことで、従って「自由」を謳歌することは正しいことである。しかしながら、私達が「自由」という言葉について正確な認識や判断力を持っているかと問うてみると疑問なしとしないのである。問題の領域を私達の職場である高校や生徒に当ててみよう。最近の校内生活をみていると、明らかに「自由」の意味を誤解もしくは曲解していると思われる現象が数多見受けられる。例えば遅刻の常習化、パンを購入するためや昼食の為の外出、ジュースやコーラ類のビン、カンの散乱、清掃当番のサボリ、上下履の乱れ、下校時の買い食い、教師に対するエチケットの乱れ、授業時の落着きの無さ、等々はどここの学校でも一般的にみられる現象ではないかと思われる。勿論、それぞれの学校における教科や生徒指導のあり方によって生徒の状況に違

いはあろうが、生徒部の会議などで意見交換をしながら聞かされる話はどこの学校も全く同様の問題で悩んでいることを思い知らされる。そして、このような生徒の状況の裏側には、生徒のみならず私達教員の意識の中にも、一種の美しい誤解があるように思われる。それは何かといえば、高校は自由な所である、あるべきだ、という内容のない思い込みである。私の勤務校でも、生徒は「本校の伝統は自由ということだ」などと言っている。しかし、その自由が何を意味するのか改めて考えようとはしない。学園祭の頃、二学区のある都立高校へ行った際、学園祭のプログラムをもらったが、そこにも、「本校の伝統は自由だ」と書いてあった。自由を校風とか伝統に掲げることは本来的に結構なことではある。しかしながらたして、高校の伝統は自由でありうるのか。断わっておくが、私は高校の伝統(校風)の一つに「自由」を尊重することがあることを否定しようというのではない。旧制高校とは違って、高校には自由な空気がなければならぬ。しかし、それは、学習することの上に成り立つものでなければならぬ。現在の都立高校で自由が言われる場合、実際には生徒心得や校内規律の弛緩、或いは学校や教師の生徒指導の無力や行き詰りを指していることがありはしないかということである。生徒の逸脱行動やルール無視を自由という言葉の拡大解釈で見逃すようなことがあるとすれば、なし崩し的に学校全体の教育活動の低下をもたらすことになる。言葉が実体を失う時、その意味は失われるのであるから。

## 2 自由の意味は何か

「自由」が何であるかについては、古来より多くの哲学者や思想家が様々な定義を与えてきた。先ずその例をみておこう。岩波新書のクラントン著『自由—哲学的分析—』には次のように並んでいる。ドゥンス・スコトゥス—「自由とは意志の完成態である」ホッブズ—「liberty ないし freedm は、元来は、妨害 opposition [つまり、運動を妨げる外的障害]の不在を意味する」ロック—「自由とは、ひとの有する個々の行為を行なったり控えたりする能力である」ヒューム—「自由という語によりわれわれが意味しえるのは、意志の定めるところにしたがって行動したり、あるいは、しなかつたりし得る力ということのみである」カント—「自由とは道徳法則のみに従いその他のいかなるものからも独立できること」ライブニッツ—「自由とは知性の自発性である」ヘーゲル—「自由とは形を変えた必然性である」ハイデガー—「自由とは『存在するものを存在す

るものとしてあらわにすることに関与すること』である」シェリングー「自由とは、最高度に自発的である存在法則を通じての無差別者の絶対的限定に外ならぬ」エンゲルス「自由とは、自然必然性にかんする認識にもとづいてわれわれの行なり、われわれ自身及び外的自然にたいする統制である」これらの定義はそれぞれに意味のあるものであるが、私達が現在問題としている自由の日常的意味を超えている。但し、クランストンの次の説明は頭に入れておいてよい。「この多様なリストを見渡すと、哲学者たちは二つのグループにはっきり分かれており、それぞれが自己のグループに共通する答えを出している。つまり第一のグループは、自由とは能力である、と主張し、第二のグループは、人間にとっての自由とは理性による支配である。…自由 freedom という語は、束縛などの不在を意味する。しかし、束縛には多くの種類がある。それゆえ、自由にも多くの種類がある。「自由」という語は、記述語としては不完全である。「自由」がなにを意味するかを理解するには、それがなにからかの自由であるか、あるいは、なんのための自由であるかを、われわれは知らねばならない。」

### 3. 自由とは他人を害しないすべてを為しうること

自由の定義が多様であることをみなが、「自由」は近代社会において「平等」や「博愛」と並んで市民社会の最高原理とされる。人間性の本質としての「自由」は、近代立憲主義の根本となったのである。このような例としてはフランス革命人権宣言（1789年）第4条の定義にまさるものはないであろう。「自由とは他人を害しないすべてをなし得ることに存する。その結果各人の自然権の行使は、社会の他の構成員にこれと同種の権利の享有を確保すること以外の限界を持たない。これらの限界は法によってのみ規定することができる」とある。人間の自由を高らかに宣言したもので現在読んでも新鮮である。しかし、「他人を害しない限り」という条件は一体具体的には何を意味するのか問題である。そこで卑近な例として用語辞典の説明をしてみることにする。岩波の『広辞苑』では、自由 ①心のままであること。思う通り。自在。②一般的には、何かをすることに障害がないこと。自由は、こうした条件からの自由であるから、条件次第でさまざまな自由がある。無条件的な絶対的自由というものはない。何かをする自由は、障害となる条件を除去・緩和することによって拡大するから、人間の目的のために自然的・社会的条件を統制することも自由とよばれる。この意味での自由

は、自然、社会の法則の認識を通じて実現される。と説明され、以下(イ)社会的自由 (ロ)意志の自由 (ハ)倫理的自由の説明が続き、さらにその後には自由のついた成語がズラリと並んでいる。小学館の『国語大辞典』では、自由 ①(形動)自分の心のままに行動できる状態。思うまま。②ある物を必要とする欲求。需要。③便所。はばかり。④(英liberty, freedomの訳語)哲学で、政治的自由と精神的自由。一般にlibertyは政治的自由をさし、freedomは主に精神的自由をさすが、後者が政治的自由をさすこともある。⑤人が行為することのできる範囲。とある。自分の心のままであること、自分の思い通りにふるまえることが、自由の本義であることは確かなようである。しかし、心のままであることと、他人を害しないという条件はどのように結びつくのであろうか。

#### 4. 自由は我儘や放縦のことではない

自由の定義づけがむずかしく、また原意として自由、自在、他からの束縛を受けないということが明らかであることから、実際問題としては、自由という語は多種多様の使われ方をしている。利己主義や我儘勝手などを自由という言葉でカバーするのである。ここで自由と似て非なる同義語や類義語をあげるならばこれも数多い。「わがまま、身勝手、放縦、放恣、ひとりよがり、独善、フリー、自在、気まま、得手勝手、ほしいまま、自在、放逸、漫然、気まぐれ、随意」などが自由と混同されている。しかし、まさにこの点を明確にすることが大切である。自由は我儘勝手ではないことを。「自由」は英語ではfreedomとlibertyであるがこの両語の訳語として「自由」をあてて一般化したのは福沢諭吉の『西洋事情』(1866年)といわれている。同書の「政治」の項目で次のように述べている。〔本文、自主任意、自由の字は、わがまま放縦にて国法を恐れずとの義にあらす。すべてその国に居り人と交わりて気兼ね遠慮なく自分だけの存分のことをなすべしとの趣意なり。英語にてこれをフリーダムまたはリベルチという。いまだ適當の訳字にあらす〕。そして同書の第二編(1890年)でも、原意を尽すに足らぬ訳字だとした上で、「一身の好むままに事を為して窮屈なる思なき」こと、をはじめとして4義ありとし、さらに、「初編巻之一第七葉の割註にも云える如く、決して我儘放縦の趣意に非らず。他を害して私を利するの義にも非らず。唯心身の働きを遅して、人々互に相妨げず、以て一身の幸福を致すと云ふなり。自由と我儘とは動もすれば其議を誤り易し。学者宜しくこれを審にすべ

し」と繰り返し強調している。自由と我儘、気儘とは別のもので、はきちがえた自由は自由とは無縁だという、敗戦以来、耳にたこがつくほど聞かされ、しかも一向利き目のない説教の原型が、百年前に見出されるとはおどろきだが、ここにはすでに二重の屈折があったといえよう。（大沢正道氏論文「現代を超える自由の哲学」岩波書店、思想№544号1969年）ここで大沢氏が指摘している二重の屈折の意味は大切な問題であるが、紙面の制約上割愛する。

## 5. 高校（生）教育における真の自由とは

福沢が百年も前に指摘した通り、自由と我儘とは同じではない。これは誰でも理解出来ることである。しかし、実際問題としては、この両者の混同は現在もかなり続いているといえよう。私達の職場の中にもそのような具体例が数多見出されることは初めに触れた通りである。戦後広く読まれた池田潔の『自由と規律』は古き良き時代の英国パブリックスクールの教育における精神と肉体の鍛錬を通しての人格教育が述べられている。「…かく厳格なる教育が、それによって期するところは何であるか。それは正邪の観念を明にし、正を正とし邪を邪としてはばからぬ道徳的勇気を養い、各人がかかる勇気を持つところにそこに始めて真の自由の保障がある所以を教えることに在ると思う。」、このような規律ある教育は、少なくとも現在のわが国では殆どみられない。わが国では人格教育とか道徳教育というものは、公立学校ではタブー視され、逆に私立学校の中には権威的な躰教育のみを売りものにしてている場合が多い。いずれにせよ、人格教育はまともに取り上げられてはいない。極端に言えば、わが国の現在の高校教育には、真の人格的な教育は甚だ乏しいといわざるを得ない。成績の良いといわれる学校は進学率のみに狂奔し、スポーツの強い学校はスポーツの優勝のみに全力を尽し、またこの両者に入らない学校は社会から殆ど認められず、活気を失っている、といった状況ではないのか。このような状況においては、学校も教師も生徒も分裂し、混乱してしまう。実際に混乱している。高校生教育の根本は何か、改めてよく考えてみなければならない。（舌足らずの駄文をお詫びします）

補 「自由」の意味、内容についてはよく言われる「～からの自由」と「～への自由」の二通りの用いられ方についても触れたかった。次の資料を参照して頂きたい。谷川徹三著『自由人の立場』平凡社、ハーバート・リード著大沢正道訳『アナキズムの哲学』法政大学出版局、及び上文中の大沢正道氏の論文。

# 「日本の生活文化と伝統」学習 —「型と形」からのアプローチ—

都立田無工業高校 辻 勇一郎

## 1. はじめに

南博は『日本の自我』（岩波新書，1983）のなかで，日本人特有の意識傾向として「型の意識」を指摘している。「型の意識は生活のあらゆる面で，行動のある一定の型に沿って行ない，自我の確実感に役立てようとする心構えである。それは定型化の追求であり，型を守ることに重点をおく生活意識である。そのために何事も慣行に従ってとどこおりなく型どおりに行い儀礼的な行動が重んじられる。そこでは礼儀作法，年中行事が守られ，敬語に代表されるコミュニケーションの型が大切にされる」

そうであるならば，授業で「日本の文化と伝統」をとりあつかう場合，「型」の問題・視点からアプローチすると，展開しやすいのではなからうかと考えてみた。以上の観点から，以下，『現社』での「日本の文化と伝統」の位置づけの考察，それにもとづく授業展開の視点と方向を記してみる。

## 2 文化＝人間の生きかたという観点

「日本の文化と伝統」について，指導要領では次のような構成のもとでとりあつかっている。

- 現代社会と人間の生き方
  - 人間生活における文化
    - 世界諸地域の文化交流
    - 日本の生活文化と伝統
    - 現代の文化

ここでは，人間の生き方という観点から文化がとりあげられている。

そこで，生き方ということに焦点をあててみて，文化を人間の生き方＝かた＝「型」「形」の問題としてアプローチできないか，そして，その方向から「日本の生活文化と伝統」にきりこめないかと思ひ，そうした見地から授業展開の流れ，すじみちを構成してみた。

### 3. 「型と形」の考えかた

授業展開の流れを記していく前に、アプローチの視点である「型と形」の問題にふれておく。

この問題については、杉山明博著『日本文化の型と形』（三一書房、1982）がたいへん参考になる。以下、それに基づき考察を加えると、

「型」とは「目に見えなく形の背後にあって、影響を与えるもの」であり、「精神性、気質、美意識、作法」などの、心のかたちといえるもの。

「形」とは「目に見える視覚にうったえる具体的な形」であり、「目に見える物、建築、道具、しぐさ」などの、心のかたちが身体を通して具体的に表われたもの、「型」の形象化といえる。

この立場からみると、文化は「型と形の総体」という意味でもあり、「地域的なちがいによってもたらされる土着的な固有な特性や生活のしかた」である。

「伝統」の問題は、「型と形」からとらえることができる。つまり、（日本の）「伝統」とは「型」の継承・伝承であって、そのことは「日本の風土の中で、永い間培い、生活化して来た、内面的な生活の作法であり、行動の基本的な規範」としての「型」を伝承することである。すなわち、生きかた＝心のかたちを形として伝承すること。

以上の観点から「日本の生活文化と伝統」の授業展開の方向を考えてみるならば、次のすじみちが構成されよう。文化の問題をまず「形」という現象形態からとらえ、そして「型」の問題へと展開させ、そのことによって心のかたち（型）＝生きかた・ありかた、さらに伝統の問題へとせまっていくこと。授業展開にさいして、文化を生きかた＝「型」「形」の視点からとらえ、日本文化の特徴・特質を具体的にうきほりにしていくこと。

### 4. 授業展開のすじみちと流れ

教育出版社『現社』 — 「日本の生活文化と伝統」のところ。

内容構成を記すと

#### 2 節 日本の生活文化と伝統

##### 1. 文化の伝統

型で伝える 型による教育
-----------------

消える風俗，残る風俗

日本人の生命感

ここでは上記の□のところを授業展開していくこととする。以下，展開の流れを記しておく。

導入部 — 「形」を，について。

日本の生活文化の「形」をみていくことから入る。

例として「暮の内弁当」をとりあげる  
きりこみ口として → 「暮の内弁当」という弁当が  
    ◦ 実物をみせる  
    ◦ 写真をみせる  
    ◦ 発問形式で，など  
なぜ「暮の内弁当」か，由来・歴史について  
→ 弁当の姿・なかみをみる  
配置，もりつけ，構成，おかずの種類，ならべ方，全体の姿など  
→ なんて，そんな形か  
    日本人の生活感覚や美意識を示している  
食生活についての，日本人のきもち・態度があらわれている  
→ 日本人の心（生活意識）が形としてあらわれている

「形」から「型」の問題へつなげていく。

↓

展開部 — 「形」から「型」へ。

日本文化における「型」の存在を認識させていく。

このように日本人の生活感覚・きもちは，日常生活でさまざまな形・態度をとってあらわれる  
どんな形・態度があるか → 礼儀作法，年中行事，通過礼儀，儀式など  
たとえば，礼儀作法をみていこう（具体的に）

衣・食・住の生活では

対人関係においては

形として、さまざまな姿・態度に表現されるが、その「形」は日本人に共通の「形」であらわされている

→ 共通の行動様式、生活様式の表現となり、形の基本

→ 「型」の存在

日本人の心のかたち = 基本・規範 = 型

「型」は、前の世代からうけつがれてきたもの

「型」によって、「型」を通して、日本人の生き方・ところを伝えている。

ww

「型」の意味から生き方へ。



まとめ — 「型」と生き方

「型」を学ぶことは生き方を学ぶこと。

日本人の日常生活 → 「型」を身につける世界

→ 型（心のかたち）を身につけることにおいて、それによって日本人としての生き方を学んでいく

次時への動機づけ — それでは、それらの「型」はいつごろ生まれ、

伝わってきたのか □ 伝統の問題へ。

## 5. おわりに

授業展開を具体的に構想するさい、導入部にいちばん腐心する。導入部がビタッときまれば、あとの展開は比較的スムーズにすすむ。導入部がよくないと、授業展開の流れはまずうまく行かない。そこで、ここでは導入部のプロセスにいくぶん比重をおく方向で展開構成してみた。

導入（部）を、生徒にとって日常的で身近な現象（問題）からはじめることを心がけているが、しかし、その“身近な現象（問題）”を何にするかとなると、なかなかむずかしい。対象がきまったとしても、こんどはそれをどのようにあつかっていくのが問題となろう。

ともあれ、本稿はそのつたないところみのひとつにすぎない。諸先生方の御批判をあおぐ次第である。

## 「現代社会」のグループ研究

玉川聖学院 幸田 雅夫

### I ねらい

昨年度、今年度と高1の現代社会の授業を担当させていただいた。グループ研究、発表を2年間続けてみての経過は、都倫研の分科会などで報告させていただいた。今回、2年続けてみての雑感等をここに書かせていただく。

個人でのレポートは宿題などで書くチャンスが多くあるが、グループでレポートを作成するとなると、年間に何回もできない。グループとなるとひとりで作る気楽さがないが、ひとりでやるよりもグループでやった方が大がかりなものを研究できるし、素晴らしいものが調べられる可能性がある。

授業の中にかに生徒を参加させるかは、生徒を動かすのが良い方法であると思う。グループ研究もそのひとつの方法である。発表する者が日常クラスで生活をしている友達なので、授業に親しみがもてる。また生徒にとっても貴重な体験、経験である。生徒にとっては、テーマを追って学ぶことは、いくらかの時間集中し、また熱中して取り組むチャンスである。一時的ではあるが一生懸命勉強せざるをえない状況に追い込む。ひとりひとりの力がいかなるものであるか考える時でもある。

私にとっては、生徒の名前と顔が一致し、生徒を知る良いチャンスであり、意外な一面を知ることもたくさんある。生徒にとっては苦痛な時期でもあるが、授業を担当する者としては、毎時間が楽しみである。発表するとなると、ある程度は知識を得ていないとできないものだ。一年間の授業のうち、何も得なかったとなると教えた側に問題があるが、グループ研究は、双方共にプラスになる面が多く思われる。

## II 内 容

### 1. グループ編成からテーマ決定まで

グループの編成は各クラスにまかせている。「約半年間グループ研究は続くから、そのつもりで良い友達、協力してくれる友達といっしょになること。裏切るような友達をくれぐれも見つけないこと」と注意している。仲良しだけがいっしょになるのではなく、それなりに編成している。グループの中にリーダー格がいるのは自然の現象か。

グループ編成と同時にテーマの選定が始まる。6月上旬より始め、下旬には、決定する。7月の夏休み前の暑い盛りに、各グループは、クラス全員の前でテーマの発表を行なう。

- (1) なぜこのテーマを選んだか
- (2) 問題点はどこにあるか
- (3) おおよそどのように調べていくか
- (4) どんな資料を使うか
- (5) グループで特に力を入れること

以上の5点をレジュメにして生徒全員に配る。問題点は『全体図』にして整理させる。レジュメ提出前は教室、図書室に生徒が残っている。職員室にも昼休み、放課後とよく生徒達が来る。問題点をいかにとらえるかがレポート作成に影響する。

全員の前で発表させる意図は、「私達は〇〇をやるんだ！」という自覚をもたせることと、グループごとに発表させることにより他のグループのすぐれたところを盗ませるところにある。問題点がよく整理されているグループはうんとほめることにしている。ほめられるとまんざらではないらしく、他のグループに対しての刺激にもなる。本当にやれるかどうか、念を押す。

問題点を整理してから分担して、各人が何を調べるのかグループで再度話し合いをさせる。夏休み前は、全校の「音楽会」があったり、また、「文化祭」の準備などで忙しい時期である。ほとんどのグループが夏休みに何度か集まって、レポート作成にとりかかる。

### 2. レポート提出から研究発表まで

9月1日の始業の日にレポート提出。職員室前にクラスごとに持参させる。夏

休みが明け、忙しい時期である。

本校は2期制のため、始業して1週間後に期末試験、それから、『学院祭』（文化祭）『体育祭』と10月初旬まで行事の連続である。10月下旬より各グループの発表となると、この間に生徒が提出したレポートを読まなくてはならない。私にとっては時間に追われる毎日が続く。昨年度は27クラス19グループ84名の生徒分、本年度は40グループ176名のレポートを読んだ。朱をいくつか入れておかないと、「先生読んでないな」と言われてしまいそうなので、2、3のコメントをつけておくように努力しているが、10月中旬に返却するのは大変なことである。

返却と同時に発表日も決め、スケジュールを立てさせ、10月下旬から、2月まで、週1回の割り当てをクラスごとに行なう。スケジュールに関してはすべてクラスに一任した。

2年間発表をやってみて、週1回位が妥当のように思える。1ヶ月位の間で集中して毎時間やるのもひとつの方法かもしれないが、週1回位の方がマンネリ化しないような気がする。発表の2回前までにはレジュメを用意させているが、そのチェック、印刷なども、毎時間では負担が大きい。

生徒にとって発表は自己主張の場である。時間の使い方はすべてグループに任せた。本年度は、「必らず一度は教科書を使うこと」としておいたので、一度は教科書を見た。

1番目に発表のグループは準備も短かく戸迷いが、2番目からは、OHP、スライド、カセットなど、数々の視聴覚機材を使うようになった。小中学校で使ったことがある者が多いので準備などはすべて生徒がしてくれる。各クラスに本年度からスクリーンを設置したので、大いに活用をしている。

本年度はレポートの段階で関係した施設などの訪問をなるべくさせるようにした。いくら図書館などで文献を調べるのもひとつの方法ではあるが「百聞は一見」で発表の時も効果を上げていた。たとえば、障害者のことに関して調べたグループは、近くの福祉会館に出掛けてみて、障害者用のトイレ、エレベーター、歩道など行って見て、その様子をスライドにできてくれた。盲導犬訓練のグループも、実際に訓練所に出掛け、トレーニングに参加してきた。アイマスクをして、盲導犬と共に歩いた体験は、本当に貴重なものであったようだ。「ニセモノ」で

は生徒達は満足しない。「ホンモノ」主義をとってかなりの成果があったことは確かである。

「写真ではできればスライドにすること」と言っておいたので、発表の時にはそれらを活用していた。公害認定患者とインタビューすることができたグループは、発表の時にそれを流してくれた。時間の関係で全部を聞くことはできなかったが、授業が終わってから、「先生是非聞いて下さい」とのことで、貸してくれた。発表する側、また聞く側にとっても時間が短く感じられることが多かった。自分達がやってきたことに関して、かなりの自信をもったことは確かである。「ホンモノ」に触れることが生徒達にとってどれだけプラスになるのかよくわかった。

### 3. 研究発表後

発表してしまると、そこで終わってしまったような気になってしまう。「興味をもったらもっと調べなさい」ということで、最後にもう一度レポートを見ることにしている。調べることで、学ぶことが楽しいことだと感じている者もいるし、研究発表をした分野に関しては多少なりとも、みんな注目をしているようだ。また発表で内容が不足していたグループに関しては、事後課題ということで、再度調べてもらうことにしている。次の年度の参考にするため、感想を出してもらっている。生徒達の感想を読んでいると、そう悪い結果が出ていない。

## III ま と め

2年間、現代社会の授業でグループ研究をやってみて、生徒達は、社会科で扱う問題が身近かなものであると感じているに違いない。生徒にとっても、また教師にとってもプラスになる点が多かった。未だ完全なものとはいえないが、貴重な自己主張の場であると同時に緊張の場でもある。

今年度は、「教科書を発表の時に一度は開く」ということを原則としたが、上手く利用していた。「ホンモノに触れてくる」というのは前に述べた通り成果があった。生きた勉強、生きた学習は、自発的に動きだして得てくるものであろう。

クラスによって差はあるが、最初のグループより、2回目、3回目と発表が進むにつれ、工夫がみられる。ほめるとすぐに真似をするが、生徒達は、あの手、この手と考え出す。グループの差、個人の差同様にクラスの差もあったようだ。クラスの雰囲気やグループ研究や発表に伝わってくるような気がした。4クラスもつとどこかに現われてしまう。

発表前日の放課後は生徒達の大切なリハーサル場である。終礼が終わって職員室に戻ると生徒達が待っている。OHPやスライドのプロジェクターを借りて教室のスクリーンを下ろして練習をしている。1年生の各教室は職員室から見える。下校時刻の6時ぎりぎりまで残っている。中にはクラブを休んでまで頑張っている。私よりむしろ生徒の方が気合いが入っている。陽がおち暗くなると、教室の電灯がやけに明るく感じる。週番の教師にとっては後始末が気になるであろうが、生徒達が机を並べて翌日の発表準備に精を出している姿は何ともいえない光景である。

昨年度は教科の教員や他教科の教員、また担任などがよく見に来てくれた。今年も発表の時間に授業だったり、会議だったりが多く、残念だった。他の先生からのコメントや励ましの言葉も生徒達には必要だと思う。

都倫研や全倫研で、多くの先生方がグループ研究、発表のことを発表されたが、私にとってはすべてが参考になる。私のやっているのは未だ発展途上であり暗中模索である。教科書をそのままやっていると一週間苦痛になる時もあるかもしれないが、生徒の発表があると、授業が楽しくなる。グループ研究の発表はオーケストラと何か似たようなものがあるような気がする。グループの生徒が演奏者であり、ひとりひとりが奏でない限り、何も生まれてこない。一時の演奏までに、各人が努力してやらない限り、良い音楽同様、良い発表も生まれてこない。充実した時間、充実した授業を生徒達はいつも待っている。2年間、現代社会を担当し、奥深いものであると感じている私である。

## 〔第3分科会…文献・資料による指導内容の研究〕

### 研究経過報告

都立秋川高校 水谷 禎 憲

今年度6回のレポートは次のとおりです。

#### テキスト

#### 報告者

- |                          |           |
|--------------------------|-----------|
| ①『原子力の経済学』室田武・日本評論社      | 新井 明(東村山) |
| ②『モラトリアム人間の時代』小此木啓吾・中公文庫 | 小林豊美(大崎)  |
| ③『きみたちと現代』宮田光雄・岩波ジュニア新書  | 河野速男(明正)  |
| ④『翻訳語成立事情』柳父章・岩波新書       | 富塚 昇(荒川工) |
| ⑤『葉隠』山本常朝・岩波文庫他          | 尾崎充昭(深川)  |
| ⑥『働くことの意味』清水正徳・岩波新書      | 菅野広由(京橋定) |

(テキストを会までに全員が読んで来ることを前提としました。)

①新井先生より「現代社会」どころか、未来社会の子子孫孫にわたり深刻な問題である原子力発電に関する問題提起をいただいた。著者室田氏は、エネルギーコストの問題から論点を整理していきこうとする。原子力は果して石油の代替になるのか。結論はならないという事なのだが、それよりも核廃物(死の灰)の保管・投棄の問題は深刻である。現代の社会のツケを遠い未来へと託す事が果して許される事であろうか。高度成長期以前の過去へ戻れというのは無理があるが「スモッグの下の子ピテキより宵空の下の子梅干の方がいい」という言葉には何かしら説得力がある。単にロマンと言って片づけられない何かがある様にも思う。それをとらえる視点としてエコロジカルな世界観の提唱(植田敦)を示された。地球は閉じられた系ではなく、太陽光を通しての生命系、水循環は開放定常系としての地球像を示す。人類に未来がないわけではなく、人類の新しい価値・技術・制度の選択問題から方向が示されていくこととなろう。そこで先の室田氏の水土論の提唱が存在意義を持つ。

②モラトリアム人間という言葉は、所謂青年期の延長という極めて今日的な状況とともに登場し、一般化した。小此木氏の所論に加え、この問題は30歳前後の我々教師の問題でもあろうし、さらには、我々が日々接している高校生の問題と

も密接にかかわる。そのモラトリアム心理から来るのであろう。だらしなさ、いかげんさ、などと言うと語弊あるかもしれないが、まさに進路指導や生活指導等でのそれは深刻である。などと教師が騒いでいても、結局彼らも30、40となりいつしか一人前の仕事と家庭を持つ様になっていくのではなからうか。現に我々の周囲を見廻したところでも、各々それなりにやっているのが現実のようだ。でもなおしかし、今の生徒達またさらにもっと後の生徒達に、同じ事を果して期待できるだろうかという危惧の念を抱かざるを得ないのではなからうか。

③河野先生は『きみたちと現代』の内容を細分化され、項目ごとに、一つ一つ「現代社会」の教科書との対応を示された。現代社会のかかえる様々な問題を例えば平和論・民主主義・シュバイツァー等を通して、示している。本書は、そうした内容からも高校生への図書としてすぐれていよう。特にフランクルの『夜と霧』を通して語られる体験は、生徒達の生き方に何かしらのゆさぶりを与えるインパクトとなりうるであろう。ただ、それに関わる歴史的な想像力をどれだけ現在の生徒達は持っているだろうか、また、そこからどれだけのを汲みとって来るだろうか、そんな事が問題とされていった<sup>o</sup>フランクルからの引用の言葉「人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題ではない。むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。」が印象づけられた。

④翻訳語の問題は、日本の文化の問題として、さらに社会科教育の問題としても重要であろう。即ち翻訳語とは一般的には学術用語化する。そんな時、実は日常語からの乖離が生じている。日本語を介して教育が為される以上この一種の断絶に一つ問題があるだろうし、また日本文化の特質もそこにある。こうした富塚先生の問題意識から出発し、「社会」「権力」「個人」といった様な翻訳語の柳父氏の論点を整理いただいた。柳父氏の主張として、翻訳語にまつわる「カセット効果」即ち、中味は何かわからなくても何か人を惹きつけ、深遠な感じをもたらす宝石箱効果が注目させられた。もっとも、「カセット効果」なる翻訳語(?)もカセット効果を持つが如くではあるが。いわば、本来持っていない不思議なニュアンスを翻訳語が持ってしまうという事である。

さて、日本文化は、明治以後この様な一種の翻訳文化の様相を示してきた。さらにふりかえると、やまとことばと、漢語においても同様の問題があるのではないかと思われてくる。それらを考えていくと、日本の文化とは、中国そしてヨー

ロッパと、異文化を言葉の世界の中で抱き込んでいってしまうものを持っていることに気づかされる。ただ、漢語も同様にその為に日常語の世界と学術語の世界とが場合によっては抵触してしまふ事態が生じてしまうのである。教育上一つの困難な問題がここにある。

- ⑤ 学生時代わざわざ佐賀へまで赴いたという尾崎先生のレポートをいただいた。「葉隠」と畚名だけは三島由紀夫以来有名であったが今回内容に接し、その武士（鍋島家）の生きざまには驚かされた。「武士道とは死ぬ事と見付けたり」と有名な言葉があるが、君臣の間も恋の心とみても、武士道は死狂ひなりという壮絶な内容を持つものである。ただ、これは山本常朝即ち鍋島家における特殊なる部分<sup>WV</sup>を含んでいるのかもしれない。武士が戦国から幕藩体制へと移行する中で、江戸、上方風化していく点に関する常朝の後世への警鐘の念がこめられていたようだ。つまり、鍋島は鍋島でいくのだという一老骨のつぶやきであったか。思想的には朱子学や禅からの影響も濃く、また日本文化における集団論の一形態もそこに読みとれまた当時の武士の暮しむきがどの様であったかも窺い知る事ができる。
- ⑥ 著者の清水氏は、労働観の様々な立場からの系譜を示し、今日的な労働における疎外の問題を超えていこうとする。管野先生ご自身民間会社を経験され、かつ現在定時制で仕事を<sup>o</sup>持つ主徒達と密接であり、そうした体験談も含めて報告いただいた。

自然を対象化していかなかった東洋は別として、西洋の古代ギリシアから今日に到るまでの労働観の系譜が辿られる。著者が最も力を入れていた箇所は、ヘーゲル、マルクスを通して語られる所謂であり、『経・哲草稿』等で明らかにされた疎外の問題である。著者は、それを踏まえ、今日的な労働観として、ポードリヤール、K. ボランニ、I. イリイチ等の所論と労働自主管理の方向をあげ、それらの中から疎外克服の積極面をとらえようとする。労働運動が進展し、マルクスが分析した当時からは変貌を遂げた様に思われる今日の資本主義ではあるが、所謂、労働力が商品であるという労働観は変化していない様だ。疎外の問題も形をかえ、かってシモーヌ・ヴェイユが指摘したような、労働の現場におけるその全体像が見えない点や、自分が何を造っているのか不明瞭である事が強調される。また、常識的には労働とは自然に対する働きかけと解されようが、この自然が単に原始自然ではなく二次的自然であるにしても、第三次産業にみられる高度に抽

象次元の労働においては、そうしたイメージは欠落する。働くことは、各人の社会生活上不可欠なものであり、人間が生きるという事である。教師が働くという事は、それは教師が人間として生きることであり、教師という一つの人格として生徒と触れ合う事であり、時にはせめぎあいを起すことだってあろう。だが、所謂、「おしごと」に墮してはならぬのであって、人間は人間との人格的接触を通して育つものだ。昨今深刻化する家庭問題は、生活を通して親と子供が互いの立場において触れ合わない事からも起因してこよう。また同様に、学業を通して教師と生徒が人格的接触を持ち得なければ、学校教育は成立しない。そうした意味でも、教師の現場にとって我々の自主管理は切実であろう。また、定時制の生徒は、一般的にいて仕事をもちその中の人間関係を生きる事によって、安定した学校生活を生きる事ができる。全日制においてはその逆であり、一般にアルバイト等はその生徒を学校生活から脱落させてしまう傾向をもつ。

こうした指摘は非常に興味ある点である。働くということが、生きることであるかどうかそこで問われているのだろう。本来「働くということは、生きるということであり、生きるとは、結局、人間とは何かを考え続けることに他ならない」(黒井千次『働くということ』)のであるから。

※ ※ ※

日程・場所・参加者(敬称略)は次のとおりです。

- ① 6月10日(金) 於教育会館 (4名)(レポートはなし)  
秋元(学大附)・尾崎(深川)・葦名(豊島)・三宅(砧工)
- ② 7月7日(木) 於教育会館 (11名)(テキスト①②を実施)  
秋元(学大附)・尾崎(深川)・河野(明正)・新井(東村山)  
葦名(豊島)・飯岡(京橋)・三宅(砧工)・小林(大崎)・渋谷(墨田川)  
富塚(荒川工)・水谷(秋川)
- ③ 9月8日(木) 於教育会館(7名)  
河野(明正)・尾崎(深川)・新井(東村山)・三宅(砧工)・小林(大崎)  
富塚(荒川工)・水谷(秋川)
- ④ 10月20日(木) 於豊島高校 (11名)  
河野(明正)・尾崎(深川)・新井(東村山)・溝口(東村山)・葦名(豊島)  
富塚(荒川工)・小林(大崎)・渋谷(墨田川)・菅野(京橋定)・

三宅(砧工)・水谷(秋川)

⑤ 12月8日(木) 於四谷商高校 (13名)

河野(明正)・尾崎(深川)・新井(東村山)・葦名(豊島)・富塚(荒川工)  
渋谷(墨田川)・管野(京橋定)・秋元(学大附)・蛭田(白鷗)  
工藤(三鷹)・増淵(片倉)・小島(東)・水谷(秋川)

⑥ 2月16日(木) 於豊島高校 (11名)

河野(明正)・新井(東村山)・葦名(豊島)・富塚(荒川工)  
渋谷(墨田川)・管野(京橋定)・小林(大崎)・飯岡(京橋)・三宅(砧工)  
工藤(三鷹)・水谷(秋川)

WV

## 「倫理」教科研究 其角の仏陀観について

都立葛飾商業高校 浅香育弘

### はじめに

十余年前、「元禄俳人宝井其角」(桜楓社)を出版した著者、今泉準一氏(現在、明治大学教授)は、5・6年に「五元集の研究」(桜楓社)を出版した。昭和25年から14年間、氏と同じ高校に勤務した私は、その頃から其角研究に打込んでおられた氏に(俳句について、全くの門外漢の私だったが)時折「其角」について話を聞く機会をえた。そして世間一般の風潮として、芭蕉を高く評価するあまり、兎角軽くみられむしろ無視されがちな其角に対し、全く新しい視点から其角を見直し、一つ一つの句に対しユニークな評価を与えてきた氏に深く敬意を表せざるをえなかった。

前に、全倫研大会を脊森八戸市で開催した際、「郷土の思想家」をテーマにとりあげたことがあった。東京に生まれ育った私はその時ふと東京だったら其角と漱石かなと思ひ浮べたことを全倫研会報のアゴラに書き残した。そして「元禄俳人宝井其角」について、私の小篇・随筆集「あさあけ」に読書案内のかたちで載せたことがある。今回は氏の「五元集の研究」(1155頁)から「其角の仏陀観」がみられる句を一部紹介したい。私の舌足らずの紹介がきっかけとなり、其角を

見直す人が一人でも多く出ることを期待したい。

## 1. 宝井其角について

其角（1661～1707. 47才没）、江戸の生まれ。父は東順といい、医を以て某候に仕えたが、のち辞して隠者となったと伝えられる。この父のすすめで、16才の頃から鎌倉円覚寺の大願和尚に詩や易を学んだ。またこの前後に芭蕉門に入った。

芭蕉も其角も禅和尚を師としたが、芭蕉の師仏頂は徹底した修禅鍛練の結果、強固な意志人となったのに対し、其角の師大願は修禅に励んだが、あるときをきっかけとして平凡人にもどり、詩文に興ずる人となった。（「みなし栗」に幻呼の名で四句入集）つまり禅に入って禅を抜けた人といえる。其角は天性の詩人だが、大願和尚に師事して大きな影響をうけたといえる。

其角は蕉門十哲の一人として知られるが、実は十哲の中でも群を抜いた第一人者だった。既に天和3年（1683年）、其角23才のとき俳諧撰集「虚栗」（みなしぐり）を編集し、蕉門の新風開発のきっかけをつくっている。（このみなし栗は、芭蕉がその跋で言っているような人の拾わぬ虫くい栗ではない。柿の本家（有心家）の伝統をうけついで芭蕉に対し、栗の本家（無心家）の伝統をうけついでものであり、無心の座の栗にかこつけながら、既に一箇無心の境に遊ぶ識見を蔵していたのである。）

芭蕉の死に際しても、彼は葬儀の諸事一切をとり行ない、去来その他の弟子たちが、異を唱えることなく従っているところをみても、其角が一門から一目置かれていたことがわかる。

其角は、性豪放磊落、性来酒を好み、風雅（雪月花）を愛し、内典外典に通じ、大名、上級武士・富裕町人から乞食に至るまで、あらゆる階層の人と巾広く文（俳諧）を以て交際した。師を異にする俳人仲間との交流もさかんで、多くの句集・連句集を出した。五元集は、延宝・天和・貞享・元禄・宝永の五元号にわたる其角の句を、自ら撰び集めたもので序文まで書き残したが、生前には完成せず、没後40年、其角の流れをうけついで俳人の百万坊旨原によって出版されたものである。

江戸時代を通じ、其角を評価する者は少なくなく、彼の句は多くの人に親しまれた。しかし明治以後、芸術詩作家としての芭蕉が高く評価される反面、民族詩

作家としての其角はあまり評価されなくなった。むしろ期間俳人、奇をてらう江戸座の総師というレッテルをはられ軽視されてきた嫌いがある。しかし今泉氏は、著書の中で次のようにのべている。

「其角の作品に接して、感情移入をして解釈をしようとする、いわゆる肩すかしを食ってしまう。というのは、其角の句は景の印象が即興に歌われただけで、そこには作者の個人感情は出ていないからである。従ってこの意味での其角個人の姿を、句から掬えようとしてもこれはできない相談で、せいぜいこれに自己投影して勝手に映像を作り上げるに終るだけになってしまう。とくに注意しなければならないことは、安易に低俗な人物を仮想して、其角をそのような作家と決ゆこんで解釈することである」  
(「五元集の研究」P. 53)

と。そして其角俳諧の本質というか特色として、その則興性・民族詩的性格(古代歌謡・民謡・童謡に通じるリズムカルな響きや無固執性・平常心など)、涌き出づる知・明るさ(人間の原初の詩にみられるのびやかさ・あたたかさなど)軽さ(芸術詩作家にみられる俳句の執着・意志力が全然ないこと)などを指摘している。更に次のように言っている。

「従来、其角の仏教関係の句については全くといっていい程に問題にされず、たまたま問題にされても甚だ要領をえない解釈で終わっているものが多かった。しかし其角の本領はむしろこの種の句において発揮せられ、これを不問に付しては、その最も興味深い部分を見逃がしてしまうことになってしまう……」と。(同上 P. 148より)

そこで、以下同書より「其角の仏陀観」のうかがえる句を一、二拾いあげてみたい。

## 2 其角の仏陀観

折に殺生偷盗あり

あだ也と花に五戒の桜かな

美しい桜の花に接しては「五戒」もあだ(無意味・むだ)になると、花を見る欲びをうたったもの。五元集にのっているほか、すでに元禄7年(其角34才のとき)に刊行された「其便」にも載っており、そこには「折に殺生偷盗見るに邪淫飲酒は本より申さずとも」の後書がある。

「折に殺生偷盗」とは、美しい桜の花を見ては思わず枝を折って花を取りたくな

るの意。「見るに邪姪飲酒」とは、花の色香に魅せられて陶酔し、花の下で一杯飲みたくなるの意。「本より申さずとも」とは、これらのことは人間の自然に生ずる情といえようから、「妄語戒」はあげていないが、人間として美しい花にふれ、思わず句ができてしまうのを妄語戒として戒め、否定しようとしてもそれはできない相談である。従って美しい花(景)に接して、即興の一句が成ることに對して、それは戒律に反するからいけないといわれても、わたしには無意味だとのべたものであろう。

儒教や仏教では、詩歌を狂言綺語とし、修行のさまたげになるとする伝統があった。しかし其角は俳人(詩人)として、美しいものにふれ思わず一句がなる「歌う心」は、「煩惱」の一つであるとしながら、同時に表現すること(詩歌・俳諧)に「即心即仏」を認め、そこに人間本来のあらわれ、仏心を認めて、これを肯定したのである。

其角は生来魚が好き、酒が好き、吉原通いが好き(武士・町人と肩肘張らずつき合い社交の場とし、また途中の景を楽しみつつ茶屋女の入れる安酒を飲んで帰るのを楽しみとした)、句作りが好きで、到底五戒など守れそうになかったし、戒律主義にしばられることなど考えようとしなかった。天衣無縫というか、酒脱というか、なにものにも執らわれない自由の心境がそこにうかがわれる。そして美しいものにふれて陶酔・歓喜し、歌いあげること、そこに人間の本然の姿を見、仏というのもまたこれをいうのだと、仏陀觀をのべているとみることができる。

仏もし大晦日に入滅し給はば、いかに仏とも  
とんちやくすべきか。かかる衆生のためには往  
生もふのものなるべし

仏とはさくらの花に月夜哉

仏とはなにかと問い、仏とは「桜の花に月夜だ」と禪問答的に、多少滑稽味を添えて答えた句である。「五元集」では分けて載せているが、「其便」では、さきにあげた「化也と花に五戒のさくら哉」と二句並べて載せている。

前者は「其便」「五元集」とも、大体同じような文章で、文意は、仏がもし大晦日に入滅されたのなら、その忙がしさにまぎれて、いかに仏と言っても、人々は頓着(気にかけること)しないであろう。2月15日(旧曆)という好時節だ

からこそ、人も涅槃会ということではいろいろの行事もするわけで、このような（せわしない）衆生にとっては、往生もふのもの（運次第）だ、といったような意。別の云い方では、世間では、仏といって尊いものにするが、その心になってみれば「桜の下での月夜」といった好風景のもつ魅惑を言っているのであろう。と言った意となる。

次いで「桜の花に月夜」という「景」への陶酔・歓喜に衆生にとっての「仏」はいるとした。つまり、「桜の花のもつ魅惑」、これに加えて「月夜の魅惑」と、人を陶酔に感きこむ現象に対して、ここに「仏」がいると詠んだ句であることが知られている。

そして今泉氏は、「衆生」という語について、「これは詩人と対立する詩人以外の人を述べているのではなく、詩人をも含めて、人間の一切を含め、人間の感受の側面を「衆生」の語を借りて、述べているものである」と、説明している。更に先きにあげた「化也と花に五戒の桜哉」の句が、人間現象に見る表現の側面（詩創造）に対し徹底した肯定を示したものであるのに対し、「仏とはさくらの花に月夜かな」の句は、これと表裏をなす感受の側面を徹底して肯定したものであると述べている。（150頁）<sup>W</sup>

前にもふれたように、其角は人間の表現の側面に「仏心」を認め、詩人の心の根元にある「歌う心」の発露に「仏」を見たが、「桜の花に月夜」に「仏」を認めたのは、感受の側面における生充実に仏を見たのである。月・花を美しいと見ること、人間は意志のはたらきや努力を要しない。そこには自我が主体となった人間行動はみられず、無我性の特色がみられる。ここに其角が「仏」を認めた理由がある。

「歓喜」「陶酔」は人間をして無我の境地に立たしめる。「仏とは」の句は、このように人間をして無我の境地に立たしめる「造化」のもつ力を歌った句である。其角は、ここに人間の生充実を見、また至福の境地をみたのであった。同時にここに其角の生充実があり、また至福の自覚があったことを示す。（以上153頁より）と。

いずれにせよ、「其便」の二句並列から考えると、「化也と」の句は、戒律を批判して、しかも花の魅惑、そしてそれによる人間の陶酔現象を肯定して詠み、それに対して「仏とは」の句は、単なる汎神論的仏陀観ではなく、人間の自然現

象との融和における没我的陶酔に仏陀の心を見ていることがわかる。(同上 341 頁より)。

### 結びにかえて

以上、「其角の仏陀観」を示す句を 2 句のみ一例としてあげたが、其角の仏陀観のみられる句は、他にも見られる。例えば以下がそうである。

行く水や何にとどまる海苔の味	(花摘, 元禄 3 年刊他)	296 頁
新月やいつをむかしの男山	(いつを昔, " )	661 頁
たが為に朝起昼寝夕すずみ	(続虚栗, 貞享 4 年刊)	618 頁
雁窟のいゆる時得し御法かな	(其袋, 元禄 3 年刊)	457 頁
鳥雲にゑさし独りの行律かな	( " " )	458 頁
鳥行く蚊はいづくより暮の声	(いつを昔, " )	600 頁
いなづまや思ふもいふも紛るるも	( " " )	738 頁
白雲に声の遠さよ数は雁	(其便, 元禄 7 年成)	793 頁
衣なる錢ともいさや玉まつり	(末若葉, 元禄 10 年)	732 頁
我雪とおもへば軽し笠のうへ	(雑談集, 元禄 4 年)	960 頁
立馬の日は猿の華心	(年代不明)	461 頁

いずれも人間の現実(煩惱)を直視した上で、執らわれず明るく詠んでいるところに、其角の自由な澄んだ心境がうかがえる。

## 性別役割分業について考える

都立京橋高校 飯岡祐保

本年は、倫社学習最後の年であり、3年生に、育年期、出産（産む自由、産まない自由—母性保護）、結婚（各国の結婚と結婚の自由、結婚しない自由）、性別役割分業、雇用平等法、保育と、「ひとの一生と社会」を主題とした授業をした。例年だと、本を読んだり調べたり、発表したりという学習をとり入れるのだけれども、今年は、話しあったり、意見を発表したり、文をまとめたりと、負担のかからない方法をとることにし、教科書は、ところどころつながりのある個所に触れるにとどめた。その中の二学期の学習を報告したい。

結婚の学習では、プリントに「とくと我を見たまへ」山口玲子著の中の若松賤子の結婚の詩を学習した。それに対する生徒たちの意見交換の後、まとめた文を二例、紹介したい。

A「第一段落にあるように自分の悪い所を見て欲しいという気持ちは分かるような気がする。人間は長所も短所も持っているからだ。長所だけに目を向けられていると短所を見つけた時に、すごく絶望すると思うからである。私は相手の人に自分のありのままの姿を見て欲しいと思う。そして私も相手のありのままの姿を見つめてゆきたい。そしてその姿をお互いに認め合えた時に結婚をしたいと思う。自分の結婚に対する夢も大切にしたいけれど、現実との戦いも忘れたくない。そしてお互いの夢を大切にできるような生活ができればいいと思う」

B「結婚というのをここまで考え述べることができることは、とっても尊敬すべきことだと思う。一つまちがえば、わがままで自己中心的に思えるが、私はそうは思わない。結婚は相手がいるのだから、必ずどこかでうまくいかない時がある。その人たちは、その破局にきてから、こうすれば、ああすればというのだが、若松賤子のように初めから相手に自分の結婚についての要望を理解してもらえば、破局がきてでも解決しやすいし、離婚となっても、お互いすっきりと別れられるだろう。まねのできる事ではないだろうが、少しでも、私はこのような結婚というものをしてみたい」

他に、「泣いて姉妹に告ぐ」山口玲子著—清水豊子（古在由重の母で紫翠の号をもつ）の結婚の場合をプリントし、明治憲法下でも、両性の合意による結婚を

した例や、「原始、女性は太陽であった」平塚らいてう著の奥村博史との結婚への質問状のプリントで、結婚への姿勢や法律婚と事実婚のちがいを、「ルイズ」松下竜一著で、伊藤野枝の手紙のプリントを使い、身も心も自分のもの、結婚も自分で納得のできるものという例等を学んだ。

その結果、生徒たちは「自分の意志をつらぬいた両性の合意による結婚をきめた現憲法はすばらしい」と納得したのだが、さて、その現実にあたる性別役割分業のところになると、だいたいあやしくなってきた。大半の生徒が、「男は仕事、女は家事・育児である結婚」を肯定しているらしい。

まず「男は仕事」をさておいても、「女は家事育児」は、タダで24時間勤務で、日曜、祭日なしということに、何の疑問も感じていないのは問題ではないかと、気づいた。そこで「シャドウ・ワーク」イヴァン・イリイチ著を使い、産業社会が、剰余価値を上げるために、女の家への囲いこみを行ない、家事育児をシャドウ・ワークとして女に負わせたことを説明し日本経済新聞82年9月30日夕刊の「伸びる家事代行産業」の記事を使って、世界六都市の共かせぎ状況を見、夫の家事分担率が東京25%と、世界最低であることを考えさせた。その上で、性別役割分業の落とし穴である夫の収入が断たれたときの妻のあり方をグループ別で討議させ、出された意見をもとに、自分の考えを文にまとめさせた。そのプリント例を次に紹介したい。

プリント①夫の収入が断たれた時、性別役割分業（家事育児専念、無収入）の妻はどうしたらよいか、

上記の問題についてあるクラスを班別討議（女子2名、男子2名で1班をつくる）をした結果、次のような意見の報告がなされました。

a. 妻は働く（しかし女の平均賃金は男の約 $\frac{1}{2}$ なので）足りない分は今までの貯金でまかなう。

b. もしそのとき子供が大きければ、アルバイトをしてもらい、自分の収入とあわせる 一家族ぐるみ働く—

c. 子どもが小さければ、託児所にあづけて働く、少しでも条件のいい所を求めて、フルタイムで働く。

d. 子どもが小さければ、祖父母にあづけて働く、足りない分は、きょうだい等が援助をする。

- e. 働くが安いから、アルバイトもする。
  - f. 働くが不足分は社会保障をうける。
  - g. 働いて不足分は節約したり、アルバイトをする。
  - h. 社会保障+きょうだいの援助+自分の働き
  - i. 生活できる範囲内に女の賃金水準をあげ、フルタイムで働く。
- a～iまでの解決策のうちで、あなたは、どれをとりたいか(まぜてよい)そしてその理由はどうか、くわしく右に書く。

K男「夫が死ぬとか、なにかあって家に収入をもつてこれなくなってしまったら、やはり妻は、収入を得るために、働かなければならないと思う。しかし、現存の日本の職場の状況では、やはり女性は、給料も安いなどの差別をうけているので、それをまずなんとかしなければならぬと思う。職場の女性もしくは男性の組合員などにたのんで、ストをうつとか、同じに働いているのに、こちらだけ給料が少ないのはおかしい等と、しかるべき所(たとへば裁判所)にうったえろとかなんらかの手段をもちいて、この差別をこわさなければ、いつまでたっても、日本では女性が安心して働ける職場は生まれぬと思う。また、その際やはり男性と同等に働いていなければならぬと思うので、もし子供がいるとすれば、親せきがいればそこに、いなければ、託児所にあずけるなどして、フルタイム働かなければ、男女同権はかちとれぬと思う。その間の生活費としては、やはり、足らなくなってしまうだろうから、たらない分は、社会保障を受けるのが当然の権利であると思う。」

I女「夫が収入を断たれても、妻や子どもには、社会保障の道がある。しかし、それは自分で努力しても、一定水準の生活ができない場合に受けるのであり、まず自分で生活できる道をさがすべきであると思う — 中略 — やはり女性がフルタイム働けば、家族が生活してゆけるような男性と同じだけの賃金が得られるような社会になることが、一番望ましいと思う。しかし、賃金は簡単にあがるものでなく、そのような社会実現のために運動をしなければだめだと思う。」

M女「戦って、女の賃金水準向上を獲得できて男性並みのお金がもらえるようになれば、すばらしいと思う。しかし、先日、授業で習ったところによると経済のしくみがそうになっていないのでむずかしいことだろう。そして、無収入の家事労働もやらなければならぬ。家事労働をすれば、お金をもらえればこんなにこ

んなにこまらないのにもと思う。私は人間として人間らしく生きるために社会保障は必ず必要だと思う。女性の賃金が低いから、しかも母子家庭だから当然の権利であると思う。なんだか、毒いてるうちに思ったんだが、女の人が身を粉にして働いても、その働いた分だけのお金はいってくるわけではない今の社会がまちがっているのではないだろうか。— 中略 — 一番の望みは、こういった矛盾が解決されるような社会に住むことだから、こういった現実について真剣に考えることが、まずは第一歩だと思う」

この学習の後、'83 12 7 付朝日新聞夕刊のコラム「男と女の風景」をもとに、テストをした。記事の内容は、女が入院して、入院はありがたいという詩に対して、虚をつかれた筆者が、高齢化社会では、親、夫、自分と三度の老いをみとる。性別役割分業では、高齢化社会の大波をのりきってはゆけまい、風景の男女差の歩み寄りはいつみられるかといっているものである。

なぜ入院がありがたいのかとの問いには

「結婚したら家事、育児を一切するということ」と答えられ

女は三度老いをみとるのは社会のどんな経済のしくみからきているのかとの問いには

「資本家と労働者との関係に出てくる剰余価値のしわよせの補いのためからきている」との答がえられ、

高齢化社会の大波をのりきるのはどのようにしたら可能かとの問いには

「女の場合は家庭におさまるだけでなく、仕事をもち財産をかせいでおく。経済的に自立しなければならない。男の場合は、自分の身のまわりのこと（食事、洗濯、さいほう）をできるようにする。日常のくらしで自立しなければならない」と答が出た。

さらに今までの学習をもとに男女差のあゆみよりはいつかとの問いには

「男が女を個人とみとめ、女も自分が個人であると信念をもったとき」という答があった。イリイチには、カトリック僧のためか、個人の視点はないので、これは今までの学習から、生徒の引き出した解答である。これらは、さまざまな解答例の中の一つにすぎないが、ともかく性別役割分業に何の疑問ももたないことから一歩でもぬけさせたこと等、それを自分の将来とつなげられたこと、社会のしくみからきていることを理解はさせられたと思う。

しかし、このことも三学期に「保育」をとり入れると、また常識の線に逆もどりしているのを発見し、また、あたらしく、つみ直さねばならないと思った。

「女は家事育児」の社会通念をゆすぶりながら性別役割分業の廃止を骨子とする性差別撤廃条約の実現と社会への定着化をめざしたい。

## 「現代社会」—夏休みの課題から—

ww

都立北野高校 志村忠彦

### 1. 課題を取り上げるにあたって

「現代社会」は、低学年においてすべての生徒に共通に履習させ、中・高学年の撰択の基礎となるように位置づけられている。「日本史」、「世界史」、「地理」、「倫理」及び「政治・経済」の学習へ発展できるような学習内容をもつべきことが要求される教科であることが「教育課程編成要領」の中に示されている。そのあらわれが教科書である。しかし実際には、その内容の多くが「政治・経済」や「倫理」の内容に傾むいている。「政治・経済」や「倫理」を専門とする者が担当しなければならないような状況の中から生まれてきたものであるから仕方のないものかも知れぬ。それゆえに、「日本史」、「世界史」、「地理」への発展が欠如しがちであるように思われる。

「現代社会」という教科を取り扱うのは、私にとって本年度が初めてであり、多くの学校でのカリキュラムがそうであったように、本校でも「倫理・社会」は二年次におかれていたことから、一年生と授業のながれで接するのも初めての経験である。授業の中で、同じような事柄について取り扱うにせよ、二・三年生とのあいだには知的レベル、好奇心などが異っているにちがいない。それゆえに、一年生の知的レベル、好奇心などを知ることは、授業をすすめてゆくうえで、重要な意味をもつものと考えられる。そのちがいを知ることが出発点となることと考えられる。

以上の二点、すなわち、「現代社会」という教科が社会科の他の科目とのかかわりのなかでもつ意味、私にとってはじめての「現代社会」という点から、「夏

休みの課題」を考えてみた。

## 2 何を取り上げたか

その具体的なところみとして、「文化」の問題を取り上げることとした。「現代社会と人間の生き方」のなかで「人間生活における文化」の項目があげられ、三つの小項目、すなわち、「世界の諸地域の文化交流」、「日本の生活文化と伝統」及び「現代の文化」が示され、その取り扱いが述べられている。「文化」は人間のつくりだしたものの総体であるといわれるようにその範囲は広い。そういう点では、生徒の知的関心、生徒の現在までの生き方などを知るうえには都合のよいところである。

本校では社会科担当のうち四人が「現代社会」を担当しているが、私の担当する2クラスでは、そこで、「文化」についてのレポートを夏休みの課題とすることとした。枚数は原稿用紙10枚以上である。10枚という枚数は生徒たちにとっては、かなりの負担となる枚数である。

文章を書くということは、生徒にとって自らのもっているものをすべて自己の外部に出すということに近い。漢字の使用頻度、その文体、その内容、表現力等によって、生徒たちの関心、知的レベルなどを知ることができる。そして、それが授業のレベル、あり方を考える参考となるはずである。しかし、「文化」の問題は過去の羅列に終わりがちである。過去の事象のうちに、現代とのかかわりを見出すことが、今までの我々の学習のやり方であった。現代を見、その中に過去の事象を見出すやり方はなかなかむずかしいものである。過去から現代へ、流れとして、過去の事象は教えられているし、我々もそのように習って来た。現代を取り上げると、過去の事象は単に過去の事象にすぎなくなってしまうがちである。現代を取り上げながら、過去の事柄にいきいきとした新鮮な何かを与えることができるかどうかということは、「現代社会」のひとつの仕事であろう。

## 3 「文化」を取り上げるにあたって

「文化」—その範囲は広い。本来はアドバイスなどしない方が、生徒がどんな事柄について関心をもっているかを知ることができるのだが、場合によっては何を取り上げてよいかかわからないという生徒が出てくるかも知れぬ。そこで多少のアドバイスをすることにした。

◎1学期は「文化」の問題を中心に考えた。夏休みには「日本の文化」について、さらに調べてみよう。

- 「職人」について調べてみよう。
- 年中行事や祭りを取りあげてもよい。
- 日本で生まれたスポーツについて調べてみよう。
- 日本の「衣・食・住」について調べてみよう。
- 日本の伝統的なもの — 能, 茶道, 華道, 和歌など — を取りあげてもよい。
- 文化の受容や変遷についてのべてもよい。
- 日本と外国のちがいでついて知るところもいろいろ。
- 風土と文化の問題を取りあげてもよい。
- …………… など

どのような角度からでも取りあげてよい。特に参考書はあげない。書店には、この関係の本がたくさんある。各人が書店に行って、自分の興味のある分野を選ぶとよい。

## 報 告

- (ア) 必ず、原稿用紙に書くこと。10枚以上  
B4版の用紙 20×20字(400字)縦書
- (イ) 写真・絵・図表(グラフ)等は、用紙の同大の台紙にはること。
- (ウ) この用紙より大きい地図等を入れるときも、この大きさにたんで、規格をそろえること。
- (エ) 以上の(ア)~(ウ)を一括し、表紙をつけてとじること。

提出日は、9月5日(月)2学期の最初の授業とする。

## 4. 「文化」を取り上げてみて

上の文章が、生徒に示した課題についてのプリントである。

さて、これに対して生徒がどのようなテーマを選んだかを、生徒自らがつけたテーマそのままに、次にあげてみることにする。

- |           |           |            |
|-----------|-----------|------------|
| ①年中行事について | ②相撲の歴史    | ③日本の衣食住    |
| ④日本語について  | ⑤神と祭りと日本人 | ⑥ガラスについて   |
| ⑦日本の民俗行事  | ⑧北海道の先史文化 | ⑨祭りと年中行事   |
| ⑩たべものと日本人 | ⑩日本の髪     | ⑫日本人と社会と批判 |

- |              |                  |               |
|--------------|------------------|---------------|
| ⑬日本語について     | ⑭日本の民具           | ⑮アメリカの風俗習慣    |
| ⑯日本の地理と文化    | ⑰日本芸道・遊戯について     | ⑱西欧化とディレンマ    |
| ⑲日本の祭りについて   | ⑳奈良の年中行事         | ㉑文化と風土        |
| ㉒日本の文学       | ㉓江戸と伝統技と心        | ㉔能について        |
| ㉕漢字と漢文の文化    | ㉖冠婚葬祭            | ㉗スポーツの受容      |
| ㉘花火について      | ㉙食べものと文化         | ㉚稲作の発達        |
| ㉛アフリカと日本     | ㉜華道について          | ㉝剣道について       |
| ㉞日本の自然と文化    | ㉟日本の正月           | ㊱日本の食物史       |
| ㊲茶道について      | ㊳日本の文化           | ㊴外来文化の歴史      |
| ㊵茶の湯の文化      | ㊶家               | ㊷今も生きている宗教行事  |
| ㊸年中行事の発展     | ㊹浮世絵             | ㊺日本と外国の宗教との違い |
| ㊻今も生きている宗教行事 | ㊼文化というものに対する僕の気持 | など            |

以上のようにその内容は多方面にわたっている。これは予想どおりであった。なかでも、年中行事や祭りについて述べたものが最も多かった。なかでも、両クラスをあわせて4分の1近くが、これに関連するレポートを提出していたのは多少のおどろきであった。内容についても、一年生らしからぬ作品があった。

「文化」の問題を取り上げてみて、やはり、現代の社会との関係を示すのはなかなか大変だと思う。過去の一つの記述として終わってしまう傾向が強い。すなわち、現代にアクセントをつけにくいということである。私にとっての、これからの大きな課題であるので、生徒がそうであるのは仕方のないことであろうか。また、いつの時代でも同じかも知れぬが、私は……と思うという自分での思考が欠けているように思われる。単に著作者の考え方の紹介に終わりがちである。この点を、再度注意したい。

## 5. 課題の発表等について

生徒の提出した課題は文化祭に一つのコーナーを設けて展示する試みが昨年以上りなされ、今年もそれにならった。そこでは、模造紙に生徒の選んだテーマが記され、誰でも自由にそれらの冊子を手にとって見るができるようになっていた。

授業のなかでの課題の取り扱いについては共通一次試験との関係もあって、発

表等をどのようにするかは、これからの課題となっている。

「倫理・社会」においては、発表形式の授業をしたこともあった。グループでの研究発表、個人での研究発表のいずれもところみた。それは時間を自由につかえた頃のことである。あるときは、一人の生徒が6時間位にわたって発表をし、まとめを促したこともあった。イエスについて発表したある生徒はそれがきっかけでクリスチャンとなり、それが縁で結婚もした。

また、論文形式のテスト問題を用意したこともあった。1問につき10～15行ほど書かせ、4問を出題し、60点としたこともあった。2単位教科ゆえ、答案の枚数も多く、大変な苦勞をした。するどい文章、きれいな文章等もなかにはあった。 VV

また、一人の生徒を指名し、共に考えようとしたこともあった。この方法だと、1年間のうち1～2度程度しか生徒にあてることしかできなかった。そこではわかりませんという答はない。この形式の授業も面白かった。

今、「現代社会」においては、選択科目への学習の発表ができるような取り扱い方をすることが指摘されている。さらにまた、共通一次試験というもうひとつの対応をしなければならない問題がある。そこにかつての「倫理社会」とは異った、この教科のむずかしさがある。

## 現代社会「世界の諸地域の文化と文化交流」 の類型化の方法について

都立水元高校 大野 精一

### 1. 問題の所在

「世界の諸地域の文化と文化交流」を学習するに際して、諸「文化」をどのように類型化(パターン化)していくかが、まず問題となる。教科書によるその取り扱いも、実に多様であり様々な視点から類型化されているが、具体的な次元においては、やはり地域によって大まかに文化を分類していく方向が多いようである。いろいろな工夫がこらされており、そして文化交流史も加味されているが、

基本的にはそのようである。

ところで、こうした分類法のベースが地理的要因（一地域をセットとして考察している）に重点を置くことはいうまでもないのだが、その地域での歴史的展開他地域との交流など、歴史的ダイナミックスをふまえたうえでの総合的な分類が目されているようである。それはそれとしてよいのであるが、しかしながらもう一つ底にあるところの分類法の骨子がどうも見えてこないようである。そこで教科書によっては、「地域」による分類以前の方法的視点としていくつかを提示している。多くの教科書に見られるのは「風土」である（もちろん、「風土」が地域的特性を含むものであることはいうまでもないのだが、しかしながらこの概念の中核は、和辻哲郎がいうように、歴史的規定性をもった人間の自己了解、といったところにあることに注意せねばならない）。その他、若干の方法的視点が見られるようである。実は、これらを把握・理解してこそ、各地域の文化の真の特性が浮び上がってくるように思うのだが、いかがであろうか。

本稿では、このような問題意識のもとに、周知の「風土」概念以外の二つのアプローチを紹介したい。その一つは、梅棹忠夫・文明の生態史観（1957年）であり、もう一つは、大塚久雄・世界史の横倒し論（1964年）である。前者に関しては数種類の教科書で取り上げられているが、後者に関しては、寡聞にしてその例を知らない。そこで、後者に関しては、若干理論的に紹介し御意見をうかがいたいと考えている。

## 2 梅棹忠夫の『文明の生態史観』（1967年刊）について

### (1) その基本的な発想

世界の諸地域の文化（文明とは、若干の意味のちがひがあるが、ここでは行論の展開上支障がないので、ほぼ同義語と見なしている）、とくに日本のそれを見ると、実に様々な文化要素からできあがっていることがわかる。固有のものもあるだろうし、異文化を吸収したものもある。したがって文化要素の「由来」なり「系譜」をあきらかにしたからといって、現に存するその文化の特徴は、縦体としてはつかみきれないのではなからうか。そこで、「由来」「系譜」の問題は棚あげして、とにかくその地域にある文化要素なり素材なりがどのようにくみあわさったり、あるいは、どのように働いているのか、という「文化の機能的な見方」が、氏の基本的発想である。「いっそうははっきりいえば、生活主体、すなわち文

化のにない手たる共同体の、生活様式」から文化をみていこうとする立場である。

### (ロ) 具体的展開

そこで上述の観点から世界を見渡すと、どういうことになるのであろうか。問題を旧世界（南北アメリカを除く）に限るとすれば、高度の文明生活、または近代文明の状態に国全体として達したのは、日本と、その反対側の端にある西ヨーロッパだけだと言ってもよい。そこでこの両地域を両端として旧世界を考えれば、かかる近代文明に達した第一地域と、その間にある、そうはならなかった第二地域と、2区分できるのではなかろうか。氏に即していえば、こうなる。「第一地域は、歴史の型からいえば、塞外野蛮の民としてスタートし、第二地域からの文明を導入し、のちに、封建制、絶対主義、ブルジョア革命をへて、現代は資本主義による高度の近代文明をもつ地域である。第二地域は、もともと古代文明はすべてこの地域に発生しながら、封建制を發展させることなく、その後巨大な専制帝国をつくり、その矛盾になやみ、おおくは第一地域諸国の植民地ないしは半植民地となり、最近にいたってようやく、数段階の革命をへながら、あたらしい近代化の道をたどろうとしている地域である」

では、何故そうなったのであろうか。生態学的構造からみると、第二地域には東北から西南にはしる大乾燥地帯があり、そこでは、「暴力と破壊の源泉」である遊牧民族が活躍したのである。おびただしい生産力の浪費は、文明の成熟にはむすびつかないのである。一方、中緯度温帯地帯である第一地域では、適度の雨量・高い土地生産力、そしてなかんづく、端であったことは遊牧民族の侵略からまぬがれた。かくして封建制を成長させその内部から革新の力を自成的に發展させていったのである（なお第2地域を次のごとく四つに分類している。中国世界、インド世界、ロシア世界、地中海・イスラム世界）。

### (ハ) 生態学的アプローチ

梅棹氏の根底にあるのは、生態学的な発想である。なかんづく、様々な植物がまじりあひながら全体としては一つの生活様式（生活形共同体）が形成され、しかも一定の条件のもとでは、それが一定の法則で変化する、という遷移（サクセッション）理論が背景になっている。それは、要するに、「主体と環境との相互作用の結果がつもりつもって、まえの生活様式ではおさまりきれなくなって、つぎの生活様式へうつるといふ」「主体・環境系の自己運動」である。そして「第

一地域というのは、ちゃんとサクセッションが順序よく進行した地域である。そういうところでは、歴史は、主として、共同体の内部からの力による展開として理解することができる。いわゆるオートジェニック（自成的）なサクセッションである。それに対して、第二地域では、歴史はむしろ共同体の外部からの力によってうごかされることとおおい。サクセッションといえば、それはアロジェニック（他成的）なサクセッションである」。これはきわめて有効な「比較文明論」の視角であるし、現在でも同様の価値を持つと思われる。しかしながら、氏の論文が発表されてから25年以上も過ぎた現在、氏の具体的な分析には慎重な留保が必要とされるのではなからうか。

### 3. 大塚久雄・世界史の横倒し論（1964年）

#### (イ) その基本的な発想

大塚久雄氏は、1964年に発表した論文「予見のための世界史」の中で次のようにコメントしている。「いうならば、現代世界のうちには、縦の世界史が、さまざまな、歴史的また地理的な要因による歪みを伴いながらも、いわば横倒しになくなって同時に現われているのである。もちろん、それが現代世界のすべてであるなどというのではない。そうしたいわば横倒しにされた世界史という姿で、すぐれて現代的なものとの絡み合い、押し合っているのが、まさに世界史的現代の特徴ではないか、というのである」。きわめて含蓄の多い文章なので、簡単に要約することはむずかしいが、要するに現代の理解は、歴史的解ぬきではできないのであり、またそうした形でしか真の理解には達しえぬのが、現代なのであり、結局「世界史的現代」とよんでもよい、とするのである。だとすると、われわれが、世界の諸地域の文化を類型化する場合の有力な視点になってくる。

#### (ロ) 具体的展開

上述の発想の契機は、第二次世界大戦以後、とくに60年代における植民地の政治的独立（植民地体制の崩壊）、それにもなって経済的自立の問題（国民経済の形成）、なかんづく1964年第1回国連貿易開発会議に集中してみられるような南北問題の登場である。「四世紀余にわたって流れつづけてきた滔々たる大河（非ヨーロッパ地域に向かって膨張しつづけてきたヨーロッパ的勢力）」が、今や「その流れを止め、いや逆流を開始さえしたような感にうたれる」のであり（なお、1971年のニクソン声明以後の第三世界の新しい動きを「新しい価格革

命」としてとらえ直し、大塚氏と同様の認識をしている例として、宮崎義一『新しい価格革命 — 試練に立つ現代資本主義』75年刊を見よ）、そうであるとすれば、発展途上国をとらえる時にはもはや、単に独占資本主義あるいは帝国主義の理論のみでは十分ではない。むしろ、発展途上国それ自体に注目せざるえないのである。確かに植民地体制がおしつけた爪痕なり歪みはあるのだが、それは前近代的・伝統的経済体制（その中心は土地制度）およびその利害の担い手であるその社会の内部の支配層によってささえられていたのである。とすれば、われわれはここを分析することができるのであり、その際の基準としては「縦の世界史」、つまり比較経済史的研究から導き出されている発達段階ないし移行論が有効になってくる。具体的にはこれは、アジア的貢納制→奴隷制→封建制→資本主義<sup>W</sup>であり、こうした「縦の世界史」が、いわば「横倒し」になってしまっているのが、現代だとするのである。したがって、文化を歴史的な観点から類型化する場合には重要な視点を提供してくれるのである（教科書にみられるのは、せいぜい、四大文明との歴史的関連である）。

#### (4) 比較経済史的アプローチ

いわゆる大塚史学は、戦後の歴史学界に様々な問題を提起してきた。資本主義の「型」の問題は代表的であろう。同じく資本主義として機能しても、その主体の系譜も異なるし、またエートスもちがう。日本の近代化の特性を考える時には西ヨーロッパ・アメリカとのこうしたところからの比較は大切なことである。これらは戦前の氏の成果であるが、さらに戦後の研究として封建制から資本主義への移行を中心とする共同体論、共同体内分業→局地的市場圏→国民経済の形成へと展開する市場論（移行論）などがあるが、その中で重要な課題の一つとして共同体がどのように崩壊していくのか、その際、土地制度はどのように変わっていくのか、ということがある。比較経済史的には、土地制度の根本的革新（資本主義的私的所有）がなされぬ限り、工業生産力の順調かつ飛躍的な上昇（古典的な産業革命）が困難なのだし、仮りにそれができたとしてもどこか、対社会的には無理が生ずることになる、とされる。そうした史的展望は、結局は、共同体の中での生産諸力のあり方、とくに土地占取の諸形態に依存するのである（アジアの形態、古典古代的形態、ゲルマンの形態）。

われわれが、世界の諸地域の文化を類型化していく時、つまり世界史の横倒し

現象として認識し、そしてそれを縦の世界史としてとらえ直す時、平板な空間的な類型から立体的なダイナミックなそれへと転換する視点が与えられるように思われる。

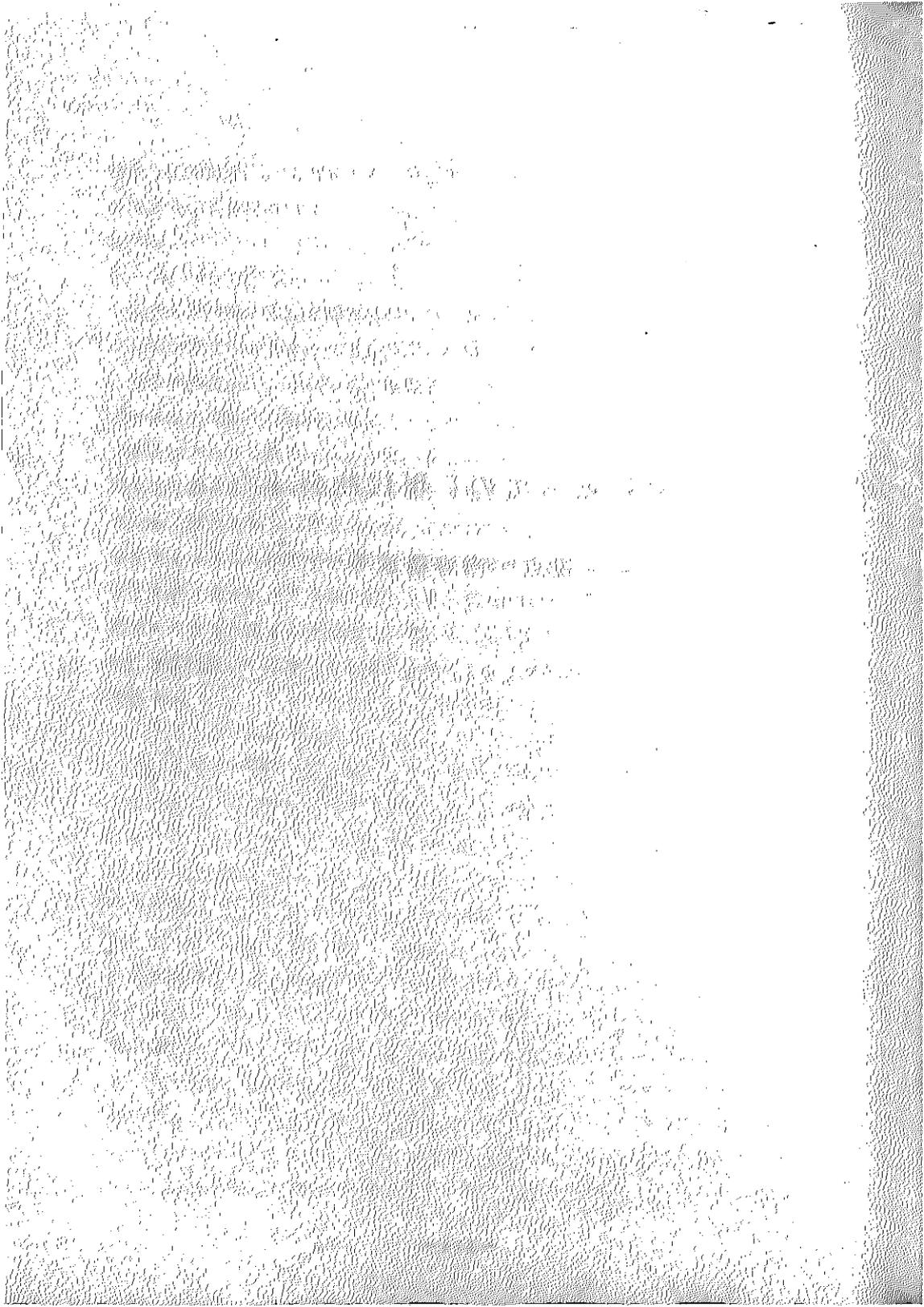
## 5. おわりに

世界の諸地域の文化を類型化していく基本的視点は、上述の二つには限らないことはいうまでもない。ただし、「風土」概念を含めて大切なアプローチだと考えるのである。ところで、梅棹氏・大塚氏ともに「共同体」という基礎的観点から次の段階への移行を考え、とくにその際、「共同体」内部にその革新の力があるかどうかを問うているのは、きわめて注目される。学問分野も異なるし、共同体に関する定義もちがう。そして、何よりも日本の位置づけ、というところで大きくずれるお二人ではあるが、しかしながら文化なり文明（その基礎は生産過程である）を比較するとき（だから、類型化できる）、それは歴史的にならざるをえず、またトータルな分析をしていくときには、何らかの形で「共同体」を問題にせざるをえないのである。そして、そうすることで、われわれの学習は、第二学年以後の「地理」および「世界史」へとつながっていくように思われるのである。

特 集

「私にとっての『現代社会』」

—— 視点・内容構成等 ——



# 「現代社会」の授業をどう改善していくか

都立青梅東高校 伊藤 駿二郎

新科目である「現代社会」について、文部省や教育委員会の主催する研修会が何回か開催され、また、先進的なすぐれた実践が積み重ねられ発表されているにも拘らず、新科目の意図がかならずしも現場の教師に浸透し定着しているとはいえない。「現代社会」が設けられていない学校もまだ少数あり、設けられていても最高学年に置かれたり、あるいは1、2学年にわたって分割履習をさせるといった変則的な履習形態をとっている学校もある。また、授業の内容や指導形態についても、「現代社会」の内容を政経的分野と倫社的分野に分けて、<sup>1)</sup>別な教師が担当し、従来の「政経」・「倫社」と同じ取り扱いで授業を進めている学校もある。

このように「現代社会」が、設置の意図にそって容易に定着しない理由としてはいろいろ考えられる。例えば、教師の研修機会の不足、校務多忙などによる授業準備時間の不足、生徒の興味・関心の多様化などあげられるが、最大の理由は、教師の「現代社会」に対する偏見・無関心・消極的な態度であろう。

現在、私は「現代社会」を担当していないが、社会科教師としての体験と教育現場における教師の意識傾向の実態を踏まえて、「現代社会」の実践を進めるうえで教師の姿勢とその方向について私見を述べたい。

## 1. 高校教育に対する現状認識を深める

「今の生徒は教科書もろくに読めない」とか、「こんな学力の低い生徒は高校にくる資格がない」といった言葉を職員室でよく聞く。教師の単なる愚痴として聞いてしまえばそれまでだが、しかし、その教師の意識の中には「昔の生徒は良かったが、今の生徒はだめだ」といった旧制中学校や初期の高等学校時代に対する郷愁と、今日の高校教育に対する認識不足が潜んでいる。

第二次世界大戦後、わが国の社会や国民の意識は経済の高度成長などに伴って大きく変化し、その一つとして高等学校への進学率も急上昇した。そのため、最近の高等学校には、1950年代の高等学校と比較しても学力、進路、関心などの点ではるかに多様化した生徒が在学するようになった。生徒が変われば指導内容や指導方法も、それなりの対応と工夫が必要であることは当然であろう。この辺

の現状認識、つまり頭の切り替えのできない教師、いやしようとしなない教師が意外と多い。

このことは、いい換えれば新学習指導要領の基本的な考え方の把握が不足しているといってもよい。新学習指導要領の基本となる考え方は、昭和46年に中央教育審議会が出した「今後における学校教育の拡充整備のための基本的な施策について」という答申の中に示されている。そこで提示され強調されている課題は、①今日の学校教育が量の増大に伴う質の変化にどう対応していくか、②知識偏重のつめこみ教育の反省に立って、人間性豊かな教育をどう実現していくか、③生活教育の観点に立って学校教育をどう位置づけるか、などである。

現代の高校教育の位置づけを理解するためにも、この答申の精読をすすめたい。

## 2 教師の専門的閉鎖性を打破し視野を広める

新学年の担当教科を決める際に、自己の専門性を主張して複数の科目担当を嫌う教師が多い。たしかに、複数の科目を担当することは教材研究に負担がかかり辛い。自分の専門とする科目だけを毎年教えているのは楽である。この辺から、「現代社会」を政経的分野、倫社的分野に分けて、別な教師が担当するといった発想が生まれてくる。

そこで、社会科の教師の専門性とは一体何であろうか。それは、地理・歴史の専門ということもあろうが、最も大切なことは社会を多面的・総合的に把握し指導することのできる力量であろう。「現代社会」の目標は、「広い視野に立って、現代社会に対する判断力の基礎と、人間の生き方について自ら考える力を養う」とされている（学習指導要領）。社会科の教師は、狭い専門性にとじこめるのではなく、もっと視野を拡げ、社会科教師としての実力を涵養すべきではなかろうか。

私はかつて中学校に在職したことがあるが、中学校では1学年地理、2学年歴史、3学年公民と学年持ち上がりで同じ教師が担当するのが常である。「現代社会」は、それほど高度な専門的事項の指導が要求されているわけではなく、むしろ中学校での学習のまとめがその役割の一つとして期待されている。したがって、「現代社会」の授業においては、4単位を一人の教師で担当し、自己の専門外の事項についても研究を深め、現代社会を多面的・総合的に見ることのできる目を教師自身が養うことが大切であろう。

### 3. 生徒の発想を大切に、生徒と共に学ぶ

わが国の教育では、従来、指導する者（教師）が指導されるもの（生徒）に知識を教授し伝達するという、いわゆる教師主導型の授業が一般的であった。しかし、「現代社会」の授業は、このような授業における教師と生徒の人間関係では、所期の目標を果たすことはできないであろう。「現代社会」の授業をより目標にそった豊かな授業にするためには、教師も生徒と共に学ぶ態度が必要である。生徒と共に学ぶということは、教師が生徒の知的レベルまで下がるということではなく、生徒の発想を大切に、生徒と共に考える中で生徒の思考を高めていくことである。

社会に対する感じ方・考え方は1つではない。それぞれの人間が育った環境や世代によって大きな相違がある。学習の中で相互に異なる意見を出し合い、それを比較・検討し合ってこそ、社会や人間の生き方について確かな目を養うことができる。「現代社会」の学習においては、この観点がとくに必要である。また、学習の中で生徒各自の意見が取り上げられ大切にされることは、生徒の学習意欲を高めることにもなる。

### 4. 教科書をもとに教材化の研究を深める

ある教師に、教科書の観点を聞いたところ、「共通一次試験に備えて、できるだけ盛りだくさんの教科書を採択しました」という答えが返ってきて考えさせられたことがあった。盛りだくさんの教科書を共通一次試験を目指して教えたのでは、「現代社会」の目指す目標も何もすっとなってしまう。雑多な知識をつめ込まれる生徒こそ迷惑である。「現代社会」の授業では、教科書を教えるのではなく、教科書を基本に据えながらも生徒の学習意欲を高めるような精選された教材・資料を使って、生徒に感動を与え考えさせていくことが必要である。つまり、地域性・現代性に富み生徒の発達段階に適合した諸資料の教材化が是非とも必要である。そのことによって、生徒の学習意欲は高まり、よりふくらみのある豊かな授業展開が可能となるであろう。

### おわりに

「現代社会」の実践を進める上で必要な教師の姿勢と方向について私見を述べてきたが、教育実践で最も重要なことは大上段に振りかぶらず、一步一步自分ができることから実践を進めていくことが大切である。例えば、生徒の実態調査な

どをもとに、教科会などで生徒の実態分析を行い、そこから生徒の見方、授業や評価のあり方などを考えてみるのもよい。市役所の市史編さん室や福祉課などを訪ねれば、生きたすばらしい資料が得られる。また、地域の「祭り」があれば行ってみよう。そこから地域性を媒介とした生徒とのふれ合いも生まれ、地域理解に大いに役立つであろう。

さらに、雑誌や新聞資料なども心掛け一つでいくらでも良いものが発見できる。私の経験では、毎日曜日に朝日新聞の声欄に特集される「若い世代」など利用の高いものである。

何れにしろ、社会科のすべての教師が偏見や消極性を克服して、まずできることから実践の第一歩を踏み出すことが大切である。そこから「現代社会」のすぐれた実践が切り開かれていくであろう。

## 「現代社会」を考える

都立小岩高校 小川 一郎

### 1. 導入を工夫する

導入への工夫を重点的に行うことが、「現代社会」を成功させるために、先ず必要だと考える。それは身の回りの理解しやすい具体的な題材から出発することである。具体から抽象へ、抽象から具体へ、という繰り返しは、どんな科目にも必要なことであるが、とりわけ「現代社会」では重視されなければならない。興味や関心のままで終ったり、身の回りのことが身の回りのことだけで終ったり、具体が具体のままで終り発展しなとなれば、遠い廻る経験主義といわれ、戦後初期の社会科が受けたのと同じ批判を受けることになる。

「財政」を教えるにも、「財政とは……であり、このような種類のものがある」と始めるより、新聞記事の税金のはなし、増税案あたり、ビール一本の税金や新しい物品税としてミニバイクが考えられていることなどから「財政」の授業に入っていった方が生徒の興味や関心を惹くことができる。これをどのように発展させ、財政のどこをどのように抑えるか、それが授業者として難かしいところであ

り、工夫のしどころである。

その際、生徒の心理的発達段階や理解度はどうであるか、興味・関心の傾向がどうであるか、常に理解するように心がけることが、教材を練ることに連がる。特に「政治・経済」は3年生で教えられていた学校が多いし、「倫理・社会」は2年生で教えられていた学校が多く、それらの先生が1年生で「現代社会」を教えるのだから、戸惑いを感じるに違いない。その上に、中学校の「公民」で習ったことを利用していくこと、選択科目との関連を考えること。これらは授業の導入の段階で充分考慮されねばならない。

導入の成功が「現代社会」の授業の成功の80%がたを占めているように思えてならない。

## 2 授業内容の構成と教師の学習

先日(58, 11, 25)全倫研秋季大会が学芸大学附属高校で行われた。その時の分科会での話題の一つに、「現代社会」には歴史的な背景が欠けているのではないか、ということが出され、「生産の拡大と現代の企業」を教えるにも、産業革命から経済の発達の筋道を教えなければ、現代の経済のすがたを本当に理解させることはできない、ということや、「労働条件と労働関係の改善」を教えるにしても、労働組合発達の歴史を教えなければ、生徒に理解させることは難しい、ということがかなり強く主張された。一方では、そのように教えていたら、時間が不足してしまわないか、という意見もあった。

私は思うのだが、教師の学習が、そのまま授業内容の構成になるのではないから、教えるものにとって必要なことが、そのまま授業に必要ではないので、その辺の混同があってはならないと思う。ここでは何を教えるべきかポイントを抑え、そのために教師は納得のいく学習をし、生徒の理解度に合わせて教材を練ることが必要なのである。その上で、この程度の歴史的背景を教えることが必要だというならそれもよいが、はじめから歴史的背景は必要だと断言するのはどうだろうか。教師は歴史的な掘り下げも学習しなければならないし、他の分野の学習もしなければならない。そうしないと、「広い視野に立って、現代社会に対する判断力の基礎と、人間の生き方について自ら考える力を養う」(学習指導要領)ことはできない。

## 3. 知識をどのようにすじ道たてて身につけさせるか

教科学習は、知識をバラバラでなく、組織された知識として身につけることである。しかし「知識の組織」には二つの意味があることがわかる。一つは、学習者が学習しはじめる前に、誰かがすでにつくり上げている知識の組織であり、他の一つは、学習者自身が自分の経験を組織立てたものとしての知識の組織である。前者は知識の对象的知識であり、後者は知識の主體的な組織である。

「現代社会」はどちらを重視しているのだろうか。後者を授業においても重視しなければと考えているのではなからうか。知識を身につけていく学習はどうあるべきか、人によっても違うと思うが、その人が、生活のなかで直面する問題を、自分で知的に解決できるばあい、その人は知識を身につけていると私たちは言うが、学習者が直面する問題を解決するにあたって、知識の主體的な組織、すなわち予測と観察だけでは難かしく過去の経験を思い出さなければならぬ。学習者たちの経験は貧弱であって、問題の効果的な解決の素材として活用するためには不十分である。そこで对象的な知識が必要になるのである。すなわち、正しく組織された経験の内容、知識の对象的組織を学習することによって、過去の経験の知識と、自分が行い推理的な予測や実証的な観察とを併せ用いて、問題を有効に解決することができるのである。また、そうすることによって経験を主體的に組織立て、身についた知識を学習することができる。このような考え方は、系統的知識と経験学習の関連と考えることもできる。これらのことを頭に入れ、題材により、生徒の理解度などにより、その関連を考えていく必要がある。

#### 4. 思想の学習と人物学習

「倫理・社会」は思想家を扱い、その思想家の基本的な考え方を教えた。しかし、思想家そのものを教えるのではない、とよく言われた。ソクラテスを通して「よく生きる」ことを教えるのであり、ソクラテスは忘れてしまっても、生き方として「よく生きる」態度が身につけばよいとされた。それはその通りかも知れないが、ソクラテスをよく理解することによってソクラテスの人生観もよく理解できるのである。人間不在になると「生き方」の生命が失われてしまうような気がしてならない。「無知の知」も「死に対する態度」もソクラテスの魂によってつながっている。

「現代社会」では、あまり思想家は出てこない。「倫理・社会」と同列に論じることができないが、必修の科目として、人生や社会のあり方を考える点では

同じである。

社会のいろいろの事象は、それぞれつながりを持っており、人間の考え方や行動も一人の人間のなかでつながりを持っている。それらの事象や行為が他とどのようなつながりのなかで起こり、とられたものなのか考察することを忘れてはなるまい。これを怠ると徳目主義になる必要がある。徳目やテーマがあってもよいが、抽象化されたものとしてだけであってはなるまい。

## いまだ試行中なり・現代社会

共立女子高校 館入 慧子

### 本校事情

公立学校より広範な地域から集まっている生徒に向け、地域学習をどのような方法で効果的にするかが、担当者にとっての課題であった。清瀬高校の研究授業で得た方法を、いざ本校でとなると組織上、実現は遠い。

1クラス50人余、12クラス編成。現代社会が、二学年にわたって実施する科目として本校では設置しているため、講師を含め、担当者は他科目を併有して、7、8名の教員構成となる。私は、58年度、二学年の第二編で教科活動に参加

させて頂いた。学年全体で見学に出るとい  
う企画が持ちにくいので、L・L教材に勢  
い期待がかけられる。

57年度一学年の第一編でのL・L導入授  
業は、器材のセッティングの手順の上で、  
多少の難点を抱えながら、12クラス平等  
に一応は役立てた。取材、報道性のある内  
容は、教師間の個々の趣味や、テーマに対  
する意識の違いが介入しないので、割合導  
入が簡単で、教材の処理も客観性ももてる。  
文化論の教材となるとテーマが同じでも、

#### 本校での現代社会

一年 第一編 担当者 4名

二年 第二編 担当者 4名

#### 学 級

各学年共に 12学級

人 員 50～53名

#### 科目配分

一年 必修 現社 2単位

世界史 2単位

二年 必修 現社 2単位

日本史	3単位	教科書の内容が各社各様であると同様、教師間でも教材選び、教材に見る焦点、内容の拡がりに対する考え方が異なってくる。予め、教師間で、教材、内容と導入、展開を検討し、目標を達成できるかを話しあっ
選択 世界史	3単位	
地理	3単位	
三年 略		

て、合意点を見出すことから出発した。生徒全体に持たせている副教材を各自使用した部分は、教材研究会で報告し合って参考に供する。共存しにくい部分をなくす配慮の一つである。

### 私学，その特殊性を生かして

第二編の夏季休暇前の焦点は、民族の文化であった。週一回二時間の授業で、スポーツ大会、修学旅行、二回の定期考査の行事予定が入るので、8～10週の学習時間となる。東書第4章、文化と青年、配当20時間がほぼ前期の予定となった。「現代社会の人間の生き方」の「人間生活における文化」に見る項目、特に「日本の生活文化と伝統」を軸に、課題学習を試みた。教師間の考え方の違い、取りあげ、まとめ方の違いを越え、何等かの成果を希望的に考える立場で、お互い肯定的にチームワークをとる方向で努力、成果を実のらせたいと願って実施してみた。自ら調べ、感じとり発見するという楽しみを味いながら、生徒自らが、「人間の生き方の基盤となるものの見方や考え方……人間の日常生活の仕方として個人の生活にかかわっている問題」を考えさせる手がかりを発見させる為の課題であった。能力、経済面で恵まれた共通点を持つ私学の生徒の立場でのフィールドワーク学習は、機動性を期待していいのでは、と思う。

調べる種目は三点。この中から、(1)か(3)を選択し、(2)は必修。(2)については五月から予告していたので、手回しよく七月に入ったら提出した者もいる。

- (1) 「祭り」 (A)か(B)を選択する。 (A) — 同区内に住んでいる人及び、興味を持つ人を加えグループ研究。4～6人とする。 —

神田明神祭り、浅草三社祭り、鳥越神社祭り、深川の富岡八幡祭り

- (B) — 個人研究 — 住んでいる町の神社、関心を持つ神社、両親の郷里にある神社等の中から一つ。

**学習事項** — 祭神は誰か。何の守護神で、神社の建立は何時・縁起物語・祭りの特徴、祭りとその地域の住民及び産業、商業と、どのよ

うな連帯性を持ってきたか、その果して来た役割を考えよう。

- (2) 先祖代々の家業、親から子へと伝えられる仕事に携わっている人、友人などの話を伺ってみよう。ないしは、年輩者、及び何らかの経験者から話を伺うのもよい。語られた話が、何時頃のものか、何才位の世界か、インタビューに応じて頂いたのはいつか、という記録も必要

- (3) 能、歌舞伎、神楽その他、日本の伝統芸能について調べよ。

結果は、九月中に揃った。写真を写し、パンフレットを集め、インタビュー、参考資料の照合という、各テーマ共に多彩な内容の成果をレポートに収録している。九月の分科会では提出されたままのレポートを御高覧いただいているが、分析して興味あるのは、(2)のテーマである。57年度、高二倫社で、「父兄の機関誌」に載っていた文章を教材にした。耳から聞く話は、時代遥かて、嘲笑的な受けとめ方をしている感があったが、当事者から直接聞き、文章を自ら作るとなると、同一世代でありながら、全く違う感想、反応を示している。学びは大きかったらしい。調べる喜び、ユニークな内容をまとめて「認められる機会を得た喜び」を感じた生徒もいた。家庭や学校で反抗娘として暮して来た生徒が、調べた内容から得たものと上記の事とで、自己の生き方を全くと言う程に変えるきっかけを得た。内容そのものの価値の高いものもあり、どのように生徒に還元するかが教師側の課題である。学習確認をさせる目的で、授業中、20分程で「夏休みの学習に学んだもの」というレポートを書かせた。人間の生き方に関わりを持たせながら、それを授業中、折り折りに使っている。

## 〈現代社会〉から「現代社会」へつなぐもの

都立東村山高校 新井 明

M先生。先日おめにかかった時に話題になった高校における社会科教育がはらんでいるアポリアについて、先生はいま教えている大学生の知的状況をみて相当の危機感を抱かれていましたが、高校で「現代社会」という新しい教科を教えている者としてそのことについて今回少し考えをのべさせてもらい批評をうけたいとの考えでお便りさしあげることになりました。

M先生。先日、私は都倫研の第三分科会という研究会で、室田武さんの「原子力の経済学」を文献研究の一つとしてレポートしました。まず手はじめにその時のことから話をすすめてみましょう。先生も御存知の通り、室田さんの本は、81年の日本原電の敦賀発電所の事故隠しが話題になった年に刊行された本ですが、時局論として原発の危険性を指摘したり、相当に高く設定され電力会社が絶対にソンをしないしくみになっている原発料金のからくりを暴露するなどのセンセーショナルなものをもっていること以上にその基本的視点に私たちに対しての重い問いかけを横たえている本です。室田さんに云わせれば、原発は世上宣伝されているような石油に代替するエネルギー源ではなく、逆にウラン採掘から加工までの各プロセスやその施設建設などで迂回的に石油を大量に消費するものでしかなく、文明論的にみても石油文明の範囲内でしかない不経済なエネルギー源ということになります。こんな核兵器と同じ危険性をはらみ、石油を浪費し、その廃棄物の処理すら解決がつかない原発がなぜ推進されるのか。室田さんはそこに経済成長の影を見、その成長を問い直して次のようにのべます。末期的な石油文明を脱するには原発的なゆき方ではなく、逆にエネルギー消費量を減らすマイナス成長にこそある。生命循環のポイントたる水と土に根ざす生活を再構築することによって、GNP成長すれども国減ぶ状態は回避できる。とまあこういうわけです。

M先生。室田さんのこの本は原発批判を明確にしており、さらに経済成長を批判しているため、この本を教室や授業でとり扱うには「公害問題を公教育で扱うには慎重の上にも慎重でよい」（分科会での発言の一つ）という状況のもとではかなりの抵抗と批判が予想されるのです。また内容的にも「著者の考え方や事実はその通りだと思うが、一国経済の運営というレベルから考えるとリアリティが

ない」。「典型的な小国寡民思想だ」、「マイナス成長論はうしろむきの部族主義であり、それを実現させるには強力な独裁制か個人の倫理感に訴えるしかない」などの批判が内在的になされています。また先生からも「それは農本主義だね」ともいわれましたが、にもかかわらず私はこの本のもつ基本的な価値感について話してみたい思いを禁じえないのです。それはなぜか。

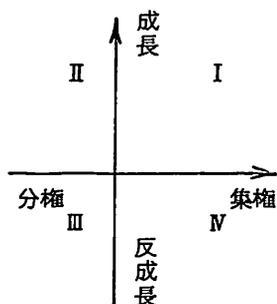
私は室田さんの提起した問題は、いま私たちが — 生活人としても教員としても — 直面しているアポリアを突破できる要素をはらんでいると思うからなのです。では、そのアポリアとは何か。いわゆる「角栄シンドローム」即ち「リンリでマンマが食えるか」という日常的でありながら根源的な問いかけと同質・同根のものであると答えておきます。その問いかけの前で立ちすくんでいる、あるいはすくまされているのがいまの私たちではないのでしょうか。

M先生。話をもう少し具体的にしましょう。原発に対して私たちは学校の間でどう答えているか。例えば教科書。原発は扱われてはいます。しかしそこでは論争や争点を生むシステムそのものを問うことなく、分割された事実に対して目の対症療法を提示するにとどまっています。それだけではなく、検定では必ず常に「エネルギー問題との関連を明記すること」の修正意見がつけられています。この意見がどういう価値感にもとづいているかは云うまでもないでしょう。一種の価値感の密輸入ですね。

こうして作られた教科書で「広い視野に立って」（指導要領）おこなわれる授業、おこなわれれば良い方で原発は教員側はほとんどしりごみしてしまうケースの方が多くはないかと思いますが、その授業がどんな質をもつかは考えただけで明らかなことではないでしょうか。ここにあるのは、いわゆる「ダブルバインド状況」でしょう。即ち「生き方を問う」教科でありながら、問いかける側の生き方なり価値判断をカッコでくくった問いかけがどれだけ生徒にインパクトを与えられるかということです。インパクトどころかかえって判断停止もしくは無視まではそう遠くないものがあるのではないのでしょうか。さきほど社会科教育のアポリアなどと大それたことばを使いましたが、一つ原発をとってもこのような状況で、あとはおして知るべしでしょう。

M先生。私はここで古典的な「理論と実践の統一論」や全共闘風の「自己否定論」をのべようとは思いません。しかし、原子問題にみられるように、それが単

にエネルギー問題や軍事問題だけでなく、私たちの生きている現代社会のシステムそのものを体制選択のあり方として問うだけのひろがりをもっている問題の価値判断を回避してしまうことが社会科教育の「生産性」をどれだけ落としているかは考える必要があると思うのです。室田さんの持つ視点は下図のように図式化できるでしょう。その中で室田さんがどの次元で発言しているかはいうまでもないでしょう。となると、私たちはこのタテ軸・ヨコ軸にどんな価値観を自ら記入し、どの次元に立って生徒に伝えるのでしょうか。



もちろん、weber 流の禁欲や公教育のもつ価値中立性は充分にふまつつも、私たちはもっと大胆に、社会の根源的なシステムを支える価値についての判断を提示してよいのではないだろうかとは私は考えています。それが論争的な事象であればある程、sein に対する sollen を提示せずして何の授業ぞという思いを禁じえないのである。あらゆるテーマについてそれをおこなうことが、社会科学ばなれの傾向や、「リンリ・マンマ論」を突破できる一つの可能性をはらんでいるとすら思っています。そしてそのことが先生のおっしゃる「パラダイムの転換」の実証にもなってゆくのではとも考えます。

M先生。室田さんの本の話から大ブロッキをひろげました。また私の実践例もお話していないのでずい分抽象的になりました。先生のきびしい批判を期待しております。

M先生。室田さんの本の話から大ブロッキをひろげました。また私の実践例もお話していないのでずい分抽象的になりました。先生のきびしい批判を期待しております。

M先生。室田さんの本の話から大ブロッキをひろげました。また私の実践例もお話していないのでずい分抽象的になりました。先生のきびしい批判を期待しております。

# 「現代社会」的私的体験

都立秋川高校 水谷 禎 憲

まずはじめに断っておかねばならない点がある。以下の記述は全く個人的な私的体験に基づききわめて主観的な出来事である。たとえ、学校を通して私が経験したものであっても、教育的配慮や指導において生じた出来事ではない。

## 1.

昨年、生徒の事で非常に感動した事が一つあった。1983年の本校の文化祭で、Gigという3年生徒のバンドが、乱痴気騒ぎをやった。といより、観客生徒を熱狂の渦に巻きこんだ。とはいえ、それ自体はどうという事の問題ではなく、歌をうたって騒いだというだけの事である。

確かに、このGigという3年生徒のバンドは素人の私の判断でも決して下手ではないという事だけはわかる。なかなかやるなと思って聞いていた。観客の生徒達はのっていたし、またのせていた。それだけで充分騒いでいたし、見せていた。ところが、或る歌とともに事態は変わった。観客の生徒は熱狂し暴徒と化し舞台にかけ上り、マイクを奪い唱い出し、駆けずり廻り、ドラムのシンバルを勝手に打ち鳴らし、ヴォーカルを肩車し、パニック状態となった。そして、最後にはヴォーカルは胴上げされた。この歌はアンコールでも唱われ2度ともそういう状態になった。

Gigが、生徒達を興奮させた詩は次の様である。

お前は少しうつむき やせた横顔で笑う  
昔のキズをいやしに どこまでも旅を続ける

ヤクザな町には今日も朝から  
風が吹き荒れて  
気がきいた事なんか何も見つからない  
あの日もお前はイライラしてたのさ  
ほんのはずみでお前はブレーキがきかず走りすぎた

誰もが見えない落し穴に会い

誰もが悲鳴を上げて助けを求める  
暗がりにおびえながら

お前は友達もなく 恋人もつぐらないで  
毎日コンピューターと部屋の中でたわむれてる

おやじはいつも仕事に追われて  
おふくろは鍵を預けて夜の町に出かけていく

真夜中 駅には浮浪者があふれ  
真夜中 お前は一人始発を待つのみ  
淋しさに震えながら。(石橋 俊/トラブルド・キッズ)

## 2

話は1学期に遡る。私は3年担当の舎監をしており、勤務で舎監室へ入っていた。ちょうど何人かの生徒と前出のボーカリストのH君がいて話しをしていた。3年間も舎監として生徒とつき合っていると、相当打ち込んだ話もする。5月の連休でおこなわれた、寮祭・夜行軍が終わった頃だったと思う。H君はこの寮祭もGigで出演していた。(この頃はまだ名前がついていなかった)彼はラグビー部でもラグビー部で彼のコーチをしているのでラグビーの話をしながら、ふと、寮祭で後方空中回転をやった(彼はバンド演奏中にそんな事をやる)話からバンドの話になった。一曲だけ日本語で唱った歌があった事に話が及んだ。『さらば相棒』という歌である事はあとからわかったが、H君は、英語の歌詩の曲をやっても皆わからないが日本語だったらわかるからとこの様な解説をしていた。そしてH君の好きなバンドは何だという事になり、彼はA・R・Bと言った。私は何のことだか訳がわからなかったが、その文字を黒板に記した。

この辺から、実に色々と奇妙な私的偶然がはじまっている。その話をぐだぐだ述べている紙面が尽きてしまうので、簡単にしておく。

私のラグビーの恩人(先輩)の所へ行った時、A・R・Bのポスターが店にあった。生徒で好きなのがいるといった所、彼はそのメンバーの石橋俊と親友で、先日と一緒に飲んだという。そこで、私はA・R・Bというのは勤労青少年に人

111

気あるのだという話を聞いた。寮に戻った時、この話をH君にした。それから夏休みになった。2学期となり文化祭が近づいた。ドラムスのI君が勤務の度に「先生、凌さん文化祭よべないかな」と言う。一カ月近くこの言葉を繰り返していた。その意味はあとからわかった。

扱、その文化祭の前日、リハーサルをどうしても聞きに来いという。リハーサルはモニタースピーカーが作動せず聞きづらかったが、実は彼らはそこでA・R・Bの特集をやったのである。私もはじめてA・R・Bの曲をまあはじめてそこで聞いたわけである。本当はまだその時はそうだという事すらわからなかった。スローで静かな曲もあり、演奏中或る静かな曲を聞きながらベースのK君が(この時ベースが2人いた)「先生、この歌きいていると、涙が出てくるでしょ」と言った。その時の私の顔色を見ながら言ったにちがいない。

戦に追われた人達が  
今夜も波間を漂うよ  
家を焼かれて 故郷を離れ  
子供を抱いた女は何を見つめる

愛した男のアルバムを  
抱きしめ口づけしても  
男達は銃を握りしめて  
異国の地で戦い続け疲れる

流れてく 闇を抜け  
あてもなく 彷徨う  
ポート・ビープル 一体、誰の為に/  
ポート・ビープル 一体、何の為に/  
不安な旅に震える

怒りをぶつけるひまもなく  
錨を降せる国もない  
背い月に 流れてく星に

凍てる手を合わせて祈り続ける

ポート・ビーブル ポート・ビーブル

### 3.

思うに、Gigの彼らは、私を通じて彼らのアイドルに何かのメッセージを伝えなかった様である。これを機に3年生の間にA・R・BというよりGig流行現象が起きた。私は、先述の恩人の先輩の所へは時々近況報告やら相談をしに行く。理髪店を経営しており、多忙な為仕事の終わった夜にしか会えないのだが、何かと相談のつてくれる。こうした話をしている折も鋭く、単なるファッション化しているのではないか、本当に真意が伝わっているのだろうかと疑問を投げかけられた。

実は、この頃からこれらの歌を授業で用いえないかと考えてもいたのである。聞けば、A・R・Bのコンサートでは、彼らの曲に肩をふるわせ涙する子供達がいるという。それと同じように、このGig達の演奏でも、先日3年の予賤会で送られる彼らが最終コンサートをやったばかりだが、同じように、涙をポロポロ落している者がいたという。また、その予賤会で、親父の工場で息子が働くという内容の『ファクトリー』という静かな曲をやった。その時、H君はこう言った。「おれも今、こういう状況におかれてるのかもしれないけれども、今日K先生と話したのですけれども、これからの進路やなんかの事で、いろいろ悩んでいる人が多いと思うし、おれ親父の心がわかんなかったりするんで、……それでは用意した曲をやります」。(最後に、H君と私で『さらば相棒』をデュエットさせられた。)

トラブルド・キッズは、彼らのヒット曲なのかもしれない。先の歌詞をもう一度見ていただきたい。本校生徒は、寮に入るにそれなりの諸事情を持つ。家庭的には色々な意味で恵まれない子供が多い。いやむしろ、この歌詞の様な事が生徒達にとっては、日常一般化しているのかもしれない。これが自分達の状況としては「あたりまえ」で大人がどうこう言ってもはじまらない事になっているのかもしれない。私も彼らの曲を全部知っている訳ではなく、Gigからおしえられた(H君が自分のカセットを一本くれたし、またGigのコンサートのテープもある)限りでの範囲でしかない。生徒達は、ロックミュージックという事で興じている

面もあるだろうし、私はテレビも持たぬため芸能界の事など全然わからないが、少しははやっているのかもしれない。そうした流行の中で雰囲気<sup>雰囲気</sup>に浸っている部分もあるのかもしれない。つまり、Gigがうけるのも、本物に近いからだ。若者がロックコンサートで色々騒いで何かを発散させる、その代償として求められているのだと、こういう言い方もできるだろう。またGigが、A・R・Bを選んだのも私と先輩との関係という事から、彼らのアイドルに接近したかったのだと、こんな風にも言えるかもしれない。しかし、或る生徒がいきなりも言っていたのだが、石橋凌の詩は今の自分達の事だと。また或る者は、「YOU」というテレビ番組みたいだとも言っていた。ほんの少しだが、生徒に石橋凌の詩を試した事があるが、本校の一年生にとっては、難解なようだ。雰囲気<sup>雰囲気</sup>はわかっているようだが、学力的に言ってしかたないかもしれぬ。だが生徒<sup>生徒</sup>というのは感覚的にはよくとらえる。今の彼らにはそれでいいのかもしれない。もちろん、ちゃんと理解している者だっているのだから。

## 5.

私は、これらの詩を教材化できぬかと、これらをはじめに聞いた時に思った。とはいえ授業の進度からは時期を逸しているので、教室へは持ち込めなかったが、先述の様に一年生には少々試みた。といっても教材化したわけではない。といって、未熟な私にこれを教材化できるか、その力もない様に思ひ、その展望は今はない。だが、この一年間、一方では生徒達からこれを学び、また一方では、「現社」の研修会その他で、次の事を学んだ。即ち、「指導内容、方法は、生徒の実態に応じて」「生徒自らの課題として、社会と人間に関する基本的な問題に取り組み、その過程を通して、見方や考え方そして学び方の基礎を追究し、思考力や判断力を育てていけるように考慮する」生徒が自らの課題として取り組む学習として展開される事が根本的に要請されている点である。さらには、生徒の心の琴線に触れるような、教材・資料が求められ、生徒のニーズから出発して生徒の中へ入っていくそうした指導の内容と方法が、とにかく言葉をかえ場所をかえながら幾度となく聞かされた。

私の一年間のGig体験とは、まさに“現代社会”の出来事であり、それが生徒達の実態なのである。自分達の事をうたった詩に涙を流し、これが今の自分達だと平気で言う生徒達。これはこれでそのままに聞かれる方がいいのかもしれない

とも思う。小賢しい教師のさかしらなど介入される事なく聞かれそしてすたれていくべきものかもしれない。がともかくも以上が、私自身の全く個人的な“現代社会”的な私的な体験の内容なのである。「現社」は一年生“Just a 16 本当は誰も何も知らない。Just a 16 本当は俺もわかあじゃない”(Just a 16 より)

## 「現代社会」授業覚え書き

都立豊島高校 葦 名 次 夫

「社会の変革期において、その時代の問題点や課題が明確になり、人々の認識も深まる」と、社会学者カール・マンハイムは名著『変革期における人間と社会』で述べている。同様に教育課程の移行期に新科目「現代社会」と取り組むことによって、今まで見えにくかった授業のあり方に気づくことも多い。そこで、その気づいた点のいくつかを、覚え書きの形で記してみたい。

### 1. 初心忘るるべからず

昔、経済学の授業で、効果逓減の法則というものを教わった。空腹時の最初の一個目のじゃがいもの価値は極めて高いが、食べ続けるとじゃがいもの有難味も次第に薄れてゆく、と。授業も同じようだ。「現代社会」の新しい分野の処女授業は、ハット気がつくこと、反省すること多く“ときどきするほど刺激的”だ。「どうもうまいかない」と手を加え工夫し、いろいろ試みる。そこにまた発見の楽しさもある。授業創造の生産力(?)の最も高い貴重なひとときである。

一方、何回か試行錯誤をくり知し、授業も安定し「ま～、この形でいいか」と思ったとたん、恐ろしいほどマンネリ化し、固定化する。よほどの自覚と努力がない限り、できあがった自分の授業の型を自分で突き崩し新たに創造することは難しい。その意味で「現代社会」に限らず、未知の苦手の分野を重荷とせず、初心の新鮮な緊張感の中で、一期一会の発見と創造の場とすべくチャレンジする気概を持ち続けたい。

## 2 「案ずるより生むが易し」と「学問に王道なし」

火事場の馬鹿力というが、「明日、新しい授業がある」という切迫感があると、授業案づくりは効率的に進む。何を話しどり味つけするか、いろいろアイデアが不思議に浮かんでくるものだ。そして「ブディングの味は、食べてみないとわからない」授業をし、生徒に語りかけていく中で、内容項目の自分自身の理解が実感として身につく。また、最初の授業案のイメージが次々修正され、自分の授業も変わっていく。「現代社会」の苦手な分野は、ついおっくうでしりごみしてしまいが、「案ずるより生むが易し」、まず、ぶつかって授業をしてみることが早道でもあるようだ。

www

しかし一方では、十分な準備と蓄積のない授業は自分でもすぐに物足りなくなる。「学問に王道なし」、腰をすえて集中的に深めて勉強することが基本だ。関連した書物を集中的に読み、抜き書きし、メモし、まとめていく作業は、手間・暇かかり労多地道な作業であるが、その過程の中で内容の理解も深まり、授業のイメージもできあがっていく。時間をかけた授業案の内容を精選し、圧縮してこそ、コクのある授業ができるのでないか。「急がば廻れ」の思いも強い。

とはいえ、現実には「時間がない」とつぶやきつつ、「案ずるより生むが易し」と「学問に王道なし」の間を揺れ動く毎日である。

## 3. そこには「何のために？」への答が欠けている。(ニーチェ)

「次の各問いに○×をつけよ。①総理大臣になるための必要条件はお金を集める能力である。②気持がよいことが幸福の状態だ。かゆい水虫の足をかくことは心地よい。それこそ幸福だ。」このような出題もしたいと思いつつ、しにくい。一義的で明確かつ客観的な答があるという試験の原理となじまぬからだ。そのため天皇の国事行為、衆議院の優越というさほど重要とも思えぬ内容が大学入試にはよく出題される。「日本国憲法ではどう定められているか」など制度や用語の知識を問うスタイルは、無難であり、クレームがつきにくいからだ。まことに、試験の原理の呪縛力は根強い。そして、この試験の原理は、教科書や授業にも及び、それにひきずられがちだ。

たとえば、議会制や方法的懐疑の辞書的説明だけなら容易である。だが、「人間をまとめること」あるいは「明晰に合理的に思考すること」の意味や大切さを生徒にも実感としてわかるように説明することは難しい。つい言葉のいいかえに

終りがちだ。そして、用語や制度を辞書的に説明していると授業は成り立っているという錯覚に実に陥りやすい。

だが、それが一体どのような意味があるのか、その根拠や問題を考えることなしには魂のない授業である。「試験に出やすい。教科書にのっている。授業がやりやすい」ので、意味が希薄でも時間をかけて行なっている — そのような惰性と地球の引力にも似た束縛を断ちきり、「この内容は何のために取り扱おうのか」という問いかけを中心に、授業を構成していきたいものだと、しみじみ思う。

#### 4. 情報化時代における手づくりの意味

NHK特集など、秀れたテレビ番組には、その構成の緻密さ、迫真性、訴えかけの巧みさなど学ぶ点が多く、「かなわないな。自分の話よりビデオテープで見た方がよっぽど生徒のためか」と、時々弱気になる。ひいては、「将来、カネ・手間・知恵と総力をかけたNHK「現代社会・140時間決定版ビデオ」ができれば、教師の存在意義は何か」などつい考えこむ。

だが、優れたテレビ番組をみるだけでは生徒にとって物足りない何かがあるはずだ。そして、稚拙でも生身の私達が語りかける授業が、そこに代りえない“かけがえのなさ”はどこにあるのだろうか。それは、私達、教員の個性、味わいともいべきリアリティ、生徒と関るといふ「人格性」、それがかもしだすドラマとしての舞台であるからだ、と言いきれるだろうか。「授業における教師の存在証明は何なのか」ビデオに象徴される情報化社会の進展の中で、そんなことを考えさせる。

その意味で、「現代社会」の資料やプリントは、自分なりの工夫が加わった手づくりの味で勝負したい。プリントでも定期考査でも、自分なりに悪戦苦闘した味わいがにじみでるものであれば、と願う。

#### 5. *Oue sais-je?* (私は何を知るか?)

様々な「現代社会」の分野を取り扱っていると、まことに「井の中の蛙」「葦の髄から」ものを見る思い、*Oue sais-je?* というモンテニユのことばが、切々と胸にしみいる。

たとえば、10年以上、倫社、政経を担当しながら、手つかずに過ぎてきた分野が意外に多い。そこで、この2年間、あえてその分野に挑戦してみたが、基礎的知識、基本的知識が欠落していることを新めて気がつかされた。「政経、倫理・

現代社会において空白の無知の領域が、かくも多かったとは！ —これが偽らざる実感である。

また、政経関係においては、10数年前の知識では急激な社会・国際関係の変化に歯が立たぬことも多い。財政再建、金融の自由化、IMF体制の崩壊、日本経済の国際的位置づけなど。さらに、社会主義論の変遷や日本人論の推移ひとつとってみても、視点や評価の急激な変化に驚かされる。私は昔の新聞の縮刷版や書物などの論調を時折ひもとくことを習慣としているが流行にとらわれぬ不易の精神、“upto date”でありながら時代を超えて貫くものを洞察する眼をもつことの困難さをつくづく感じる。かつての新聞や論壇の知識人が、とらわれ見当違いの論をなしていたことを笑い批判することはたやすい。だが、自分もまた流され、よって立つ視点や判断力がさほど信用できるものでないと気がつく時、背筋にひやとしたものを感じる。

その意味でもモンテーニュの“Oue se je?”の柔軟な見方を少しでも身につけ、的確な判断力を養っていきたいと思う。

## V 東京都高等学校倫理・社会研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校倫理・社会研究会ともいいます。
2. (目的) この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
  - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
  - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
  - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
  - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
  - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
  - (1) 会長 (1名)
  - (2) 副会長 (若干名)
  - (3) 常任幹事 (若干名)
  - (4) 幹事 (若干名)
  - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行ないます。
  - (1) 役員を選任
  - (2) 決算の承認、予算の議決
  - (3) その他重要事項の審議
9. (年度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わります。
10. (経費) この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかない

ます。

会費は次の通りです。

(1) 正 員 学校または研究団体を単位として年額  
1,500円

(2) 賛助会員 年額 1口 2,000円

11 (細則) この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則を作  
ることが出来ます。

12 (規約の変更) この会の規約は、総会の議決によります。

#### 附 記

1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がみとめ  
られた。
3. 昭和55年度総会で、本研究会の名称を「倫理社会」  
研究会から倫理・社会研究会に変更することがみとめ  
られた。

## 事務局だより

都立三田高校 海野省治

昭和58年度の都倫研の活動も、紀要22集の刊行をもって終了致しました。私の都倫研の事務局長としての仕事もこの原稿を以って終了となります。この二年間、終ってみるとあっという間に過ぎ去ったように思いますが、正直なところやはり激務であったように思います。学校では、担任もあり、授業もあり、そして事務局の仕事もありで、これらの三つの部分のいずれも手を抜くことが許されないと思いつつ、やはり、どこかが犠牲になったのではないかと考えています。

今年度は、私も「現代社会」の授業を担当しました。2単位分で、後半の「倫理」を中心とした内容を扱いました。スタートの頃は、一年生という時期はどのような状況下にあるのか、ということを知ることが中心となっていました。生徒に、どのような言葉で、どのように説明したら理解してもらえるか、どのような授業であれば生徒は生き生きとするのか、何をテーマとして取り上げるのが適切であるのか等々が、次に私自身の課題として浮かびました。そして、課題を与えての自主学习や、教科書を読んだのノート整理、グループ討議とそのまとめ、などを試してみました。「現代社会」はやはり「倫理・社会」とは異なる、というのが私の今の実感です。「倫理・社会」では有効であった学習の展開の仕方が、「現代社会」では必ずしも有効ではない、ということも考慮すべき点であると思っています。59年度も又、さまざまな検討を加えてみたいと思っています。事務局の仕事もパトタッチ出来るのですから、その分検討を加える余裕が出来るだろうと考えています。

最後になりましたが、今年度の都倫研の諸活動を支えて下さった沢山の先生方に感謝を致して筆を置きたいと思えます。

## あ と が き

本年度、研究部に与えられた課題は、新指導要領実施2年目ということで、具体的な授業の積み重ねの中から新科目の指導のあり方を工夫し、新科目の高校教育への定着を見通すことにあったと思われます。このような課題を受けて5月の総会では「現代社会」「倫理」指導の具体的展開が研究主題として承認され、3つの分科会がスタートしました。その後、6月から2月まで延べ12回、87名の先生方のご出席を頂くことができ、不十分な点が多かったとは思いますが、授業の具体例や構想、試案を交換し、基礎的な資料研究も深めることができました。これも出席していただいた先生方の熱意と世話人の先生方の献身的な努力、人間的な交流が自然に深まる研究会の気風、これらが三位一体となって会を盛り上げていったのだと思います。今年度の反省点、今後への課題としては、分科会テーマにもう少し具体性をもたせ、取り組みやすくすること、1年を通して継続性のある分科会活動を行えるよう工夫すること、「現代社会」のいわゆる第1内容項目の研究も深め、この科目のもつねらいに全体的に答えることなどがあげられます。

本年度の研究會活動や、先生方の日頃の研究活動の成果が本紀要です。今回は今年度の研究主題を受けて、「現代社会」「倫理」の授業展開例や方法、工夫などについて執筆をお願いしました。寄せられた原稿はご一読いただければわかりますように、意欲的なものばかりで「現代社会」研究の深まりと本格化を感じることさえできます。またこれまでの倫社教育における蓄積が大きな力となって、「現代社会」研究の中に生かされているように思います。また今年度は、分科会活動と同時に研究例会についても公開授業・研究発表・講演要旨を掲載して、紀要の記録的側面にも配慮して編集いたしました。

最後になりましたが、ご多忙の中原稿をお寄せいただいた先生方、分科会活動を支えていただいた先生方、未熟な私共研究部の者を励まして下さり、ご指導いただいた多くの先生方に心より感謝いたします。

研究部 工藤文三 小嶋 孝 和田倫明 三宅幸夫

昭和 58 年度 都倫研紀要 22.

発行 昭和 59 年 3 月 25 日 [非売品]

発行者 東京都高等学校倫理・社会研究会  
代表 寺島 甲 祐

印刷 恂 稲 谷 印 刷 所  
東京都千代田区麴町 3-1  
電話 (03)234-7851~2

事務局 東京都港区三田 1-4-46  
東京都立三田高等学校  
電話 (03)453-1991

発行者 東京都高等学校倫理・社会研究会

11

11

11

11